国立大学図書館協会ビジョン 2020
評価・総括および会員館の取り組み事例

令和３年６月

国立大学図書館協会
Japan Association of National University Libraries

国立大学図書館協会ビジョン 2020
評価･総括および会員館の取り組み事例
目次

1. はじめに ･･･ 3

2. 国立大学図書館機能の強化と革新に向けて ･･･････････････････ 4
～国立大学図書館協会ビジョン 2020～

3. 国立大学図書館協会ビジョン 2020 に関する評価･総括 ･･･････････ 6
各委員会による評価･総括です。

4. 協会ビジョンに基づく会員館の取り組み ･･･････････････････････ 17
会員館で実施された取り組み事例です。

5. 関東甲信越地区協会の年度ごとのまとめ（令和元年度～2 年度） ････ 122
関東甲信越地区協会では、年末に行う事務（部･課）長会議にて、当年度の近況報告を行っています。第52回（開催日:令和元年 12 月 14 日）、第53回（開催日:令和 2 年 11 月 26 日～12 月 7 日）の近況報告では、協会ビジョンに基づいて報告されています。

6. 近畿地区協会　各館の特色ある活動報告
（平成 30 年度～令和 2 年度） ･･･････････････････ 149
近畿地区協会では、年度ごとに協会ビジョンに基づいた活動報告を作成しています。

no.5（122～148ページ）は非公開。
no.6の一部（p.151,152,173,185,205）は一部写真を非公開。
会員館は会員館専用ウェブサイトで全文を閲覧可能です。
ログインしてご覧ください。

はじめに

平成 28(2016)年 6 月の第 63 回総会において「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて ～国立大学図書館協会ビジョン 2020～」(以下、ビジョン 2020 という)が採択されて以来、協会及び会員館は、それぞれの役割に基づき、各重点領域における目標の達成に向けた取り組みを進めてきました。平成 31(2019)年 2 月には、各会員館の活動報告を「中間まとめ」として取りまとめ、協会ウェブサイト会員限定ページに掲載し、会員館同士で共有しました。

そして昨年、ビジョン 2020 の「一つの節目」である 2020 年を迎えました。協会ではビジョン 2020 の達成度を確認するべく、各委員会においてこれまでの活動の評価・総括を行いました。また、各会員館の取り組みのうち、大学図書館機能の強化と革新に向けた優れた取り組みを募集したところ、多くの事例が寄せられました。一方、関東甲信越地区と近畿地区では毎年、独自にビジョン 2020 をもとにした活動報告を行っています。

この資料はそれらをとりまとめたものです。会員館が相互で参照することにより、各図書館の役割と活動のあり方を再確認し、あるいは見直す契機とし、2021 年から始まる次期ビジョンへの取り組み方を考える一助となれば幸いです。

取りまとめにあたって協力いただいた各会員館、委員会、さらには関東甲信越地区と近畿地区の地区協会に対し御礼申し上げます。

令和 3(2021)年 6 月

国立大学図書館協会

補足
「協会ビジョンに基づく会員館の取り組み」および関東甲信越地区と近畿地区協会の各報告は、取り組みの事例として紹介するものです。なお、「協会ビジョンに基づく会員館の取り組み」は報告された事例すべてを掲載しています。協会として会員館個々の活動の評価を行うものではありません。

平成 28 年 6 月 17 日
国立大学図書館協会
第 6 3 回 総 会

国立大学図書館機能の強化と革新に向けて
～国立大学図書館協会ビジョン 2020～

21 世紀になってネットワーク型のコミュニケーション様式が急速に普及し，知のあり方が大きく変わりつつある。知は相互的なコミュニケーションによって創出されるようになり，それにともなって大学図書館が果たすべき役割も，従来の大学における知の共有と創出への貢献がよりいっそう重要になるとともに，新たなものが求められている。このような状況を踏まえ，国立大学図書館協会は，国立大学図書館機能の強化と革新に向けて，大学図書館の基本理念を次のように定める。

大学図書館の基本理念

大学図書館は，今日の社会における知識基盤として，記録媒体の如何を問わず，知識，情報，データへの障壁なきアクセスを可能にし，それらを活用し，新たな知識，情報，データの生産を促す環境を提供することによって，大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。

この基本理念を実現するために，国立大学図書館協会は，次のように 3 つの重点領域とそれぞれにおける戦略的な目標を設定する。国立大学図書館協会及び会員館は，自らの役割と活動のあり方をつねに見直しながら，各重点領域における目標の達成に向けた取り組みを進める。さらに，2020 年を一つの節目としてそれまでの達成度を確認し，必要に応じてビジョンに対して検討を加えていく。

重点領域 1. 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有

大学図書館は，知の共有という観点から，大学における教育・研究に必要な知識，情報，データを網羅的に提供する必要がある。紙の図書や雑誌等によって構築された従来の蔵書に加え，電子ジャーナルや電子ブック等の電子的リソース，機関リポジトリに収載される研究論文，学習教材やデータといった教育研究成果，さらにはインターネット上にあって誰もが自由にアクセスできる有用なコンテンツをも含む全体を対象として知の共有のための方策を検討し，実現する。

目標 1)教育研究成果の発信，オープン化と保存

国立大学図書館は，大学で生み出される教育研究成果の電子的流通とオープン化を推進するとともに，それらの長期的な保存をはかる。

目標 2)出版された資料の整備と利用

国立大学図書館は，紙の図書や雑誌等の蔵書，契約によってアクセス可能となる電子ジャーナルや電子ブック等の電子的リソース等を適切に整備するようにつとめ，利用環境をととのえるとともに，長期的な利用を可能とする。

目標 3)知識や情報の発見可能性の向上

国立大学図書館は，総合目録データベースをはじめとする学術情報システム基盤を高度化することにより，知の総体を対象として，必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現する。

重点領域2. 知の創出:新たな知を紡ぐ＜場＞の提供

大学図書館は，これまで人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場であり，知を創出する空間であった。これからは，旧来の「館」の壁を超えてその場を拡張し，さらには物理的な場だけでなく，知のネットワーク上に存在する仮想空間を新たな知を創出するための場として活用することにより，教育・学習の質を向上させ，研究活動を支援するとともに，大学と社会との連携を促す。

目標 1)知を創出する場の拡大・整備・提供

国立大学図書館は，人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場を提供し，そのような場を拡張することで，教育・学習や研究を通じた知の創出を促す。

目標 2)社会に開かれた知の創出・共有空間の提供

国立大学図書館は，学術コミュニティに限らずさまざまな人びとが知を媒介として集い，さらに新たな知の創出と共有を実現する場を提供する。

重点領域3. 新しい人材:知の共有・創出のための＜人材＞の構築

大学図書館は，さまざまな能力やスキルを有する人材が混在するハイブリッド（複合的）な人材の集合体を形成することで，大学図書館に期待される新たな役割を果たすとともに，多様な知の共有と創出を促す。そのために，新たな人材の構築が実現できるような制度を整備する。

目標 1)新たな人材の参画

国立大学図書館は，教員，職員，研究者，学生等を含むさまざまな能力やスキルを有する人びとと図書館職員とが一体となり，蔵書の評価や選別にかかる「キュレーション」や人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を促す「ファシリテーション」等の機能を提供することにより，多様な知の共有と創出を実現する。

目標 2)国立大学図書館職員の資質向上

国立大学図書館職員は，これまで培ってきた学術資料に関する専門的知識やメタデータ運用スキルに加え，新たな知識やスキルを習得することにより，学術情報流通環境の変化の中で国立大学図書館に期待される新たな機能を実現する。

国立大学図書館協会及び会員館の果たすべき役割

- 国立大学図書館協会は，これらの戦略的目標の実現のために，国公私立大学図書館協力委員会や大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）等，設置母体の違いを超えた大学図書館間の連携の枠組みを活用するとともに，国立大学協会と協力し，国の支援等も得ながら，海外との連携も含め具体的な活動を立案し実行するための実施体制を整備する。
- 会員館は，協会の活動と連動し，学内の関係部署や他の国立大学図書館をはじめとする国内外の図書館の協力を得ながら，それぞれの大学のミッションや中期目標等に沿うように戦略的目標を選択してその達成をはかり，上記大学図書館の基本理念の実現をめざす。

国立大学図書館協会ビジョン 2020 に関する評価・総括

重点領域 1. 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有	
大学図書館は，知の共有という観点から，大学における教育・研究に必要な知識，情報，データを網羅的に提供する必要がある。紙の図書や雑誌等によって構築された従来の蔵書に加え，電子ジャーナルや電子ブック等の電子的リソース，機関リポジトリに収載される研究論文，学習教材やデータといった教育研究成果，さらにはインターネット上にあって誰もが自由にアクセスできる有用なコンテンツをも含む全体を対象として知の共有のための方策を検討し，実現する。	
目標 1	教育成果の発信，オープン化と保存
国立大学図書館は，大学で生み出される教育研究成果の電子的流通とオープン化を推進するとともに，それらの長期的な保存をはかる。	
評価・総括	
（オープンアクセス委員会） ＜はじめに＞ ・ 前半の 2 年間（平成 28～29 年度）は、ビジョンの実現に向け、オープンアクセスへの取り組み状況を把握するための実態調査と二次調査、及び管理職職員を米国に派遣してのオープンアクセス及び研究データ管理に関する調査を行った。 ・ 平成 30 年の第 65 回総会において、各委員会活動の再点検およびビジョンに基づく協会全体のアクションプランの検討が理事会に付託され、結果として、各委員会に対し、研究データ管理、オープンデータ、オープンサイエンスに関する国の政策動向を踏まえた活動が求められることとなった。そのため、後半の 3 年間（平成 30～令和 2 年度）は研究データの管理・公開等に重きを置いた活動を実施した。 ＜前半（平成 28～29 年度）の活動について＞ ・ 目標 1 の達成には機関リポジトリの活用が不可欠である。そこで、実態調査では会員館に対し、機関リポジトリのシステム、運営、コンテンツの種類別の登録状況、学位論文（博士）の公表、ID 管理、OA への取り組み、研究データ、デジタルアーカイブ、OA に関連する外部組織への関与について等、広範囲の設問によるアンケートを実施した。その結果、会員館における現状を把握することができた。調査結果は、報告書を国大図協 HP で公開するとともに、第 64 回総会研究集会において報告し、共有を図った。 ・ 二次調査では、実態調査の結果とその後の検討をふまえ、（1） 学術雑誌論文（海外）の登録、（2） コンテンツへの DOI 付与、（3） 教員への説明・広報、に関し特色のある取り組みを行っている会員館に対し、追加のアンケートを実施した。その調査結果を、機関リポジトリにおける学術論文等の登録増加に寄与すると考えられる事例として報告書にまとめ、国大図協 HP で公開し、共有を図った。 ・ 上述の 2 度にわたる調査により、会員館の現状把握と課題の洗い出しを行うことができた。また、優先的に対応すべき課題には、参考となる優良事例を見いだし、国大図協 HP への公	

開によって共有を図った。当初は調査によって得られた成果・知見に基づく普及活動やフォローアップ調査を行う予定であったが、既述のとおり、後半の 3 年間は活動の中心が研究データの管理・公開等に移ったため、実施しなかった。

・ 管理職職員による海外調査では、先進的な事業を行っている米国大学図書館におけるオープンアクセス及び研究データ管理に関する取り組みの現状を明らかにし、意義のあるものであった。調査結果は、第 65 回総会研究集会において報告するとともに、『大学図書館研究』誌にて発表した。

＜後半（平成 30～令和 2 年度）の活動について＞

・ 平成 30 年度は、会員館がオープンサイエンス・研究データ管理等を進める上での指針とするため、2 つの文書を作成した。「機関リポジトリの再定義について」では、機関リポジトリの収録対象として、学術文献だけではなく、各機関の状況に応じて「研究データ」や「デジタル化された研究資料」にも取り組むことが必要であることを示した。また「オープンサイエンスに向けて国立大学図書館が担う具体的役割」では、各会員館がオープンサイエンスに向けて研究データの管理・公開支援に取り組むにあたり、どのような具体的な役割が在り得るかを示した。これらは国大図協 HP で公開するとともに、第 66 回総会研究集会等で報告し、共有を図った。

・ 令和元年度は、会員館がオープンサイエンスを推進する上で足掛かりとなる 2 つの文書を作成した。「研究データに関する研究者の実態とニーズの把握のための調査の手引き」は、オープンサイエンスの推進のためには、まず自らの機関で行われている研究の特性を正しく把握することが肝要であるとの認識から、調査の手引きとなるよう作成したものである。作成に先立ち、会員館に対してアンケート調査を実施し、参考とした。また「研究データのオープン化とそのメリット」は、研究者に対して研究データオープン化のメリットを伝えるための資料として作成した。

・ 令和 2 年度は、各会員館等が実施した事例を共有するため、「オープンサイエンス及び研究データ管理に係る参考となる取組事例」を作成した。

・ これらの文書は全て国大図協 HP で公開した。適時に情報を提供したいという考えから、「報告書」という形にこだわらずに発信に努めた。いずれも、各会員館におけるオープンサイエンス及び研究データの管理・公開等に係る活動を推進する上で、それぞれ意義のあるものであった。なお、これらの発信に対して会員館からフィードバックを得ることが難しかったため、会員館の方針や活動にどの程度影響を与え、活用されたのか、また問題点はあったのか等について、今後の検証が課題である。

＜今後へ向けて＞

・ オープンアクセス・オープンサイエンスの推進には、国立大学図書館協会としてオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）や大学 ICT 推進協議会（AXIES）等の関連団体との強い連携が不可欠である。当委員会も平成 30 年度に JPCOAR 及び NII との意見交換会を実施した他、随時の情報交換を行い、互いの活動や成果に影響を与え合っている。今後も連携を継続することが必要である。

・ 「＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有」は、引き続き、国立大学図書館協会にとって重要な課題であり、研究データ管理も含めて、さらに教育研究成果のオープン化を推進することが必要である。これに係る人材を育成し、会員館の取り組みに資する情報を適時に共有する方策を検討していくことは次期に引き継ぐべき課題である。

目標達成に向け実施した取り組み

（オープンアクセス委員会）

＜平成 28 年度＞

・ オープンアクセスへの取り組み状況に関する実態調査
［報告書］ http://www.janul.jp/j/projects/oa/OA report 201703.pdf

＜平成 29 年度＞

・ 平成 28 年度実態調査の結果を踏まえた二次調査（※報告書作成は平成 30 年度）
［報告書］ https://www.janul.jp/sites/default/files/OA report 201903.pdf
・ オープンサイエンス関連管理職職員海外派遣事業
［報告書］ 西岡千文，杉田茂樹，山中節子．米国におけるオープンアクセスと研究データ管理．大学図書館研究，2018，109．https://doi.org/10.20722/jcul.2007

＜平成 30 年度＞

・ 「機関リポジトリの再定義について」の作成
https://www.janul.jp/sites/default/files/janul redefining the institutional repository 20190805.pdf
・ 「オープンサイエンスに向けて国立大学図書館が担う具体的役割」の作成
https://www.janul.jp/sites/default/files/janul specific role for open science 20190412.pdf

＜令和元年度＞

・ オープンサイエンス・研究データ管理に関する取組状況調査
・ 「研究データに関する研究者の実態とニーズの把握のための調査の手引き」の作成
https://www.janul.jp/sites/default/files/OA researchmethod 202004.pdf
・ 「研究データのオープン化とそのメリット」の作成
https://www.janul.jp/sites/default/files/OA reportA 202004.pdf

＜令和 2 年度＞

・ 「オープンサイエンス及び研究データ管理に係る参考となる取組事例」の作成
https://www.janul.jp/sites/default/files/OA report 202103.pdf

「活動の振り返り・まとめ」の作成

目標 2	出版された資料の整備と利用

国立大学図書館は，紙の図書や雑誌等の蔵書，契約によってアクセス可能となる電子ジャーナルや電子ブック等の電子的リソース等を適切に整備するようにつとめ，利用環境をととのえるとともに，長期的な利用を可能とする。

評価・総括
（学術資料整備委員会） ・ 国立大学図書館協会シンポジウム（参加者：125 名）において、会員館における電子ジャーナル購読に関する取り組み事例を共有し、電子ジャーナルの継続的かつ安定的な整備のために各館が考慮すべき点について意見交換の場を作り、各館が主体的に問題解決に向けて取り組むための情報提供を行い、参加館の課題解決に貢献した。また、『大学マネジメント』電子ジャーナル特集号により、電子ジャーナル問題について広く大学関係者や社会に向けて問題提起を行った。 ・ 大学図書館で取り組むべきデジタルアーカイビングについて検討を行い、デジタルアーカイブシンポジウムを開催（参加者：145 名）して情報提供や情報共有を進めるとともに、デジタルアーカイブの課題と方策をまとめた報告書を作成・公開することで、各館等での取り組みを支援した。 ・ 蔵書スペースの狭隘化や、冊子体から電子資料への移行が進む中で、東海北陸地区大学間学術資源活用事業 WG と共同で、シェアード・プリントや共同保存書庫についての検討を進め、本取り組みにおける詳細なシミュレーションや調査結果を、各館の参考になる先行事例として報告書にまとめ、会員館に示した。 上述のように、当該目標に即した調査や企画立案といった取り組み内容は、いずれも国立大学図書館協会会員館全体に共有、還元され、会員館同士の情報共有や先行事例の公表による参考情報の伝達という形で、事業の推進において一定の役割を担うことができた。 なお、当該目標における次期ビジョン期間に引き継ぐべき課題として、次のことが挙げられる。 ・ ウィズコロナ、ポストコロナ時代の大学図書館における学術資料の整備の在り方 ・ 電子ジャーナルや電子ブック等、教育・研究に必要な電子リソース整備にかかる諸問題 とくに、 － 電子ジャーナルの新たな契約のあり方 － 大学図書館等機関向け国内学術書の電子書籍化の促進と利用環境の向上 ・ 資料の長期的利用および共有を実現するための、デジタルアーカイブ構築推進とその標準化
目標達成に向け実施した取り組み
（学術資料整備委員会） ・ 国立大学図書館協会ビジョン 2020 の「重点領域 1. 目標 2）出版された資料の整備と利用」に取り組み、学術資料整備委員会の下に 3 つのワーキンググループ（電子ジャーナル、デジタルアーカイブ、シェアード・プリントの各 WG）を設けて事業を進めてきた。 ・ 平成 29 年 12 月 21 日に、「電子ジャーナル購読をめぐる課題－サスティナブルな学術情報流通のために－」をテーマとして、国立大学図書館協会シンポジウムを開催し、電子ジャーナルの契約変更事例モデル化中間報告を行った。また、モデル化報告を作成した。 ・ 平成 30 年 10 月 19 日に、平成 30 年度国立大学図書館協会シンポジウム「大学図書館デ

ジタルアーカイブの活用に向けて」を開催した。

- 東海北陸地区大学間学術資源活用事業 WG と連携して、「図書館資料分担保存(案)」の検討を行った。並行して、地区共同保存書庫の設置を想定した運営に係る課題検討を行い、平成 30 年 11 月 16 日に WG 打合せとワークショップを開催した。
- 令和元年 6 月にデジタルアーカイブ利活用のための課題と方策をまとめた報告書「大学図書館におけるデジタルアーカイブの利活用に向けて」を作成・公開した。
- 電子ジャーナル問題に関係する活動の一環として、『大学マネジメント』2019 年 11 月号電子ジャーナル関連特集を企画し、国立大学図書館協会のウェブサイトからも電子版を公開した。
- 国立大学図書館協会のシンポジウムとして、「電子ジャーナル問題の解決に踏み出すために－オールジャパンとしての電子ジャーナルへの対応を考える－」をテーマに、2020 年 3 月 27 日に開催することを企画した。(新型コロナウイルスの影響により開催中止)
- 令和 2 年 6 月にシェアード・プリント WG での調査・検討をとりまとめた報告書「シェアード・プリント WG 報告書」を作成・公開した。
- コロナ下における学習環境・学習方法の変化への対応として、国内の学術書の電子書籍化推進と、その長期的な利用環境の構築について、国立大学図書館協会の声明案を作成し、令和 2 年 11 月の国立大学図書館協会秋季理事会に提案した。

目標 3	知識や情報の発見可能性の向上

国立大学図書館は，総合目録データベースをはじめとする学術情報システム基盤を高度化することにより，知の総体を対象として，必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現する。

評価・総括

(学術情報システム委員会)

- 学術情報システム委員会の目的は、学術情報システム基盤の現状やあり方に関する調査研究活動により各会員館が知識や情報の発見可能性の向上に取り組むための支援を行うこと、その活動を通じて今後の基盤形成を担う人材の育成を行うことであった。
- 平成28(2016)年度～平成30(2018)年度には、「これからの学術情報システムに向けて―現状・課題・当面の方向性に関するレポート―」および「これからの学術情報システムに向けて II―アクションプラン検討のための試案に関するレポート―」の作成を通じて、学術情報の探索・発見・利活用のためのシステム等の基盤形成に関する調査・研究と、学術情報システムの構築に携わる人材の育成を行った。
- 令和元(2019)年度～令和2(2020)年度には、「これからの学術情報システムに向けて II」のアクションプランを実現する方策の検討を行うとともに、会員館に「図書館システム及び関連システムに関するアンケート」を実施し、学術情報システムの現状と今後のあり方を調査した。調査結果を取りまとめて、会員館に報告した。
- こうした活動から、学術情報システム委員会が目指した各会員館への支援と今後の人材育成

という目的はおおむね達成できた。

・ 学術情報システム委員会の活動全般は、これからの学術情報システム構築委員会（これから委員会）との連携が前提となっており、当委員会の活動から生まれたレポートやアンケートは、これから委員会の活動を前進させる成果ともなった。しかし一方で、当委員会はどのような方法によりこれから委員会との連携を行うのか、どのような立ち位置で活動を行うのか等が不明確であったため、活動期間を通じて、これから委員会と学術情報システム委員会の役割の切り分けが常に課題となった。

【今後に向けた課題】

・ 各会員館が行う学術情報システム基盤の高度化を超えて、必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現するために協会が自ら行うべき施策を提案する必要がある。

・ 委員会の活動を通じて、学術情報システム基盤を担う人材の育成を継続することが重要である。

今後の委員会活動において関連団体との連携をさらに強め深めていくために、関連団体との関係のあり方や役割について協会としての整理を行い、情報共有や相互理解の方策を確立する必要がある。

目標達成に向け実施した取り組み
（学術情報システム委員会） ・ 学術情報システム基盤の高度化に向けた改善策を検討するため、学術情報システムの全体を俯瞰して現状・課題・方向性をまとめたレポート（H30.6）をもとに、具体的・効果的な改善アクションプランを立案した（H31.6）。 ・ さらに、具体的なプランを進めるための現状把握を目的としてアンケートを会員館に実施し（R2.3）、集計報告を作成した（R2.7）。

重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供	
大学図書館は，これまで人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場であり，知を創出する空間であった。これからは，旧来の「館」の壁を超えてその場を拡張し，さらには物理的な場だけでなく，知のネットワーク上に存在する仮想空間を新たな知を創出するための場として活用することにより，教育・学習の質を向上させ，研究活動を支援するとともに，大学と社会との連携を促す。	
目標 1	知を創出する場の拡大・整備・提供
国立大学図書館は，人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場を提供し，そのような場を拡張することで，教育・学習や研究を通じた知の創出を促す。	
評価・総括	
コロナ禍以前とコロナ禍以後で，大学図書館の場の在り方が大きく変容している。コロナ禍により物理的な空間としての図書館利用が大きく制限されている。相互作用を生み出すコミュニケーションの場として整備してきたラーニングコモンズは，多くの大学図書館では本来の目的での運用	

ができていない。またビジョンでは仮想空間の活用もとりあげているが，ラーニングコモンズに替わる場を，図書館から仮想空間上に提供できている例はほとんどない。電子ジャーナル，電子ブック，デジタルアーカイブ等の電子的なコンテンツ提供やオンラインのレファレンスサービスなどは各館で積極的に推進されてきているが，知を創出する場を仮想空間上に提供できている例は少ないのではないかと考えている。 授業等の学習や，セミナーやカンファレンス等の情報発信は，物理的空間からデジタル空間への移行が加速化しているが，その中で図書館がどのような役割を果たしていく事が可能なのか，場・コンテンツ・人的サポート等をどのように提供していくべきなのか，大学図書館の原点にたちかえって議論する必要があるのではないかと考えている。
目標達成に向け実施した取り組み
（図書館環境高度化委員会） ・ 平成 28 年度「これからの大学図書館環境を考える」（東京，福岡会場），平成 29 年度「これからの大学図書館を考える」（仙台，京都会場）で計 4 回グループワークを実施した。 ・ 平成 30 年度に，平成 28，29 年度に実施したワークショップの成果として，図書館環境高度化に向けたアイディア集として，「新たな知を紡ぐ場」構築のためのヒントとなりうるアイディアをまとめた。 アイディア集では，特にビジョンの重点領域 2「知の創出」の「新たな知を紡ぐ場」構築のためのヒントとなりうるアイディアをまとめた。 一方で令和元年度の第 4 四半期以降は，コロナ禍により，従来の図書館サービスが大きく制限されている。令和 2 年度は，「ウィズコロナの図書館機能を考える」をテーマにコロナ禍での新しい生活様式にあわせた図書館機能検討を目標とし，先進的な非来館型サービスと安全な来館型サービスについての検討を試み，国内外の事例収集につとめた。 来館型サービスについて，図書館資料提供と自習用スペースの提供は多くの大学で再開しているが，ラーニングコモンズは閉鎖，もしくは静粛な自習スペースとして提供しているケースがほとんどで，本来の目的であるアクティブラーニングは大きく制限されている。大学図書館が今後アクティブラーニングをどのように支援していくことができるのか，今後も継続して検討していく必要がある。 非来館型サービスについても，電子ジャーナル・電子ブック等の積極的導入やデジタルアーカイブ拡充，オンラインのレファレンスサービス等の動きは見られたが，こちらもどのように場を提供することができるのか，今後も継続して検討していく必要がある。
目標 2　社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
国立大学図書館は，学術コミュニティに限らずさまざまな人びとが知を媒介として集い，さらに新たな知の創出と共有を実現する場を提供する。
評価・総括
（図書館環境高度化委員会） コロナ禍以降，教育・研究等の学術コミュニティは急速にデジタルに移行しており，図書館の位置

づけを問われているところであるが，学術コミュニティ外へのデジタルコンテンツの提供や，仮想空間の提供は容易ではない。特に資料という観点から考えると，デジタルよりも紙媒体の方が，学術コミュニティの外の人々との共有が容易であるケースも多い。一方で大学発信のオンラインの公開講座やセミナー等は急速に増えており，距離や時間を超えての情報発信は各段に増加している。大学図書館が社会からどのような役割を求められているのか，どのようなサービスが可能なのか，あらためて大学図書館の原点にたちかえって議論する必要があるのではないかと考えている。

目標達成に向け実施した取り組み

（図書館環境高度化委員会）

平成 28，29 年度に実施したワークショップの成果をまとめたアイディア集では，特にビジョンの重点領域 2「知の創出」の「新たな知を紡ぐ場」構築のためのヒントとなりうるアイディアをまとめた。

一方で令和元年度の第 4 四半期以降は，コロナ禍により，多くの大学図書館は学外者へのサービスを制限しており，入館不可としているケースも多い。令和 2 年度は，「ウィズコロナの図書館機能を考える」をテーマに国内外の事例収集につとめた。コロナ禍により公開講座等のオンライン化が進み，社会への情報発信が容易になった面もある。しかし図書館の蔵書を中心とするコンテンツの提供は多くの館では限定的であり，空間の提供もほとんどできていない。大学図書館として学術コミュニティの外の人びとにどのようなサービスが可能なのか，今後も継続して検討していく必要がある。

重点領域3. 新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築	
大学図書館は，さまざまな能力やスキルを有する人材が混在するハイブリッド（複合的）な人材の集合体を形成することで，大学図書館に期待される新たな役割を果たすとともに，多様な知の共有と創出を促す。そのために，新たな人材の構築が実現できるような制度を整備する。	
目標 1	新たな人材の参画
国立大学図書館は，教員，職員，研究者，学生等を含むさまざまな能力やスキルを有する人びとと図書館職員とが一体となり，蔵書の評価や選別にかかる「キュレーション」や人と知識や情報，あるいは人同士の相互作用を促す「ファシリテーション」等の機能を提供することにより，多様な知の共有と創出を実現する。	

評価・総括

（総務委員会）

- さまざまな能力やスキルを持つ人・組織と図書館との協働及び人的交流のあり方を検討するため、平成 29 年度に、大学図書館と学内他部署との協働、並びに大学図書館と学内他部署との間及び大学・機関間の人的交流の事例について、7 館の人事担当者や協働事業担当者にインタビュー調査を実施し、総務委員会内で概要を共有した。これらの調査結果に基づき、教員、職員、研究者、学生等スキルを有する人々の大学図書館への参画について提言をまと

める予定であったが、個々の職員の人事にかかわる情報であることから取り扱いに慎重さが求められ、新たな人材の参画に資する分析・提言の作成には至らなかった。

・ 各地区における今後の人材育成を考えるプロジェクトなど地区協会活動支援の一環として地区協会事業に対する事業費助成の企画・立案を実施した。この制度を活用し、各地区において、ファシリテーションやインストラクショナルデザイン、学生協働などをテーマとした研修・ワークショップが開催され、国立大学図書館において新たな機能を提供するためのノウハウの共有や人的ネットワークの形成が図られた。

・ 協会ビジョンに定める戦略的目標の達成に向け、図書館環境高度化委員会や学術資料整備委員会より提案された国立大学図書館協会シンポジウムの企画について協議し、理事会に提案した。特に平成 30 年度開催の「大学図書館デジタルアーカイブの活用に向けて」は広く研究者・学生も参加可能とし、大学図書館関係者に限らず、課題と成果を共有する機会となった。

【今後に向けた課題】

・ 様々な能力やスキルを持つ人材・組織と図書館との協働及び人的交流のあり方については、引き続き、検討する必要がある。

・ 地区協会助成事業の成果については、平成 29 年度から協会ウェブサイトの会員用ページで公開しており、地区内外へのさらなる波及が期待される。引き続き、地区内外に成果の共有が図られるよう留意する。

・ 国立大学図書館協会シンポジウムについては、新型コロナウイルス感染症拡大以降、開催を見送っており、オンライン形式による開催について検討する必要がある。

目標達成に向け実施した取り組み

（総務委員会）

・ 学内他部署との協働および大学・機関間を含む人的交例についての事例調査

・ 地区協会助成事業についての企画・立案

・ 国立大学図書館シンポジウムについての協議・提案

目標 2	国立大学図書館職員の資質向上

国立大学図書館職員は，これまで培ってきた学術資料に関する専門的知識やメタデータ運用スキルに加え，新たな知識やスキルを習得することにより，学術情報流通環境の変化の中で国立大学図書館に期待される新たな機能を実現する。

評価・総括

（総務委員会）

・ グローバルな学術情報流通環境の変化の中で、海外の先進的な事例を調査・研究し、わが国の学術環境の中でどのように展開していくか検討することが不可欠であることから、国際的な視点に立ったマネジメント能力を備えた人材育成を目的として、海外派遣事業を実施した（平成 28:2 件 2 名、平成 29:3 件 4 名、平成 30:1 件 1 名、令和元：3 件 3 名）。同事業の成果

については総会の場などでの報告を通じて共有され、海外派遣者のみならず、国立大学図書館職員の資質向上・育成が図られた。

- 研修会など各地区における大学図書館職員の資質向上に向けた取り組みや、地区内職員の人的ネットワーク形成に資するため、地区協会活動支援の一環として、地区協会事業に対する事業費助成の企画・立案を実施した（平成 28:13 件、平成 29:11 件、平成 30:12 件、令和元:11 件、令和 2:10 件）。オープンサイエンスやアクセシビリティ、災害対応など時宜にかなったテーマによる研修・ワークショップのほか、若手職員自身が企画・運営を行う事業も実施され、職員の企画力向上にも役立った。
- 会員館に所属する職員の、図書館活動における功績または図書館・情報学に関する研究業績を表彰するため、協会賞の募集・選考を行った。選考に際しては独創性、専門性、正確性、客観性等において優れた業績に重点を置き、先進的な取り組みについて会員館と共有することで、これからの国立大学図書館に期待される新たな機能の実現に向けて求められる知識やスキルなどの確認につながった。
- 委員会の調査研究費ではまかなうことのできない事業、及び戦略的海外派遣を実施するため、ビジョン推進にかかる予算措置（平成 29～31 年度）を企画・立案した。学術情報流通環境の急速な変化を背景とする講演会やワークショップ、戦略的な海外派遣が実施され、その成果の発信及び会員館との共有を通じて、国立大学図書館職員の資質向上・育成が図られた。
- 協会の広報・情報発信機能を改善し、国立大学図書館職員の新たな知識の習得やスキルアップにつながる会員館の活動・イベント等の情報を協会ウェブサイトにおいて発信・共有することを推進した。ビジョン推進事業をはじめ、国立大学図書館協会シンポジウムや研究集会、海外派遣事業、地区協会助成事業のみならず、各委員会や地区における事業などの成果が協会ウェブサイトを通じて発信・共有され、国立大学図書館職員における新たな知識の習得やスキルアップの機会拡大につながった。
- 大学図書館の機能が多様化・高度化する中、平成 30 年度に「大学設置基準改正への対応検討小委員会」を設置し、大学図書館に期待される機能等を検討し「『大学設置基準』の改正に向けた大学図書館機能の考え方について（第一次案）」を取りまとめた。日本の大学図書館の現状と将来像を踏まえ、大学設置基準改正に関する審議の際に検討を要望すべき事項が整理されたことにより、これからの大学図書館職員に必要とされる資質の見直しにもつながった。

【今後に向けた展望と課題】

- 海外派遣事業については、新型コロナウイルス感染症の影響により、令和 2 年度の決定者 2 件 3 名には渡航の延期が認められており、令和 3 年度の募集では国際会議におけるオンラインによる発表・出席も可とする特例措置を設けたが、諸般の情勢を踏まえつつ海外派遣事業のあり方について抜本的な見直しを行う必要がある。
- ビジョン推進に係る予算措置については、引き続き、委員会調査研究費ではまかなうことのできない事業を実施するための弾力的な予算措置を検討する必要がある。

・ 地区協会助成事業の成果については、平成 29 年度から協会ウェブサイトの会員用ページで公開しており、地区内外へのさらなる波及が期待される。引き続き、地区内外に成果の共有が図られるよう留意する。（再掲） ・ 協会の広報・情報発信の一環として、国大図協ビジョン 2020 の下で実施された好事例も同様にウェブサイトで共有し、各館が職員の資質向上に向けた事業の参考とすることを推進する必要がある。
目標達成に向け実施した取り組み
（総務委員会） ・ 海外派遣事業についての企画・立案および選考 ・ 地区協会助成事業についての企画・立案（再掲） ・ ビジョン推進事業や戦略的海外派遣に係る予算措置制度の企画・立案

協会ビジョンに基づく会員館の取り組み　一覧

照会期間：令和2年12月21日～令和3年2月26日
凡例：　重点領域1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
　目標1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
　目標2）出版された資料の整備と利用
　目標3）知識や情報の発見可能性の向上
重点領域2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
　目標1）知を創出する場の拡大・整備・提供
　目標2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
重点領域3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
　目標1）新たな人材の参画
　目標2）国立大学図書館職員の資質向上
各大学ごとに重点領域→目標の順にソートした

no.	大学名	重点領域	目標	取り組み
1	北海道大学	1	1	北海道大学オープンアクセス方針を策定
2	北海道大学	1	1	北方資料データベースの拡充・高度化
3	北海道大学	1	2	プリントディスアビリティのある学生支援のための電子化
4	北海道大学	1	3	北海道大学学術成果コレクション「HUSCAP」メタデータ等の拡充
5	北海道大学	2	1	アクティブラーニングフロアにおける知の創出のための＜場＞の提供
6	北海道大学	2	2	大学の他組織との連携による知の共有空間の提供
7	北海道大学	3	1	URA等との協働による人材育成の試み
8	北海道大学	3	2	学術情報トピックスに関する図書館職員のレクチャー実施
9	北見工業大学	2	1	新型コロナウイルス対策のための「消毒済/使用済プレート」設置
10	東北大学	1	2	大型研究プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への参画による古典籍デジタル化の推進
11	東北大学	2	2	クラウドファンディング「漱石の肉筆を後世へ！漱石文庫デジタルアーカイブプロジェクト」
12	東北大学	3	1	「留学生コンシェルジュ」による国際共修支援
13	東北大学	3	1	教員との協働による全学教育科目「大学生のレポート作成入門」開講
14	山形大学	2	1	校友会推薦図書コーナー「後輩には是非、こんな本を読ませたい！」
15	筑波大学	1	2	所蔵資料の修復と画像データ生成
16	筑波大学	2	2	地域社会との連携
17	筑波大学	3	2	大学図書館職員長期研修の開催
18	千葉大学	1	1	「デジタル・スカラシップ」による教育研究基盤の構築
19	千葉大学	2	1	アカデミック・リンク機能の全学展開
20	千葉大学	3	1	教育・学修支援専門職養成プログラム（ALPSプログラム）の開設
21	東京大学	1	3	東京大学デジタルアーカイブズ事業
22	東京大学	2	1	東京大学新図書館計画による総合図書館における新たな知を創出する場の創造
23	東京大学	3	1	東京大学アジア研究図書館の開設
24	東京工業大学	1	2	「東京工業大学電子図書館」サービスの継続的推進
25	東京工業大学	2	1	”Student-centered learning”を目指した図書館空間の提供
26	電気通信大学	2	1	人工知能研究との協働によるアクティブラーニング空間の構築と運用
27	一橋大学	3	2	西洋古典資料保存のための専門人材の育成
28	新潟大学	1	3	教育・学生支援機構コモンリテラシーセンターアカデミックライティング部門と連携した情報検索ガイダンス動画の作成および公開
29	新潟大学	2	1	附属図書館と研究企画室（URA）が連携した研究支援の取り組み

no.	大学名	重点領域	目標	取り組み
30	富山大学	2	2	ヘルン文庫の公開
31	信州大学	2	2	「信州 知の連携フォーラム」の開催
32	浜松医科大学	1	1	浜医スマート・ライブラリ構想に基づく情報発信
33	浜松医科大学	1	3	組織の枠を超えた「知の拠点」活動
34	浜松医科大学	2	1	浜医スマート・ライブラリ（1）福利施設棟エリア
35	浜松医科大学	2	1	浜医スマート・ライブラリ（2）図書館エリア
36	名古屋大学	1	2	コロナ禍にも対応した貴重書等のVR展示の実施
37	名古屋大学	2	1	ラーニングコモンズ等の整備・拡充
38	名古屋大学	2	1	オンラインレファレンス環境の開発と整備
39	名古屋大学	2	2	名古屋大学基金特定基金「名古屋大学附属図書館支援事業」の取り組み
40	名古屋大学	3	1	館外人材を取り込んだ講習会の実施
41	名古屋大学	3	2	教員と連携した学術情報リテラシー教育の実践
42	名古屋大学	3	2	業務の集約化による人員活用の試行
43	名古屋大学	3	2	図書館職員の専門性向上と新たなサービス提供に向けた体制の構築
44	三重大学	3	2	附属図書館の職員のためのスタッフ・ディベロップメント
45	京都大学	1	1	オープンアクセス・オープンサイエンスの推進に向けた京都大学の取り組み
46	神戸大学	2	2	震災文庫におけるサンテレビジョンとの連携（阪神・淡路大震災映像の公開）
47	和歌山大学	2	2	和歌山県内自治体・図書館職員等への支援事業
48	広島大学	3	1	広島大学ライティングセンターがCRLAのITTPC「レベル1」に認定
49	徳島大学	1	1	機関リポジトリへの登録推進
50	徳島大学	1	3	各種媒体を用いた情報発信と展示の併用による図書の利用促進
51	徳島大学	2	1	英語多読の推進
52	徳島大学	3	1	学生・教職員と共に創る学習支援の場「SSS（Study Support Space）」
53	九州大学	1	1	九州大学に蓄積された知を世界に発信
54	九州大学	2	1	新しい中央図書館の整備・開館　～アジアのトップブランドとして～
55	九州大学	3	1	図書館の学習支援活動における図書館TA（Cuter）との協働
56	九州工業大学	2	1	他大学との学生サポーター合同研修会の実施
57	琉球大学	1	3	琉球・沖縄関係分野における教育・研究の情報基盤構築
58	奈良先端科学技術大学院大学	1	1	学術機関リポジトリnaistarによる知のオープン化

No.1

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
北海道大学オープンアクセス方針を策定
取り組みの概要
学術雑誌等に掲載された、本学教職員による論文等の研究成果をインターネット上で無料公開することを原則にしたオープンアクセス方針を策定した。本学のオープンアクセス方針の特徴は、世界の学術情報流通の変化に合わせて、本学の学術成果コレクション（HUSCAP）での公開以外の方法（例：オープンアクセスジャーナルへの投稿、外部機関のリポジトリへの収録等）も研究者が選択可能としている点である。(2019.6) ＜参考＞ 「北海道大学オープンアクセス方針」を策定しました https://www.lib.hokudai.ac.jp/2019/06/28/66463/

No.2

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
北方資料データベースの拡充・高度化
取り組みの概要
平成30年度に科学研究費助成を獲得し，当館が保有する明治から昭和初期にかけて制作された北海道に関わる写真帖を高精細画像としてデジタル化し，北方資料データベースに追加搭載し，インターネット経由で公開した。（2019.3） 令和元年度に科学研究費助成を獲得し，当館が保有する北海道に関わる写真・地図・文書等3,770点をIIIFに準拠した形式で北方資料データベースに搭載し，インターネット経由で公開した。（2020.3） https://www.lib.hokudai.ac.jp/northern-studies/digital-exhibitions/high-def-images/ また，笹川科学研究助成を獲得し，北方資料データベースの一部について，アクセシビリティの向上，画像の高精細化を図った。（2019.3） さらに，当館が所蔵する 18 世紀から 19 世紀にかけてのカラフトアイヌと中国，日本の関わりを伝える文書群「カラフトナヨロ惣乙名文書（ヤエンコロアイヌ文書）」について国の重要文化財の指定を受けた。（2020.3）

No.3

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 2）出版された資料の整備と利用
取り組みの名称
プリントディスアビリティのある学生支援のための電子化
取り組みの概要
学内のアクセシビリティ支援室と連携し，プリントディスアビリティ（視覚障害または肢体不自由等により紙の印刷物を読むことが困難である障害の総称）のある学生の要望に対して，2021 年 2 月現在 337 冊の図書を電子化し提供している。（2016.4～）

No.4

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
北海道大学学術成果コレクション「HUSCAP」メタデータ等の拡充
取り組みの概要
北海道大学学術成果コレクション（以下 HUSCAP）登載コンテンツの可視性・流動性を向上させるため、メタデータ等の拡充を行った。 （1）博士論文への DOI 付与 2016 年 12 月授与分より博士論文へのパーマリンクとなる永続的識別子「DOI」新規登録を開始し、2013 年 6 月授与分から 2016 年 9 月授与分までの博士論文についても遡及して DOI を付与した。国立国会図書館による本文電子化分（2013 年 3 月授与分以前）の博士論文については、国立国会図書館が付与した DOI をメタデータへ登録した。（2016.12～） （2）JPCOAR スキーマへの対応 HUSCAP は、研究データの公開、識別子の拡充、国際的な相互運用性に対応するため、次世代のメタデータスキーマ「JPCOAR スキーマ」に対応し、既存のメタデータの変換も実施した。（2019.12～）

No.5

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
アクティブラーニングフロアにおける知の創出のための＜場＞の提供
取り組みの概要
グローバル人材育成のため，以下の取り組みを行った。 ・新渡戸カレッジ生を含む学生が海外で学び、働く動機付けとなるような報告会を教員と連携し開催した（2016.10-2017.1）。 ・英語多読マラソンの学生への普及を目的に、多読の楽しさを伝えるガイダンスを教員と連携し開催した（2016.7-2019.4）。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/2018/04/11/51406/ ・高等教育推進機構と連携し、英語学習サポートプログラム「英語コミュニケーション」を開催した（2017-2019）。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/2017/10/12/47606/ ・「トビタテ！　留学JAPAN」参加学生との協働による資料展示を実施した。（2019.12-3）

No.6

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
大学の他組織との連携による知の共有空間の提供
取り組みの概要
総合博物館・大学文書館・GI-CoRE・高等教育推進機構等と連携し、MIT メディアラボから講師を招き、「デジタルアーカイブが紡ぐ未来:MIT 石井裕教授と考える未来記憶」と題しワークショップを開催した。約200 名の参加者があり、石井教授と意見交換も行った。（2018.8） https://www.hokudai.ac.jp/events/2018/08/mit150.html

No.7

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
URA 等との協働による人材育成の試み
取り組みの概要
人材育成本部、高等教育研修センター、産学地域協働推進機構、大学力強化推進本部URAステーション等による「博士人材に対するアカデミックキャリア形成支援担当者プラットフォーム」に附属図書館も参加し、研究者・大学院生に対する様々な事業を情報共有し、今後の展開に向けた議論を進めた。（2018.7～）

No.8

館名
北海道大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
学術情報トピックスに関する図書館職員のレクチャー実施
取り組みの概要
被引用Top10%論文、インパクトファクター、ハゲタカジャーナルといった各種テーマのミニレクチャーを図書館職員が日本語と英語の両方で開催した。また，HUSCAPで公開したレクチャー資料については高頻度利用ランキングに入るなど活用された（2019年16位、2020年29位）。 これらの先進的な研究支援に対し，北海道大学教育研究支援業務総長表彰優秀賞を受賞した。（2019.1） 〈参考〉 https://www.facebook.com/hokudailibrary/posts/2800305909981379/

No.9

館名
北見工業大学図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
新型コロナウイルス対策のための「消毒済/使用済プレート」設置
取り組みの概要
新型コロナウイルス対策として、本学のアクティブラーニングスペースであるコミュニケーションホールの机にアクリル板を設置し、さらに、使用済の机であるかどうかが判別できるよう、「消毒済/使用済プレート」を設置した。

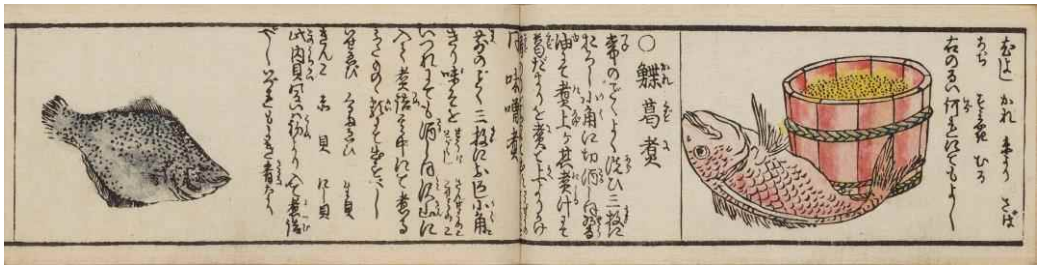
No.10

館名
東北大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 2）出版された資料の整備と利用
取り組みの名称
大型研究プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への参画による古典籍デジタル化の推進
取り組みの概要
・　東北大学附属図書館が所蔵する「狩野文庫」等の古典籍資料について、国文学研究資料館（以下、「国文研」）の大規模プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」事業への参画を通じて、古典資料のデジタル化・データベース構築に寄与している。 ・　環太平洋研究図書館連合（PRRLA）の年次総会に出席し、職員が当館での古典資料のデジタルアーカイブの取り組み及び国文研のプロジェクトに関する発表（英語によるプレゼンテーション）を行った。（2019.9） 参加報告 https://current.ndl.go.jp/e2204 ・　「狩野文庫」について、先行してデジタル化が完了した 232 点の資料を国文研の「新日本古典籍総合データベース」で公開し、国文研と本学の連名によりプレスリリースを行った。（2020.9） https://www.tohoku.ac.jp/japanese/2020/09/press20200924-01-kano.html ・　「狩野文庫」デジタル公開を記念して、東北大学附属図書館及び同文学研究科の主催、国文研の共催による「東北大学狩野文庫デジタルアーカイブシンポジウム『江戸に学び、江戸に遊ぶ』」をオンラインで開催した。シンポジウムでは、国文研のロバート キャンベル館長による講演「日本古典と感染症」及び本学教職員も加わったパネルディスカッション「デジタルアーカイブへの今後の期待と課題」を行い、市民、大学関係者、学生等 300 人以上が参加し、盛況のうちに終了した。なお、当日の講演動画を附属図書館の YouTube チャンネルで公開し、シンポジウム終了後も多くのアクセスがあり、高い関心を呼んでいる。（2020.12） http://www.library.tohoku.ac.jp/news/2020/20201223.html

・　国文研の「新日本古典籍総合データベース」でのデジタル公開数は、2021 年 2 月時点で東北大学所蔵の資料が最多である（9,005 件、次いで宮内庁書陵部の 8,514 件）。

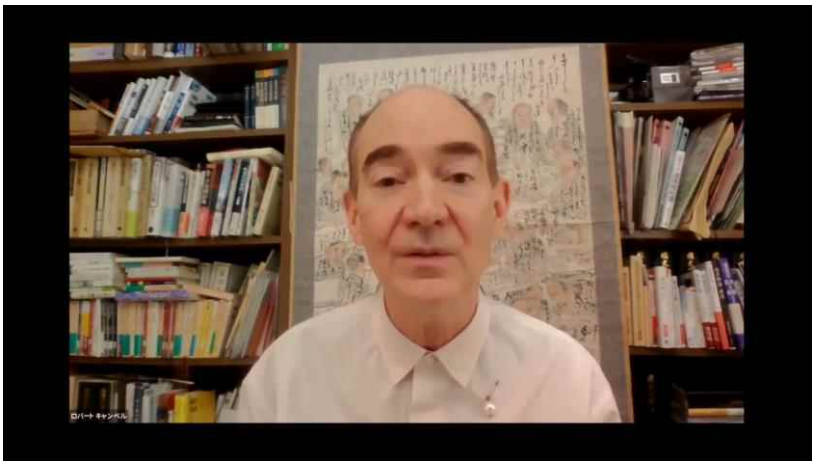
（参考）

・　デジタル公開した「狩野文庫」
『素人庖丁　（しろうとほうちょう）』（狩野文庫 6-19648-3）



http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100306817/

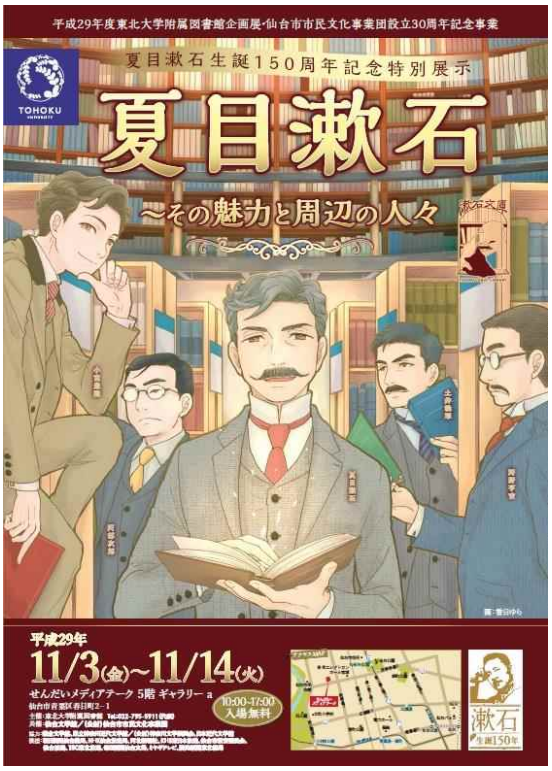
・　「東北大学狩野文庫デジタルアーカイブシンポジウム『江戸に学び、江戸に遊ぶ』」（2020 年 12 月 21 日開催）



ロバート キャンベル国文研館長による講演「日本古典と感染症」
東北大学附属図書館 YouTube チャンネル：https://youtu.be/nM16oF59EU4

No.11

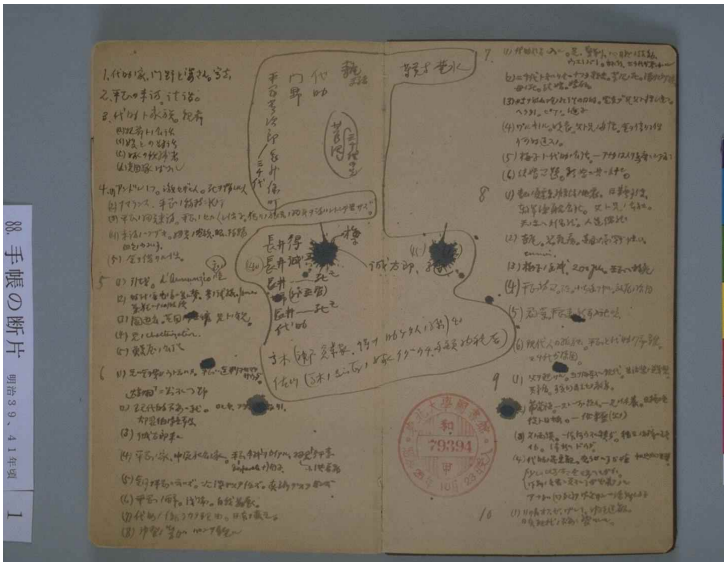
館名
東北大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
クラウドファンディング「漱石の肉筆を後世へ！漱石文庫デジタルアーカイブプロジェクト」
取り組みの概要
・　夏目漱石没後 100 年を記念し、企画展「漱石文庫～文豪が遺した創作の背景」を附属図書館で開催した。（2016.10～11） http://www.library.tohoku.ac.jp/news/2016/20160616.html ・　夏目漱石生誕 150 周年を記念し、仙台文学館との共催により、企画展「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」を市街地の公共施設「せんだいメディアテーク」で開催し、会期 12 日間で 3,000 名を超える来場があった。（2017.11）。 http://www.library.tohoku.ac.jp/news/2017/20171027.html ・　「漱石文庫」のうち、特に劣化の著しい漱石の手帳や手稿等の自筆資料約 900 点全点のデジタル化を目指し、52 日間・目標金額 2,000 千円にてクラウドファンディングを開始した。21 日間で目標額に達し、最終的には当初目標額の 2 倍を大きく超える 4,687 千円の支援を得ることができた。（2019.11） 事業報告 https://readyfor.jp/projects/soseki-library/accomplish_report ・　クラウドファンディングにより得た寄附金を元にデジタル化の作業に着手し、漱石の自筆資料（手帳、メモ、書簡等）792 点と旧蔵書 1 点（漱石の書入れが注目される資料のひとつであるシェークスピアの『ハムレット』）をデジタル化し、令和 2 年 12 月 25 日に東北大学デジタルコレクションのウェブサイトで公開した。（2020.12） https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000398tuldc ・　漱石の書入れがある旧蔵書約 3,000 冊については、寄付金を元に電子化作業用機器を購入し、附属図書館内で順次デジタル化を実施予定。 （参考） ・　企画展「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」（2017.11.3～14）



・　デジタル化した漱石の自筆資料

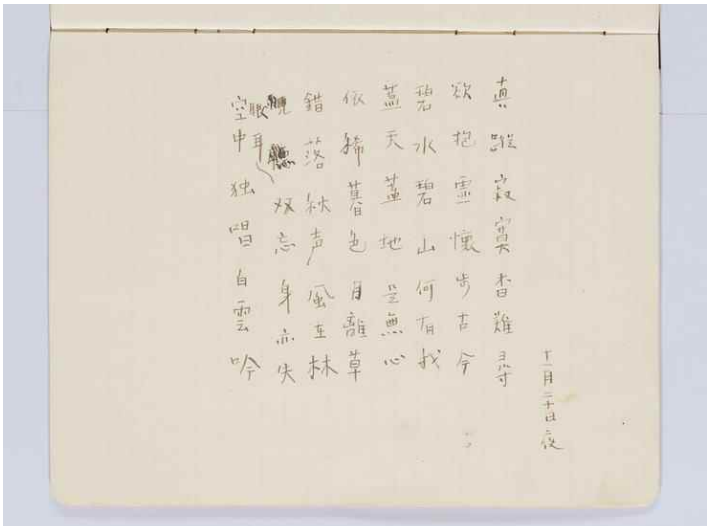
『それから』の構想メモ（明治 39～41 年頃）

日記及断片 明治 43 年 6 月 6 日～10 月 7 日 断片 明治 39 年～42 年 7 月「修善寺大患日記」（請求記号 24-7）より



https://www.i-repository.net/contents/tohoku/kichosho/cd2/1536*1024/2-22L.gif?log=true&mid=5100000084&d=1614250181957

漱石の最後の漢詩（大正 5 年 11 月 20 日）
「小遺帳及漢詩ノート 大正 3 年 12 月～大正 5 年 11 月 20 日」
（請求記号 26-15）より



https://www.i-repository.net/contents/tohoku/soseki2/SK26-015/SK26-015_00040.jpg

No.12

館名
東北大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
「留学生コンシェルジュ」による国際共修支援
取り組みの概要
・　全学的見地から附属図書館の学習支援事業の方針を策定し、その事業を企画・立案するため、学内教員等を構成員とした「附属図書館学習支援委員会」を設置し、学内図書館室間の連携と学内外の関連部局との協働による新たな学習支援体制を構築した（2016.4）。 ・　「東北大学教学マネジメント・ポリシー」と「附属図書館ミッション」に基づき、学生の相対的な学びを促す環境の構築、グローバルラーニングや社会貢献を視野に入れた「学習支援ポリシー」を策定した。（2016 年度） 学習支援ポリシー http://www.library.tohoku.ac.jp/about/policy.pdf ・　東北大学附属図書館本館で働く留学生スタッフ（アドミニストレイティブ・アシスタント）による「留学生コンシェルジュ」と職員の協働事業により、留学生向けの図書館利用や学習相談サービスのほか、国際共修のための企画展示や国際交流イベントを実施している。これまでの活動として、24 言語による図書館ガイドブックの作成や他言語による新入留学生向け図書館ガイダンスの実施、図書館プロモーションビデオの作成、公開、留学生と日本人学生の交流イベント「グローバルセッション」の開催などに取り組んでいる（2016 年度～）。 http://www.library.tohoku.ac.jp/en/mainlibrary/concierge.html

（参考）

留学生コンシェルジュデスクでの図書館利用案内

留学生コンシェルジュポスター

第 15 回グローバルセッション
「マンガデー」ポスター（2019.7）

図書展示「International Student Concierge x SDGs」(2021.2)

No.13

館名
東北大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
教員との協働による全学教育科目「大学生のレポート作成入門」開講
取り組みの概要
・　全学的見地から附属図書館の学習支援事業の方針を策定し、その事業を企画・立案するため、学内教員等を構成員とした「附属図書館学習支援委員会」を設置し、学内図書館室間の連携と学内外の関連部局との協働による新たな学習支援体制を構築した（2016.4）。 ・　「東北大学教学マネジメント・ポリシー」と「附属図書館ミッション」に基づき、学生の相対的な学びを促す環境の構築、グローバルラーニングや社会貢献を視野に入れた「学習支援ポリシー」を策定した。（2016 年度） 学習支援ポリシー http://www.library.tohoku.ac.jp/about/policy.pdf ・　図書館職員が教員と連携して担当している全学教育科目「大学生のレポート作成入門」を継続して開講し、受講者から高い授業評価を得ている。 http://www.library.tohoku.ac.jp/literacy/report.html ・　新型コロナ感染症対応のため、講義の動画配信に加えて、図書館での演習「情報探索のススメ」関連教材の動画作成やオンラインで利用可能な資料の紹介等のサポートを実施した。本科目については「平成 16 年度から積み重ねてきた授業運営技術と新しい企画を駆使して学生の満足度が高く優れた授業として成立させている」との観点から高く評価され、令和 2 年度の東北大学全学教育貢献賞を受賞した（2020 年度）。

（参考）

大学での学びをサポート！図書館を使った全学教育科目ガイド

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。今はこれから始まる大学生活への夢と期待で胸を膨らませていることでしょう。一方、大学での学習に不安を感じている方も多いのではないでしょうか。

大学生になると、自分の考察や意見をまとめたレポートを書くことが多くなります。レポートは根拠のない私見を述べたり、思うがままにつづる感想文ではありません。様々な文献を読み、論拠を示しながら文章を組み立てる必要があるのです。

図書館を使って必要な文献や情報を探す技術、それらを活用しまとめる能力を身につけることができる授業をご紹介します。ぜひ受講してください。

開講スケジュール

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 (月)

【1/3/5/7セメ】大学生のレポート作成入門

【4Q】読んで書く作法の理解と実践

【1セメ】学習支援入門

年間通してレポートと図書館のことを学ぶチャンスがあります。受講できなくてもレファレンスデスクで相談できるよ。

■カレントトピックス：「大学生のレポート作成入門 ー図書館を活用したスタディスキルー」 初回4/9

曜日・時限 第1/3/5/7セメスター、火曜5限　担当教員 附属図書館副館長ほか　対象学部 全学部

この授業では、大学生に求められる「学術的」なレポートの作成法や、それに欠かせない情報収集の方法の基礎と図書館活用法、そしてプレゼンテーションの技法を学ぶことができます。さらに、レポート提出後に、担当する4名の先生方が添削、それをもとにブラッシュアップして、もう一度コメントをもらうことができるという、他の授業にはない特徴があります。この授業を受講すれば、一生役立つスキルを身につけることができますよ。

※第15週以降の試験やレポート提出はありません。最終日には優秀レポートの紹介、先生方からの講評など様々なお楽しみが！

○この講義のおすすめポイント！

各先生が、あなたのレポートに2回コメントしてくれます！

毎年受講生から高評価！

ベストセラーレポート本の著者
酒井聡樹
生命科学研究科 准教授
研究目的の意義は？本論に説得力は？

人文社会科学のオールラウンダー
山田仁史
文学研究科 准教授
先行研究押さえた？講旨に一貫性は？

NATURE等国際雑誌に論文多数
渡辺正夫
生命科学研究科 教授
読んでわくわくする、興味を引く？

大学教育研究の専門家
申本剛
高等教養教育・学生支援機構 准教授
引用は適切？指定書式で書いた？

あなたのレポート!!

昨年度の受講生からの声

- レポートを書く上で、どう書けば人に読んでもらえるレポートになるのかを学べた。
- 4人の教員がそれぞれの観点から評価してくれ、その評価を踏まえて発表やレポートの仕上げをできたのが特によかった。
- 図書館の使い方、データベースの使い方などを授業内で教えてもらい、文献を探す際にとても役立った。
- 序論の書き方など、今まで重要視してこなかったところの大切さを知ることができてよかった。

東北大学附属図書館報「木這子」Vol.44, No.1 2019　より

No.14

館名
山形大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
校友会推薦図書コーナー「後輩には是非、こんな本を読ませたい！」
取り組みの概要
１　取り組みの経緯 小白川図書館では、平成 26 年度から本学後援組織である校友会の支援を受けて、学生自身による選書事業を行っていた。隣県の大型書店に赴き、図書館に必要で、かつ他の学生や後輩にも薦めたい図書を選定していたが、28 年度からは、小白川キャンパスの学生に限らず、全学 4 キャンパスから選書サポーターズとして選ばれた学生が、一同に会して書店での選書を行った。また、選書後には選定者が推薦文を付した POP を作成し、全キャンパスの図書館を巡回展示するようになったのもこの年度からである。後輩学生にとっては自分の専門・専門以外双方の先輩からお勧めされる図書ということで、貸出件数も多く利用されていた。 こうした取り組みが今年度のコロナ禍の状況では実施困難となり、代替として下記のような取り組みを行った。 ２　オンライン選書の実施 県境を越えて書店に赴くことが困難になったため、Web ツールを使用して選書を実施した。各キャンパスから 1～2 名の学生が選書サポーターズとして、「図書館に必要」かつ「他の学生や 1 年生向けに薦めたい」と思う本を選定した。オンライン選書のメリットとして実際に店頭にない図書まで広く選定できたことがあるが、一方で現物を見ることに勝るものはなく、内容の確認にやや困難があったと考えられる。 ３　校友会推薦図書コーナーの開設 各自選定した図書の中から図書の POP を作成し、図書とともに展示・貸出を行った。例年のような巡回展示では、コロナ禍での図書館の休館等もあり、十分な展示期間を確保できないことを考慮し、各サポーターズの所属キャンパスでの展示とした。（11 月下旬から 12 月末に展示）

ただし、図書館 HP では全体のリスト・POP を掲載し、他キャンパスで展示中の図書も無料で取り寄せ可能（既存のデリバリーサービスを利用）とするなど、全学学生に利用されるよう工夫を行った。この結果、図書館の利用が制限中だったにもかかわらず全体で 100 件以上の貸出があり、一定の役割を果たしたと考えている。

４　　今後について

今年度購入した図書を含めると、この選書事業で整備した図書は 1032 冊を数えることになる。過去に購入した図書も小白川図書館 3 階の校友会推薦図書コーナーに常設しており利用も好調である。コーナーをさらに充実させ、継続して利用に供していく予定である。

No.15

館名
筑波大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 2）出版された資料の整備と利用
取り組みの名称
所蔵資料の修復と画像データ生成
取り組みの概要

附属図書館が所蔵する貴重資料について、2017 年度から財団の文化財助成金を獲得し、本学経費によるものと合わせ修復を行ってきた。これにより文化資源の将来への継承を図るとともに、画像データを生成して、物理的・時間的制約を越えた資料の利活用を促している。

対象資料：

(1) 狩野[尚信]筆・屏風 6 曲 1 双　[李白観瀑、剡渓訪戴図]

(2) 狩野探幽筆・屏風 6 曲 1 双　猿曳図(左隻)、野外奏楽図(右隻)

(3) 狩野山雪画・掛軸 6 幅　歴聖大儒像（周子、程伯子、程叔子、張子、邵子、朱子）

(4) 田村直翁筆・屏風 6 曲 1 双　架鷹図

（修復の様子）

（大型スキャナーによる撮影）

No.16

館名
筑波大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
地域社会との連携
取り組みの概要
（公共図書館との連携）館種を越えた図書館連携による地域の活性化を目指し、2019 年 9 月 25 日につくば市立中央図書館と「つくば市域図書館連携に関する協定」を締結し、１）情報資源や活動成果の交流と活用、２）共同事業の企画及び実施、３）その他連携の推進を行うこととした。また、この連携推進を企画検討する「つくば市域図書館連携協議会」を発足した。 （ボランティア活動）地域住民約 50 名を中心とした附属図書館ボランティアを組織しており、活動開始から今年度で 25 年目を迎えた。新入生や留学生、大学来訪者への図書館案内、図書修理、障害者サービスなど、様々な利用者支援を実施している。 （高大連携事業）以前から本学附属学校へ図書貸出等サービスを提供しているほか、2019 年からは大学近隣の高等学校とも情報交換を行い、課題研究の支援を目指した、１）図書資料貸出サービス、２）レファレンスサービス、３）文献複写サービス、４）その他各校のカリキュラムや教育方針に沿ったサービスを提供する「高大連携図書館サービスパッケージ」を整備実施している。

No.17

館名
筑波大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
大学図書館職員長期研修の開催
取り組みの概要
学術情報に関する最新知識の教授、図書館経営・情報サービスの在り方についての再教育、職員の資質とマネジメント・企画等の能力の向上を図り、大学図書館における情報提供サービス体制を充実させることを目的に全 10 日間の日程で開催するものである。毎年度とも、国内の大学図書館で中堅として業務に従事する職員 30 名程度が受講しており、研修後も受講者間での交流が継続するなど、大学図書館業務における意見交換、また情報収集の場としても機能している。

No.18

館名
千葉大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
「デジタル・スカラシップ」による教育研究基盤の構築
取り組みの概要
附属図書館/アカデミック・リンク・センターでは、2011 年の設立当初より教育研究を支援するデジタル・コンテンツの開発・提供を行う「コンテンツ・ラボ」をコンセプトの柱の一つとして掲げ、教材の電子化、授業動画作成、コンテンツ作成支援、学習管理システム（LMS）の運営等を行ってきた。これらの活動を継承し発展させたものが「デジタル・スカラシップ」である。「デジタル・スカラシップ」とは、デジタルコンテンツを活用した教育・研究・学習の実現を可能とする新しい教育研究基盤を指す取り組みである。2018 年にアカデミック・リンク・センターにデジタル・スカラシップ部門を設置し、教員と図書館職員との協働によりデジタルによる教育研究基盤の構築に取り組んできた。 「デジタル・スカラシップ」による特徴的な活動を以下に挙げる。 １）研究成果オープン化の取り組み ・2016 年にオープンアクセス方針を制定し、オープンアクセスを推進する方策として米国非営利団体 CHOR のプロジェクトに参加した。この CHOR のサービスである CHORUS を利用し世界中で研究助成を受けた本学所属研究者のオープンアクセス論文を抽出し機関リポジトリに登録する仕組みを構築している。2021 年 2 月現在、CHORUS による総登録論文数は 858 件となる。 ２）デジタル・アーカイブの公開 ・2018 年に IIIF 画像を採用した「千葉大学学術リソースコレクション（c-arc)」を構築・公開した。ここでは、古医書等の古典籍や真菌・放線菌ギャラリー、工業デザイン作品等多様なコンテンツを公開し学術リソースを教育研究に利活用できる環境を提供している。「c-arc」に登録されたコンテンツは 2021 年 2 月現在、2076 件となる。 ３）研究データの公開・発信 機関リポジトリにおいて「萩庭植物標本データ」の画像データ約５万点に DOI を付与し研究データとしての流通性を高めた。「萩庭植物標本データ」は 2020 年度末に約 3 万 5 千点の IIIF 画像を「c-arc」にて公開する予定である。

４）研究成果可視化の促進

2020 年 12 月には、千葉大学の研究成果である教員著作を紹介するポータルサイト「千葉大学の本棚：cu-Books」を公開した。今まで紹介することの少なかった教員著作の寄贈図書や機関リポジトリに公開されたコンテンツを含め、紙、電子を問わず研究成果の視認性を高める取り組みとなっている。2021 年 2 月現在 79 件を公開。

５）教育 ICT 化における基盤構築

2020 年の新型コロナウイルス感染拡大により、デジタル基盤の重要性が強く認識されることとなったが、附属図書館/アカデミック・リンク・センターでは、「コンテンツ・ラボ」から「デジタル・スカラシップ」への流れの中で、教育研究支援をデジタル基盤で行う取り組みをいち早く実施してきた。コロナ禍において一気に本格化したオンライン授業においては、アカデミック・リンク・センターが従来から実施していた学習管理システム（LMS）の運営・サポート、動画収録等の技術的サポートを実施している。また、著作権に関するサポートの一環として令和 2（2020）年度よりスタートした「授業目的公衆送信補償金制度」の学内窓口として周知や FD 活動等を行っている。これらの活動においては、新たに設置されたオンライン授業担当組織であるスマートオフィスと一体的に連携し、全学のオンライン授業の運営を支える基盤となっている。

これらの活動は、附属図書館職員とアカデミック・リンク・センター教員が一体的に取り組んできたものである。機関リポジトリやデジタル・アーカイブを柱として研究成果の発信を進めるとともに、学術情報流通のデジタル化とデジタル・コンテンツの活用、教育 ICT 基盤構築を行い、研究教育支援のデジタル・トランスフォーメーションを展開している。

関連情報

１）　アカデミック・リンク・センターとは？
https://alc.chiba-u.jp/concept.html

２）「千葉大学学術成果リポジトリ（CURATOR)」
https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/

３）「千葉大学学術リソースコレクション（c-arc)」
https://iiif.ll.chiba-u.jp/main/

４）「千葉大学の本棚：cu-Books」https://www.ll.chiba-u.jp/cu-books/

No.19

館名
千葉大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
アカデミック・リンク機能の全学展開
取り組みの概要
アカデミック・リンクとは、空間、コンテンツ、人的支援を 3 つの柱として学生の学習を支援するという理念である。附属図書館/アカデミック・リンク・センターの教員・図書館職員が協働する体制で実施されている。 コンセプトの柱の一つ、空間＜場の提供>に関してはアカデミック・リンク機能の全学展開を目指して、以下のような取り組みを実施してきた。 １）西千葉キャンパス（理・工・文・法政経・教育・国際教養学部） 2010～2014 年度の西千葉本館増改築により、会話可能空間、静寂空間、ICT 活用空間等多様な学習空間を設置している。また、講演・発表・FD・アクティブラーニング形式の授業などに活用できるセミナー室やプレゼンテーションルームを完備している。加えて、会話可能なアクティブ・ラーニング・スペースには、学習相談デスク（SA による学習相談対応）やレファレンス、PC サポートといった支援の場を設けている。さらにプレゼンテーションルームでは、「1210 あかりんアワー」という昼休みのミニレクチャーを週に 2 回開催し、知識や人との出会いの場を醸成している。 ２）亥鼻キャンパス（医・看護・薬学部） 亥鼻分館では、会話可能エリア、IT 室を設置し情報環境を強化した。（2018.3～） ３）松戸キャンパス（園芸学部） 松戸分館は、アカデミック・リンク松戸として 2019 年 11 月にリニューアル開館し松戸キャンパスへのアカデミック・リンク機能の展開を本格的に開始した。アクティブ・ラーニング・スペースと、資料に近接した学習空間である静寂フロアを備えることで、利用者が自らの学習スタイルに合わせて空間を選ぶことが可能となった。アクティブ・ラーニング・スペースでは、研究領域ごとに教員が資料を紹介する「研究資料ナビ」や学習相談デスク（SA による学習相談対応）を設けている。この準備にあたっては入念な教員及び学生へのインタビューを行い、園芸学部の学習・研究ニーズに沿ったものを提供している。

（2019.11～）

４）バーチャル空間におけるサービス展開

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い学習支援デスクや「1210 あかりんアワー」等対面での活動は休止することとなった。その代わりにバーチャルな空間でのサービスを積極的に開始した。主なサービスは以下の通り。

ⅰ）「オンライン学習支援ポータル（EYeL！）」の構築・公開（2020.6～）

オンライン授業に対応し自宅での学習を支援するポータルサイト「オンライン学習支援ポータル（EYeL！）」を構築・公開した。この「EYeL！」においては、「ネットで相談・レポート論文を書く」「ネットで探す・調べる」「関心を深める・さらに学ぶ」という３つのタブを設け、そこに従来実施してきた学習相談のオンライン窓口やレポート作成支援、文献検索やレファレンスツールの紹介、さらに学ぶためのサイトやツール等を再整理して展開している。

ⅱ）オンライン英語論文作成支援（2020.6～）

大学院生にニーズの高い英語による論文執筆やプレゼンの方法について英語ネイティブの外部講師によるオンライン個別指導「Academic English Consultation（AEC)」を開始した。またセミナー「はじめての英語論文（はじめてシリーズ)」をウェビナー形式で開催した。これらは前年までは対面で実施していたものをオンラインサービスに移行したものである。オンラインでの参加者は「AEC」がのべ 216 人、「はじめてシリーズ」がのべ 184 人となり（2021.1 月時点)、前年までと比べて多くの参加者を得た。特に今まで参加を断念していた西千葉以外のキャンパスの学生・若手研究者に反響が大きく、場の制約を超えたサービスの展開が可能となった。

関連情報

・「1210 あかりんアワー」https://alc.chiba-u.jp/akarin.html

・「アカデミック・リンク松戸（パンフレット)」https://www.ll.chiba-u.jp/useguide/matsudo.pdf

・「オンライン学習支援ポータル（EYeL！)」https://alc.chiba-u.jp/eyr/online.html

No.20

館名
千葉大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1） 新たな人材の参画
取り組みの名称
教育・学修支援専門職養成プログラム（ALPS プログラム）の開設
取り組みの概要
アカデミック・リンク・センターは、教育関係共同利用拠点（大学の教職員の組織的な研修等の実施機関）として、平成 27 年に文部科学大臣より認定された。 この認定を受けて、拠点事業で取り組む活動を「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」（ALPS プログラム）と称し、大学における新しい専門的職員である「教育・学修支援専門職」の確立に向けて取り組んでいる。 その取り組みにおいて、大学の教育・学修支援の専門性を体系化・可視化するための「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目・能力ルーブリック」を開発し、体系的な教育プログラムである e-learning による履修証明プログラムを開講した。合わせて、教育・学修支援の高度化を図るための研修会としてシンポジウムを年 1 回、セミナーを年 5 回のペースで開催してきた。 履修証明プログラムは、2017 年から開講し毎年受講生を受け入れ、2020 年度受講生は第 4 期生となっている。現在までの受講者は学内外合わせて累計 114 人、また学内からは千葉大学の学習支援専門職（SULA）の受講を受け入れ（累計 45 人）、学内の実践的 SD プログラムとしても機能している。 本履修プログラムでは、以下の「基盤的テーマ」が開講されている。 1）高等教育政策と自校理解、2）カリキュラム理解、3）学生の抱える困難の理解と支援、4）コミュニケーションとカウンセリングの基礎、5）高等教育の国際化対応、6）教育 IR 入門：教育データの分析と活用、7）教育の ICT 化と教材開発支援、8）学修支援とアカデミック・アドバイジング、9）教育方法・教育評価、10）学生・学習に対する理解、11）ラーニングコモンズの運営 図書系職員が教育学修支援にあたるには、これらのテーマの知識の習得が今後ますます有用となるだろう。またこれらのテーマの中には、ラーニングコモンズの運営や教材開発支援に含まれる著作権の知識等、図書館職員に欠くことのできないテーマも含まれている。

受講者は、各大学の教育学修支援に関わる教員、学務系等大学職員、図書系職員など多岐にわたる。図書系職員は現在まで 13 人が受講し全体の 11.4%にあたり、割合としては多いとは言えないが、今後、大学の教育学習支援に図書館職員がより密接に関与していくための人材育成の手法の一つとなると思われる。また同時に、図書館においては、教育・学修支援の人材との協力体制により新たな視点を取り込むことで図書館機能のさらなる高度化が期待されている。

関連情報
・アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム
https://alc.chiba-u.jp/ALPS/index.html

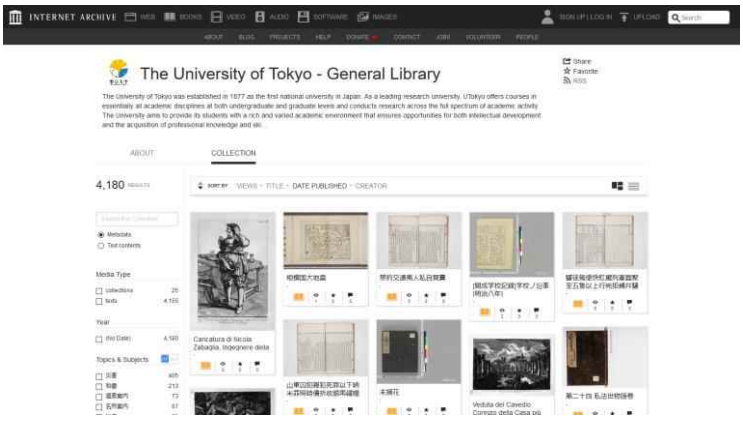
No.21

館名
東京大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
東京大学デジタルアーカイブズ事業
取り組みの概要
• 「東京大学ビジョン 2020」のアクションの一つとして、附属図書館を中心に文書館、総合研究博物館、情報基盤センターと連携しながらデジタルアーカイブズ事業を推進している。2017 年度は 8 部局、2018 年度～2020 年度は 12 部局の所蔵資料のデジタル化等を実施、2019 年度までに約 12,800 点の資料をデジタル化した。また，毎年，デジタルアーカイブズに関するセミナーを開催（2020 年度はオンライン）成果の発信とともに事業過程で得た情報を学内外と共有した。 • 2017 年 12 月「**東京大学学術資産等アーカイブズリンク集**」を公開（各部局のデジタルコレクションをサイト単位で紹介）https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dalink/ • 2018 年 6 月　公開するデジタル画像の一部を、利用目的を問わず利用申請なしで二次利用できるようオープンデータ化[総駒柏法明農育数情] http://current.ndl.go.jp/print/36212 • 2019 年 6 月「**東京大学学術資産等アーカイブズポータル**」を公開。全学のデジタル公開資料のメタデータを集積し、横断検索を可能とするシステム。ポータルからジャパンサーチ，NDL サーチに連携。https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/ • 2020 年 7 月　研究プロジェクト終了後、公開を停止していた「東京大学総合図書館所蔵亀井文庫ピラネージ画像データベース」を再構築し公開。IIIF を用いつつ、データベースの当初の機能を復活させたことがデジタルアーカイブレスキューの好例として評価された（2021 年デジタルアーカイブ学会賞（実践賞）を受賞（予定））。このほか、既存 23 コレクション（12,723 点）を IIIF 対応にリニューアル公開。［総駒柏法育数］ • 2021 年 2 月　Internet Archive に総合図書館所蔵資料のデジタルデータを提供。データ保存、国外での利用を促進。[総] https://archive.org/details/utokyo-general

- 2015 年度から歴史的典籍 NW 事業(国文学研究資料館)の拠点大学の一つとして、歴史的典籍の撮影、提供を実施。2,899 点を公開。［総駒明工文数東］

部局学術資産の公開支援例：

Internet Archive との連携



歴史的典籍 NW 事業

（実施図書館・室 凡例）
［総］総合図書館、［駒］駒場図書館、［柏］柏図書館、［法］法学部研究室図書室、
［明］明治新聞雑誌文庫、［工］工学・情報理工学図書館、［文］文学部図書室、
［農］農学生命科学図書館、
［育］教育学部図書室、［数］数理科学研究科図書室、［情］情報学環・学際情報学府 ［東］東洋文化研究所図書室
※図書館・室の記載がないものは全学的に実施

No.22

館名
東京大学総合図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
東京大学新図書館計画による総合図書館における新たな知を創出する場の創造
取り組みの概要

【目的・趣旨】

東京大学総合図書館は、別館新築工事（2014 年 12 月着工-2017 年 5 月竣工）及び本館耐震改修工事（2015 年度-2020 年度にかけてエリアを分けて実施）が終了し、2012 年にスタートした新図書館計画が全て完了しました。この結果、総合図書館は、資料収容能力 385 万冊（本館開架 22 万冊、本館書庫 63 万冊、自動書庫 300 万冊)、座席数総計約 1,100 席（本館 900 席、別館 200 席）を有する図書館として再生しました。今後は従来の資料利用を中心とした施設から新たな知を創出する場として、利用者同士のコミュニケーションも可能とする多様なスペースを設置し、東大内における学部・研究科の枠を超えた、あるいは文理の壁を越えた東大内外の研究者及び学生が集い、複数分野の協働を行うことにより、新しい知の創出に繋げていくことを目指します。

【実施内容】

①　別館

人文社会科学系資料の保存書庫として構想された自動書庫と、「学びと研究をつなぐ空間」として構想されたライブラリープラザの 2 つの部分で構成されています。

ライブラリープラザ（地下 1 階）

多様な学習スタイルに対応するアクティブラーニングスペースとして会話の騒めきの反響も計算して設計されました。壁面のホワイトボードや貸出プロジェクターの使用、大型モニターを利用したセミナー等にも活用できます。

自動書庫（地下 2-4 階）

地下 46 メートルの深さに 300 万冊収容可能な自動書庫を設けました。デジタル、オンラインの形態の資料だけでなく、紙の資料との両立を重要視した保存書庫です。

② 本館

本館は「伝統と未来が融合した新しい図書館」を目指して改修を行いました。書架と閲覧席が並ぶ伝統的な閲覧室や歴史的に総合図書館の象徴的なエリアである記念室等は創建当時の荘厳な意匠を復元するとともに、新しい図書館の機能を強化したエリアは図書館の持つ学術資源や大学の研究成果の発信、研究プロジェクトや授業のために貸出可能な個室などを新設しました。

オープンエリア

「オープンエリア」と名付けたこの場所は、250 ㎡のスペースに、24 枚の可動式のパネルを自由に設置し、図書館が持つ貴重な資料や活動の紹介のみならず、東京大学の研究成果を公開、発信するスペースとして用いていきます。

プロジェクトボックス

プロジェクトボックスは、本学の研究・教育に関連するプロジェクトを実施するための作業スペースとして、一定期間貸出すことを想定しています。

防音ブース

防音ブースは語学学習、プレゼンテーションの練習など、音声を発する個人活動に用いるための個室です。そのうち 1 室は什器やドアの仕様を工夫し、バリアフリー対応としています。

アジア研究図書館

４階は全体が、今年の１０月に新しくオープンした、アジア研究図書館のフロアです。従来は各部局の図書館･図書室がそれぞれ保有してきた図書･資料を可能なかぎり集中運用して、利用者に対して総合的で効率的な図書館サービスを提供することを一つの目標としています。

書庫資料閲覧室・閲覧個室

地下には、保存書庫や、自動書庫の資料のための閲覧室を新たに設け、資料の管理や保全のために生じた貸出や入庫制限の不便さを軽減できるよう対策しました。大型資料、軸物、一枚物の図版などを広げることができるような広い閲覧席や、和漢古書など貸出できない資料を一定期間集中して利用したり、自動書庫に入庫した製本雑誌をまとめて通覧できる閲覧個室も用意しました。

【実施成果】

別館のライブラリープラザは，2018 年 10 月のリニューアルオープン以来，会話ができるアクティブな学習空間として活用されていて、図書館の企画のトークイベント等や情報リテラシーの講習会なども開催されてきました。また、2017 年度から継続して工学系研究科英文コンサルテーション ERIC（English wRIting Consultant）が実施されているほか，相談支援研究開発センターぴあサポーターの活動にも会場を提供しています。

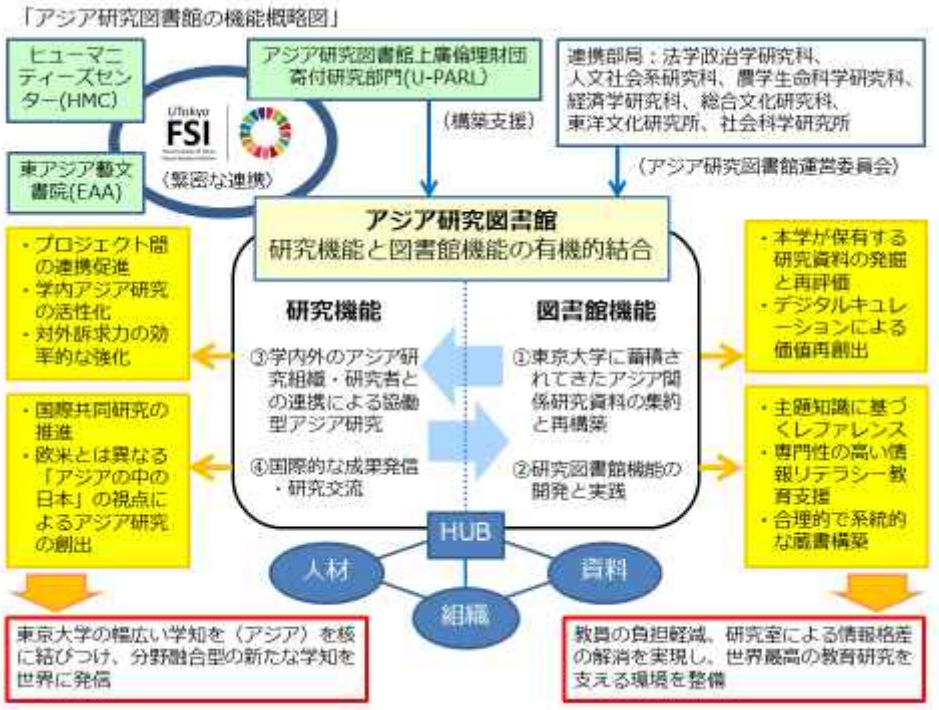
その他具体的な成果として、学生ボランティア団体によりライブラリープラザで行われた「近接分野座談会「おとなりさん」」企画は、「似たようなことをやっていそうだけどよくわからない…」というような「おとなりさん」の学科を比較することで、その共通点や相違点を楽しむイベントであり、これまで「心理」「建設」をテーマに行われましたが、方法論や研究対象の相違により参加者に新鮮な気づきや差異の認識をもたらしました。

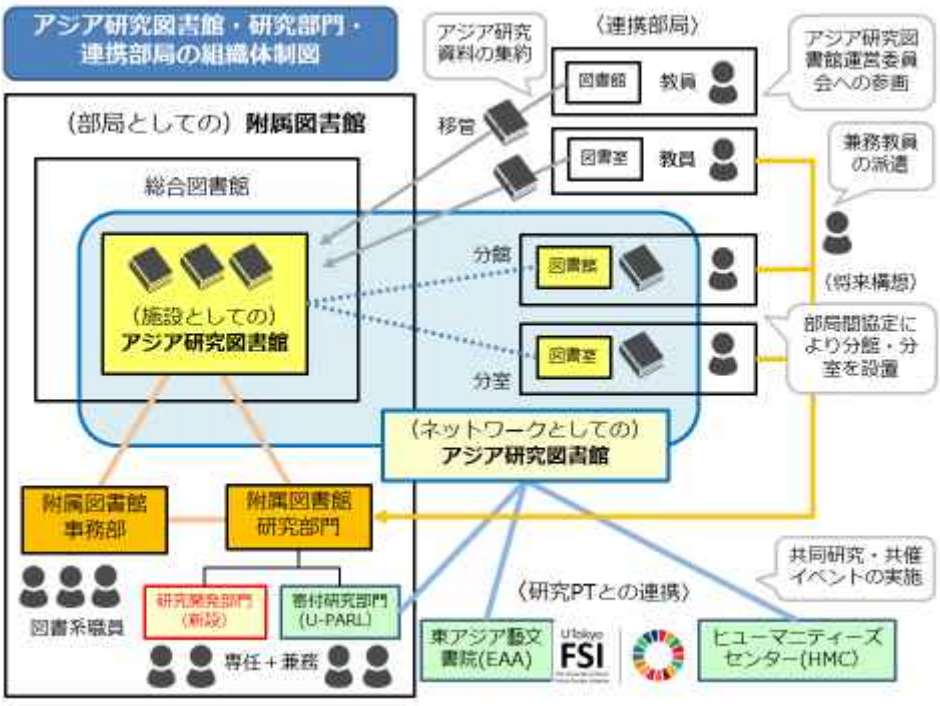
【今後の展開・課題】

新図書館計画により会話が可能なスペースとしてライブラリープラザ、プロジェクトボックス等の整備を行いましたが，ポストコロナを見据えつつ、今後学内各部局と連携し、どのように「コミュニケーションの場」へと昇華させていくかが大きな課題です。

No.23

館名
東京大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
東京大学アジア研究図書館の開設
取り組みの概要
2020 年 10 月に開館した東京大学アジア研究図書館は、東京大学に蓄積されてきたアジア関係の研究資料を集約・再構築し、国内外のアジア研究者が集う世界最高水準のアジアに関する研究環境の実現を目指すとともに、学内外のアジア研究組織・研究者との連携による協働型アジア研究や国際的な成果発信・研究交流を行うなど、図書館自体が研究機能を有することを特色としている。 アジア研究図書館の開設に向けては、2014 年 4 月に外部資金の活用により附属図書館で初めての研究部門であるアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）を設立した。U-PARL では、設立当初より任務の１つとしてアジア研究図書館の構築支援が掲げられてきた。具体的には、 ・新設された開架資料コーナーのフロアプラン策定 ・地域・言語・主題からなる独自の新分類体系策定 ・現地語資料を含むアジア全域にわたる資料の収集 ・部局図書館に分散所蔵されていた移管図書の選定及び請求記号付与 ・IIIF を用いた所蔵資料のデジタル化によるデジタルコレクションの構築 ・アジアや図書館に関するセミナー・シンポジウムの企画・開催 ・サブジェクト・ライブラリアン制度の確立に向けて、2019 年 11 月に提言書をとりまとめ、2021 年 3 月にアジア研究図書館開館記念シンポジウム「サブジェクト・ライブラリアンの将来像」を共催 などの活動において、U-PARL に所属する特任教員及び兼務教員・特任研究員・学術支援職員が関係部局の図書館職員や教員と協働しながら、積極的に推進してきたところである。 また、2021 年度には新たな研究部門であるアジア研究図書館研究開発部門の立ち上げが決定しており、そこではサブジェクト・ライブラリアン制度の確立を目指した取り組みも行われることになっている。


「アジア研究図書館の機能概略図」
ヒューマニティーズセンター(HMC)
東アジア藝文書院(EAA)
UTokyo FSI
(緊密な連携)
アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門(U-PARL)
(構築支援)
連携部局：法学政治学研究科、人文社会系研究科、農学生命科学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、東洋文化研究所、社会科学研究所
(アジア研究図書館運営委員会)
アジア研究図書館
研究機能と図書館機能の有機的結合
研究機能
図書館機能
・プロジェクト間の連携促進
・学内アジア研究の活性化
・対外訴求力の効率的な強化
③学内外のアジア研究組織・研究者との連携による協働型アジア研究
④国際的な成果発信・研究交流
①東京大学に蓄積されてきたアジア関係研究資料の集約と再構築
②研究図書館機能の開発と実践
・本学が保有する研究資料の発掘と再評価
・デジタルキュレーションによる価値再創出
・国際共同研究の推進
・欧米とは異なる「アジアの中の日本」の視点によるアジア研究の創出
・主題知識に基づくレファレンス
・専門性の高い情報リテラシー教育支援
・合理的で系統的な蔵書構築
HUB
人材
資料
組織
東京大学の幅広い学知を〈アジア〉を核に結びつけ、分野融合型の新たな学知を世界に発信
教員の負担軽減、研究室による情報格差の解消を実現し、世界最高の教育研究を支える環境を整備


アジア研究図書館・研究部門・連携部局の組織体制図
アジア研究資料の集約
〈連携部局〉
アジア研究図書館運営委員会への参画
(部局としての) 附属図書館
移管
図書館
教員
図書室
教員
兼務教員の派遣
総合図書館
(施設としての) アジア研究図書館
分館
図書館
(将来構想)
分室
図書室
部局間協定により分館・分室を設置
(ネットワークとしての) アジア研究図書館
附属図書館事務部
附属図書館研究部門
共同研究・共催イベントの実施
図書系職員
研究開発部門(新設)
寄付研究部門(U-PARL)
〈研究PTとの連携〉
専任＋兼務
東アジア藝文書院(EAA)
UTokyo FSI
ヒューマニティーズセンター(HMC)

No.24

館名
東京工業大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 2）出版された資料の整備と利用
取り組みの名称
「東京工業大学電子図書館」サービスの継続的推進
取り組みの概要
東京工業大学附属図書館は 1989 年 9 月に「電子的な情報の蓄積・利用について」試行を行う大学図書館として指定を受けて以来，時代に合せた「電子図書館」サービスを推進してきた。特に，特色あるコレクションである理工系分野の国際会議録やテクニカル・ペーパーに収録された論文情報の電子化に関しては，いち早く 1999 年から開始し，2021 年 2 月現在　会議録論文数 658,344 件，テクニカル・ペーパー200,705 件，合計で約 86 万件のデータを蓄積し，図書館の web ページで公開している。会議録やテクニカル・ペーパーは，学術雑誌に劣らぬ学術上の重要性を持つが，収集が困難なものが多く，また，現在でも出版元での電子化が進んでいないものも多い。資料本体の収集・保存に合せて，収蔵論文の目次のデータベース化は論文の存在を知るための貴重な二次資料群であり『重点領域１　目標３）知識や情報の発見可能性の向上』に沿った事業にもなっている。 　東京工業大学附属図書館文献データベース https://tdl.libra.titech.ac.jp/journal/ また，理工系外国雑誌センター館でもある東京工業大学附属図書館では，約 13,000 タイトルの電子ジャーナルと専門学術書を中心とした約 28,000 タイトルの電子ブックを基盤的電子コンテンツとして維持している。これらのコンテンツは，学内での重要な研究インフラとして機能すると同時に，契約条項で許されている範囲内で学外の研究者にも図書館相互サービス(ILL)や来館での資料複写を提供し，幅広く，知の共有に供している。なお，本学から他機関へ ILL で文献複写を提供している件数は，全国大学平均の 10 倍以上である。(『平成 30 年学術情報基盤実態調査』による)

東京工業大学附属図書館
資料名データベース
図書館トップページ | 電子ジャーナルリスト
蔵書検索 | 文献DB | 資料名DB | 横断検索
前のレコード
SAE World Congress Experience : WC
責任表示: Society of Automotive Engin
シリーズ名: Society of Automotive Engin
シリーズ巻号: 2017
出版情報: Warrendale, Penn.: Society
ISSN: 01487191
請求記号: S10400
資料種別: テクニカルペーパー
テキスト出力
BibTex
Refer/BibIX
RefWorks
EndNote Web
メール(UTF-8)
メール(SJIS)
印刷用画面表示
このページのURL
巻号一覧
巻
号
通号
2017-01-1709
2017-01-1708
2017-01-1707
2017-01-1706
2017-01-1705
続きを見る(1502 件)
東京工業大学附属図書館
文献データベース
図書館トップページ | 電子ジャーナルリスト
蔵書検索 | 文献DB | 資料名DB | 横断検索
一覧に戻る
Development of Lightweight Hanger Rods for Vehicle Exhaust Applicatio
著者名: Zhigang Wei
Sarat Das
Ryan Barr
Greg Rohrs
Robert Rebandt
さらに 2 件
掲載資料名: SAE World Congress Experience : WCX 17 : technical paper
シリーズ名: Society of Automotive Engineers technical paper series
シリーズ巻号: 2017
発行年: 2017
通号: 2017-01-1709
ペーパー番号: 2017-01-1709
総ページ数: 9
出版情報: Warrendale, Penn.: Society of Automotive Engineers
ISSN: 01487191
言語: 英語
請求記号: S10400
資料種別: テクニカルペーパー
テキスト出力
BibTex
Refer/BibIX
RefWorks
EndNote Web
メール(UTF-8)
メール(SJIS)
印刷用画面表示
このページのURL

No.25

館名
東京工業大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
"Student-centered learning"を目指した図書館空間の提供
取り組みの概要
東京工業大学では長期目標である「世界最高の理工系総合大学」を実現するため，教育においては"Student-centered learning"の実現を取組みの一つに掲げている。また，社会連携活動では，高度リカレント教育を通じた社会貢献の推進を強化している。附属図書館における＜場＞の提供も大学が目指す方向に沿って展開してきた。 学部生が多い大岡山キャンパスの大岡山本館では，2015 年 1 月に学習棟 2 階の改修を行い，可動式の机・椅子を配置し，学生が自由に使える学修スペースを設置した。また，2020 年 11 月に竣工した「Hisao & Hiroko Taki Plaza」は，学生主体の「つながる」場の実現をコンセプトとした国際交流拠点であるが，大岡山本館とは地下の通路で接続し，学生が用途に合わせて，行き来できる設計としている。 一方，2020 年度のすずかけ台分館の全面改修工事においては，大学院生や産学連携プロジェクトの研究者が多いキャンパスの特色を活かした「研究に集中できる時間・空間の提供」をコンセプトに，従来式のラーニング・コモンズを越え，個人研究スペースを重視した設計とした。さらに，学生支援センターとの協同により就職資料室，キャリア相談窓口，学修コンシェルジュ等のスペースを新設し，学生がより一層安心して，学習・研究に専念できる場を提供する。なお，すずかけ台分館のリニューアルオープンは 2021 年 7 月を予定している。 また，東京工業大学附属図書館では，リアル空間の＜場＞の提供に留まらず，学生の主体性を活かした数々の活動を展開してきた。本学学生による図書館サポーター謎班の企画・運営による「図書館謎解きゲーム」をオープンキャンパス等で開催し，2017 年 10 月の工大祭での（「魔法の絵本からの脱出～Tech-chan in Wonderland～」）からの累計参加者数は，1,962 名となった。2018 年度から

は，図書館サポーターが研究室を訪問し，先生がたの「人生を変えた 1 冊」をインタビューして記事にまとめ，これまで 8 本の記事を発信している。2020 年度は，COVID-19 感染拡大防止のため，オープンキャンパス等での見学も中止せざるを得ない状況となった。これに代わるものとして図書館サポーターとの協働で，図書館バーチャルツアーの動画コンテンツを作成した。2021 年 2 月現在，9 本の動画を作成し，図書館 Web サイトから発信したほか，学生が制作した 6 本の動画は，大学公式の YouTube からも発信している。
上記のコンテンツは，図書館サポーター企画『「ねっ、図書館」ネットで図書館体験』Web ページにまとめている。
これら図書館サポーターの活動は，東京工業大学学生支援センターが主催する「学生応援フォーラム」で図書館サポーターの学生が発表し，学生の主体的な活動を学内外に広く発信している。

＜参考 URL＞
「ねっ、図書館」ネットで図書館体験
　図書館サポーター企画「人生を変えた 1 冊」
　https://www.libra.titech.ac.jp/supp-event

＜参考画像＞

図書館サポーター謎班企画　図書館謎解きゲーム　第 4 弾「Tech-chan Quest Ⅲ～桜にのこした約束～」のポスター

「人生を変えた 1 冊」2019 年インタビュー風景

No.26

館名
電気通信大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
人工知能研究との協働によるアクティブラーニング空間の構築と運用
取り組みの概要
平成 29 年 4 月に、国立大学初の AI 研究拠点である人工知能先端研究センターとの協働により、革新的なアクティブラーニングスペース「UEC Ambient Intelligence Agora」（AIA）を図書館内にオープンした。当スペースは学生のためのアクティブラーニングスペースであると同時に、各種センサー（CO2、温湿度、人感、カメラ等）から人の活動や環境に関わるビッグデータを取得し、ディープラーニングマシン（AI）による解析が行えるシステムを備えている。AI・ビッグデータ研究と図書館サービスの進化・改善のための活動を表裏一体的に行えるハイブリッド空間であり、先端的理工学研究を推進する本学にとってのシンボル的な施設の一つとなっている。 令和 2 年度以降のコロナ禍においては、AIA のアクティブラーニングのための活用が困難となっている一方で、AIA のセンサー機能を活用した安全・安心な学修空間の構築へ向けての取組みを積極的に進めている。 平成 29 年度～令和 3 年度の AIA を拠点とした活動とその成果は以下のとおりである。 ○ アクティブラーニング空間としての活用 AIA は第一義的には学生のためのアクティブラーニングスペースであり、約 270 名を収容可能な多機能の学修空間である。グループワーク等に活用できる各種の設備を整備するとともに、快適な環境づくりに努めた効果により、AIA の整備以降、図書館入館者数は約 15%程度増加している。学生の個人やグループによる学修活動に利用されているほか、セミナーやワークショップも頻繁に開催され、AIA は大学の人気スポットとなった（図 1）。 ○ AIA における研究活動 AIA の施設・設備を活用した各種の研究活動が行われている。具体的に

は、「学修空間におけるエネルギー活用の実証実験」「会話の空気を読み取るAIによるフワキラ空間の構築」「センサーによる空間利用の最適化」「対話型ロボットによる利用者支援」「学修空間の空気質センシングと換気機能」等をテーマとした実験・研究が図書館職員との協働で行われるとともに、研究成果の図書館業務やサービスへのフィードバックも行われている。

図 1 AIA 内での活動の様子

○ AI 教育における活用

大学院博士課程レベルの高度なデータサイエンティストを養成するデータアントレプレナーフェローフログラムが AIA 内に整備した講義スペースを活用して実施されている。AIA のセンサー機能を活用した AI・ビッグデータの活用実習も行われ、AIA の活用が座学に留まらない実践的な AI 教育を可能にしている。併せて AIA 内に整備されたデータサイエンスライブラリ（AI、ビッグデータ、プログラミング等に関わる図書・資料のコレクション）の活用も進んでいる。

○ コロナ禍における活動

コロナ禍において、AIA の学修利用に支障が生じる一方で、AIA から取得されるセンサーデータが新型コロナウイルスの感染リスク指標になることが

明らかになり、データを活用した安全・安心な学修空間構築のための取組みを開始している。具体的には、CO2、温湿度等のデータを大型ディスプレイに表示する環境可視化パネルを設置し（図 2)、利用者の行動制御や館内換気のためのエビデンスとしている。今後は、ビッグデータに基づいて人の動きや空気質の変化を予測し、AI によりコントロールする機能を整備することも視野に入れている。

以上のような取組みにより、安全・安心（感染リスク低減、ストレス緩和）とアクティブラーニングが両立する条件を明らかにし、アフターコロナにおける学修空間・図書館サービスの再生を目指している。

図 2 環境可視化パネル

No.27

館名
一橋大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
西洋古典資料保存のための専門人材の育成
取り組みの概要

・2016～2018 年度に社会科学古典資料センターにおいて実施した西洋古典資料の保存に関する実務研修の修了者を協力員として西洋古典資料保存のためのネットワーク（略称「ほぞんネット」）を立ち上げ、情報共有や西洋古典資料保存地域講習会の企画等を行っている。(2018.8～)

・東北地区、九州地区において、西洋古典資料保存地域講習会をほぞんネット協力員在籍大学と共催し、各地区図書館職員の西洋古典資料保存に関する知識・技術の向上を図るとともに、協力員のフォローアップを行った。
（2018.11, 2019.12）

九州地区西洋古典資保存料講習会（2019.12）左より講義・実演・実習

・職員有志の勉強会として「図書修理講習」を行っている。(年 1 回)

No.28

館名
新潟大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
教育・学生支援機構コモンリテラシーセンターアカデミックライティング部門と連携した情報検索ガイダンス動画の作成および公開
取り組みの概要
2020 年 4 月，新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け，新潟大学は対面型授業から非対面型授業を実施する方針となったことから，従来附属図書館が行ってきた初年次スタディ・スキルズやゼミ等の授業を利用した情報検索ガイダンスを対面で実施することができなくなった。しかしながら，教員から情報検索ガイダンスについて多くの問い合わせがあった。 そこで，非対面型授業への支援のため，教育・学生支援機構コモンリテラシーセンターアカデミックライティング部門と連携して，初年次スタディ・スキルズに情報検索ガイダンスで使用している PowerPoint を動画化することにした。2019 年度にアカデミックライティング部門の立ち上げに附属図書館が協力してきた経緯があったことから，アカデミックライティング部門の教員と打ち合わせを重ね，助言を受けながら，2～3 週間の短期間であったが「情報検索の基礎（全 6 回）」の動画を作成し，2020 年 4 月下旬に図書館ホームページで公開した。授業や学生の予習・復習に活用してもらうように全学部の教員に通知し利用を促した。 また，医歯学系の情報検索ガイダンスで行われる「医中誌 Web」ガイダンスについてもアカデミックライティング部門と連携して「医中誌 Web で論文検索（全 3 回）」を動画化し，2020 年 10 月に図書館ホームページに公開した。 2020 年 12 月にはこれらの情報検索ガイダンス動画を集約してアクセスしやすいように図書館ホームページに，「動画で学ぶ情報検索スキル*」ページを作成し，公開した。 今後もアカデミックライティング部門との連携を進めていくが，ライティングサポーター（仮称）育成につなげるため，図書館学習サポーターを活用した，学生及び教員へのアカデミックライティング教育の支援について計画を立てる予定である。

*動画で学ぶ情報検索スキル
http://www.lib.niigata-u.ac.jp/learning_support/search_info_movie.html

No.29

館名
新潟大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
附属図書館と研究企画室（URA）が連携した研究支援の取り組み
取り組みの概要

2019 年 4 月，リサーチマインドを持つ学生・大学院生や教員の学術交流や研究支援を行うため，中央図書館ラーニング・コモンズ内に「リサーチ・コモンズ」を設置した。附属図書館と研究企画室（URA）が協同してリサーチ・コモンズにおいて科研費セミナー・知的財産セミナーや学術情報セミナーを定期的に実施した。また，旭町分館においても同内容を実施した。2019 年 4 月～2020 年 1 月までの期間，URA は科研費セミナー・知的財産セミナーを担当し，実施 58 回 110 人が参加した。附属図書館は学術情報セミナーを担当し，「粗悪学術誌への対応」「被引用指標」「Research map・ORCID による論文業績管理」「オープンアクセスジャーナル」「ジャーナル評価」に関する学術情報セミナーを 18 回実施し，24 人が参加した。

学生や教員が参加しやすいようにお昼休みや夕方の時間帯に設定したが，図書館で開催したため，当初参加者は少なかったが，次第にリピーターが増えていき，研究に役立つ有益な情報提供を行うことができた。

リサーチ・コモンズについては，コロナ禍が落ち着いた後，研究者にとって関心の高い学術情報を提供するだけでなく，学生の自主ゼミや立場を超えた学術交流の場等にも活用していく予定である。

【リサーチ・コモンズ】

2020 年度も URA と連携してセミナーを行ったが，新型コロナウイルス感染症拡大防止のため，対面型セミナーから Zoom によるオンラインセミナーに代えて実施した。附属図書館では学術情報セミナーとして，2020 年 7 月～8 月に粗悪学術誌への対応をテーマとした「ジャーナル評価入門 1・2」（8 回　参加者 72 人），9 月～10 月に「審査委員へ伝える論文の注目度「被引用指標」」（8 回　参加者 67 人），11 月に「文献管理ソフト EndNote」（4 回　参加者 38 人），12 月に「授業目的公衆送信補償金制度に関する著作権」（4 回　参加者 62 人）をそれぞれ実施した。

今年度はオンラインでセミナーを実施したためか，昨年度に比べ参加者が格段に多くなり，URA と連携している県内大学の研究者を含む様々な分野の人がセミナーに参加した。コロナ禍の状況を踏まえ，来年度もオンラインによるセミナーを実施する予定である。

No.30

館名
富山大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
ヘルン文庫の公開
取り組みの概要

・ 富山大学附属図書館の特色あるコレクションであるラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の旧蔵書「ヘルン文庫」について、学外者への公開及び県内外施設への資料貸出等を実施している。
http://www.lib.u-toyama.ac.jp/chuo/hearn/hearn_index.html

・ 令和２年度には高志の国文学館と企画展「生誕 170 年　ラフカディオ・ハーンの共感力　－　発見、探求、そして発信へ」を共同開催した。（2020.4～7）

企画展では、「ヘルン文庫」や関連資料等 51 点が展示された。また、本学人文学部の中島淑恵教授を講師に、文学講座「ラフカディオ・ハーンとフランス文学」をオンラインで開催した。各地から約 200 名の参加があった。（2020.7）

・ 「ヘルン文庫」に関する公開講座、「へるんトーク」を開催している。平成 30 年度から令和元年度までは館内において集合形式で開催した。令和２年度は新型コロナ禍の影響を受けてオンラインで開催し、その動画を YouTube で公開した。（2021.2）
https://www.youtube.com/channel/UCtR_XQo97xOh2_5tt8LsIrQ

・ ヘルン文庫を電子化し、学術情報リポジトリ「ToRepo」で公開している。公開している資料は、英語図書 15 点、和漢書 72 点、小泉八雲著作 27 点、その他関連資料 20 点。

No.31

館名
信州大学附属図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
「信州 知の連携フォーラム」の開催
取り組みの概要
「信州　知の連携フォーラム」は、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策についてフロアを交えて語り合う場として、長野県立歴史館、長野県信濃美術館、県立長野図書館及び当館を連携館として 2016 年に発足した。 　このフォーラムの特徴として、「持続性の確保への強い志向を当初から持つこと」、「MLA の枠組みに大学図書館がかかわることで、研究者による情報利用や地域への人材供給という「大学教育・研究への視点を内包していること」がある。 　第 1 回フォーラムは、2016 年 12 月 13 日に信州大学附属図書館を会場とし、「信州の地域資源と学びの支援：戦略的 MLA 連携による地域創生」をテーマとして、渡邉匡一信州大学附属図書館長による基調講演及び連携館各館長と基調講演者によるディスカッションを行った。（参加者：66 名） 　第 2 回フォーラムは、2018 年 2 月 22 日に信州大学附属図書館を会場とし、「コンテンツの再価値化：地域の文化資源を繋ぎなおし、読み解きなおす」をテーマとして、連携館各館長等による各館固有の取り組み及び信州における MLA 連携の期待について発表した後、フロアからのコメントを交えたディスカッションを行った。（参加者：51 名） 　第 3 回以降は、連携している各館がリレー形式で企画・運営を担当するとともに、より実践的なワークショップを実施し、現場レベルの相互理解を深める形式に切り替え、若手・中堅職員が企画段階から参画する体制とした。 　第 3 回フォーラムは、信州大学附属図書館が担当し、2019 年 3 月 8～9 日に信州大学附属図書館及び佛法紹隆寺（諏訪市）を会場とし、「寺社の MLA を体験する　～地域の文化資産を見て・知って・整理して・発信する～」をテーマとして開催した。佛法紹隆寺に所蔵する和古書を題材として、和古書の目録作成に関する講義のあと、参加者を 4 人程度の班に分けて参加者同士が情報交換を行いながら目録作業を行った。また、同寺のお蔵とお堂の見学を行った。（参加者：42 名） 　第 4 回フォーラムは、県立長野図書館が担当し、2020 年 9 月 28 日に県立長野図書館、塩尻市立図書館及び信州大学附属図書館の各会場をオンラインでつなぎ、「わがまち・わが館 お宝情報発信術　―信州ナレッジスクエアの育て方―」をテーマとして開催した。「信州ナレッジスクエアを知る」、「「信州サーチ」の未来設計　-これまで考えたこと、これからのこと-」のレクチャ―後、3 つの分科会（①「信州サーチ」どう育てる？（長野、信大）、②避けては通れない権利処理問題（長野、信大）、③発信するお宝を探そう（塩尻））に分かれ、参加者の所属機関をこえた活発な議論が行われた。各分科会の内容は、最後にそれぞれの代表から報告があり、参加者全員で共有した。（参加者：91 名） 　「信州　知の連携フォーラム」には国立大学ビジョン 2020 の 3 つの重点領域にすべてにかかわっているが、これまで 4 回開催したフォーラムは MLA の職員だけではなく、自治体、地域住民、学生などの参加を得ることができた。このことから、重点領域②「知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供」、目標２）「社会に開かれた知の創出・共有空間の提供」に合致した取り組みであった。

なお、「信州 知の連携フォーラム」についての詳細は、以下を参照されたい。

森 いづみほか. 「信州 知の連携フォーラム」における MLA 連携の試み　長野県内の図書館・美術館・歴史館の取組. 大学図書館研究, 2019, no.112.
https://doi.org/10.20722/jcul.2041

信州知の連携フォーラム各回資料. 信州大学学術情報オンラインシステム SOAR.
https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=1866&pn=1&count=20&order=7&lang=japanese&page_id=13&block_id=45

第 1 回フォーラム開催の様子

第 3 回フォーラム開催の様子

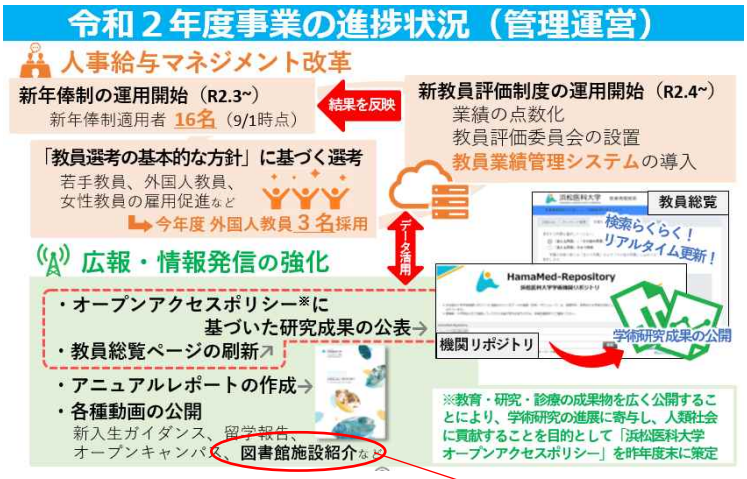
No.32

館名
浜松医科大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
浜医スマート・ライブラリ構想に基づく情報発信
取り組みの概要

・従来型の図書館から Socity5.0 型図書館への転換を図るべく「浜医スマート・ライブラリ構想」（2017）を軸として、図書館活動を展開している。
https://www.hama-med.ac.jp/lib/use/about/feature/smart.html

・「浜医学修支援システム」（2018）を活用し、学務課と協働で、令和 2 年に開講した全ての授業科目を、授業動画としてオンデマンド配信し（講義受講者限定）、コロナ禍における学修機会の担保に寄与した。また、教員向けの動画作成 FD 等の動画を作成し、配信している。
http://ls.hama-med.ac.jp/

・「浜松医科大学オープンアクセスポリシー」を制定（2020）し、ポリシーに基づき「浜松医科大学学術機関リポジトリ」にて学術論文等の公開をしている。これは大学の中期計画における管理運営事業計画の一環として、教員業績管理システム、教員総覧など他システムと連携し運用している。
https://hama-med.repo.nii.ac.jp/
https://hama-med.repo.nii.ac.jp/?action=common_download_main&upload_id=445



（2020.11 経営協議会資料より抜粋） http://od.hama-med.ac.jp/video/33/95

No.33

館名
浜松医科大学附属図書館
重点領域
重点領域 1. 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
組織の枠を超えた「知の拠点」活動
取り組みの概要

図書館の全面改修（2019-2020）の際に、医学書のライフサイクルを 6 年と定め、利用率や他館の収蔵状況を鑑み蔵書の計画廃棄を実施したこともあり、蔵書数が減少した。その代替として他大学、公共図書館、および書店と連携し、学生が資料に接する様々な機会を提供している。

・静岡大学と連携し、図書館間での資料搬送便「e～らBox」を運用（2019）し、無償で相互の図書館の資料が利用できる。また、静岡大学附属図書館の新着図書のカバー展示をして、利用促進を図っている。
・大学と浜松市との業務提携の一環として、浜松市立図書館の利用者証、電子図書 ID 発行の出張サービスを実施（2018～）するほか、除却図書の無償譲渡を実施し、知的財産の有効活用を図っている。
・改修の際に、図書館施設内に書店を誘致（2019）し、利用者が蔵書以外の書籍等に触れる機会を提供した。また、館内サイネージでの広告を無償で提供（2020）し、個人向けの電子書籍等、図書館で扱えない資料の紹介も可能とした。
・リカレント教育の一環として、卒業生に対して図書館の 24 時間利用を可能とし、貸出のほか、ILL による文献複写（2021）にも対応する。

「e～ら BOX」の広報サイネージでの広告

No.34

館名
浜松医科大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
浜医スマート・ライブラリ（1）福利施設棟エリア
取り組みの概要

浜医スマート・ライブラリ構想に基づき、静から動への学修形態に対応する 24 時間利用可能な施設として、また国際化や多様性の涵養への寄与、ICT を活用した情報発信など、多くの機能を有した場を提供した。Web 予約もできる。

国際化推進センター

ダイバーシティスペース（礼拝も可）や授乳室を完備。語学力（日本語・英語）を高めるためのイベントも定期的に開催。

授乳室

Student Commons ワークルーム

自主学修や部活動のミーティングなど、さまざまな用途で利用可能。飲食も可能。

書店

一般の方も利用可能。ホールで開催したイベントに関連した書籍の販売も行う。

松門会ホール

図書館整備基金（2019）を活用した。98 インチのサイネージは、災害時には多言語対応の情報掲示板に転用する。普段は、飲食可能なコミュニケーションスペースとして、レイアウトを変えてイベント活用もできる。壁面にはボルダリングを設置。

松門会ホール

No.35

館名
浜松医科大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
浜医スマート・ライブラリ（2）図書館エリア
取り組みの概要

図書館エリアはゾーンニングが行われ、1 階は蔵書と集中学習のエリア、2 階は、アクティブラーニングと情報収集・発信のエリアが配置されている。

個室エリア・クワイエットエリア（1F）

個室には長時間学修のための人間工学設計された椅子を導入。クワイエットエリアは、L 字や棚付き、車椅子対応の昇降デスク等、多様な什器を採用。

クリエーションハブ（2F）

情報発信のエリアで、動画作成・編集スタジオ、大型モニターやカメラ、収音設備を備えた Web 会議室（国際 PBL 対応）、防音設備を備え、発話学修や Web 対話のためのスピーキングルームから成る。

スタジオ

Speaking Room

コラボレーションエリア（2F）

アクティブラーニングのエリア。グループ学修のほか、予約可能なオープン形式の講義や講習会用のスペース、ごろ寝可能なくつろぎスペースも備える。

コラボレーションエリア

インフォメーションハブ(2F)

Web 上の情報を入手するためのエリア。情報検索端末、PC、プリンタ、コピー機など ICT 機器を備える。

インフォメーションハブ

クワイエットエリア

くつろぎスペース

No.36

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
コロナ禍にも対応した貴重書等の VR 展示の実施
取り組みの概要
国の重要文化財に指定された高木家文書（中央図書館）や医学史料（医学部分館）を常設展示する一方で、、社会科学分野の西洋古典籍（中央図書館）も含めて定期的に貴重書の企画展示を実施しており、また資料の画像データはそれぞれのデータベース（高木家文書デジタルライブラリー、西洋古典籍デジタルライブラリー、近代医学の黎明デジタルアーカイブ）に追加・公開している。また、2019 年 1 月からインターネット経由で高木家文書資料館内を一覧できるバーチャルリアリティ（VR）展示（OKB 高木家文書資料館 VR 展示）を開始し、2020 年 10 月の名古屋大学ホームカミングデイでは、中央図書館で所蔵する貴重書と貴重書閲覧室を VR 展示して、コロナ禍においても一般市民の皆さんに貴重書展示を楽しんでいただける環境を整備した。さらに医学部史料室も VR 展示を 2021 年 5 月に公開するため、準備を進めている。 ＜期間中にデータ更新されたデータベース＞ 高木家文書デジタルライブラリー https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000011Takagi 西洋古典籍デジタルライブラリー https://libdb.nul.nagoya-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000012sktn 近代医学の黎明デジタルアーカイブ（医学部分館） https://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/index.html ＜OKB 大垣共立銀行高木家文書資料館 VR 展示＞ https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/index.html#vr

＜名古屋大学ホームカミングデイ　メェだいと VR 体験!貴重書の世界＞

https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/hcd/2020/webpage/index.html

No.37

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
ラーニングコモンズ等の整備・拡充
取り組みの概要
2017 年 2 月に利用者アンケート調査の結果に基づき、中央図書館の教育・学修環境の改善をすすめるため、「ラーニング・コモンズ等整備計画」を策定した。さらに、この計画に基づき、2018 年から 2019 年にかけて参考図書の移設、就職や語学・プログラミング関係資料等のコーナー本の書架配置見直し・再配架を行い、アクティブ・ラーニングスペースを拡大するとともに、案内サインの追加やサポートデスク周辺のレイアウト変更を行った。また、2021 年 3 月に学生等が 3D プリンタなどの ICT 機器を自由に利用して「ほぼあらゆるものをつくる」ことができるファブラボを図書館内に設置し、学生の自主的な学習活動、創造活動の場を整備・拡充させた。 ＜拡張されたグループラーニングエリア＞

No.38

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
オンラインレファレンス環境の開発と整備
取り組みの概要

コロナ禍において、従前のカウンター越しのレファレンスサービスが難しくなる中、2020 年からラーニングコモンズのサポートスタッフ（大学院生）による予約方式のオンラインレファレンスを開始した。また、2021 年から理系部局図書室等の図書職員による、予約なしで受け付けるオンラインレファレンスの試行を開始した。これらによって、図書館という建物から飛び出して、物理的なカウンターにこだわることのない、ネットワーク上でのレファレンスサービスが受けられる環境を整備した。

＜図書職員によるオンラインレファレンス＞

No.39

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
名古屋大学基金特定基金「名古屋大学附属図書館支援事業」の取り組み
取り組みの概要

（取り組みの経緯）

資料費の高騰と配分予算の減少が続くなか、名古屋大学附属図書館では、平成 28 年度から自主財源獲得に向けた検討を始め、平成 29 年度に名古屋大学基金の枠組みの中で特定基金「附属図書館支援事業」を立ち上げ、自主財源獲得のための様々な取り組みを行ってきた。本取り組みは、協会ビジョンの個別目標のひとつに合致するものではないが、図書館施設や蔵書を利用して広報やサービスを展開することにより、図書館支援者との直接的な出会いやつながりが生まれ、財源獲得にとどまらない成果につながっている事例として、紹介させていただく。

（取り組みの内容）

名古屋大学附属図書館支援事業は、平成 29 年度から令和 2 年度まで 2 か年ずつ計画を策定し、①図書館資料の充実と公開、②図書館施設・設備の充実、③本学の学術研究成果の公開、④貴重書の整理・保存と研究促進、の 4 つのテーマを掲げ、特定基金の拡大と事業の推進に取り組んできた。

実施体制は、教員で構成する委員会の下に特定基金ワーキンググループ（以下、WG）を設置し、若手の図書館職員を中心とした WG メンバーが、各担当に分かれて企画・実施を担っている。

特定基金を拡充させるための事業として、広報戦略を立て通年で企業や個人からの寄附を受け付けるほか、募金箱の設置、古本募金事業、クラウドファンディング等を行い、それらで得た寄附金により、図書館施設の改修、学習用図書の購入、所蔵資料の常設展示、電子化事業等を行っている。

各年度に実施した具体的な取り組みは以下のとおりである。

〈平成 29 年度〉

・先行事例調査に基づく広報戦略の策定と展開（ウェブサイト[1)]、SNS[2)] 開始）

・寄附者特典の策定と準備
・中央図書館へのデジタルサイネージ機器設置による広告収入の獲得
・中央図書館内への募金箱の設置
・古本募金事業の開始
・寄附者特典蔵書票の学内デザイン公募および表彰式の実施
・第 1 回クラウドファンディングの実施（支援総額 2,444,000 円）

〈平成 30 年度〉
・第 1 回クラウドファンディング達成事業として、高木家文書の修復と画像電子化を実施し、活動報告書を作成
・寄附受にともなう OKB 大垣共立銀行高木家文書資料館の設置と広報用パンフレット、ホームページ[3)] の企画、作成
・特定基金寄附金によるラーニングコモンズの改修
・特定基金支援者の図書館・貴重書見学ツアー(第 1 回)を企画、実施
・高木家文書重要文化財指定答申記念の内覧会を実施
・SDGs ワークショップを法学部ゼミと共同で開催

寄附金購入図書の一部

〈令和元年度〉
・第 1 回クラウドファンディング支援者への名大教員による高木家文書ギャラリートークを実施
・特定基金支援者の図書館・貴重書見学ツアー(第 2 回)を実施
・特定基金寄附金により学習用図書を購入

〈令和 2 年度〉
・ウェブサイト、パンフレットの改訂
・古本募金のリニューアル
・募金箱のリニューアル
・図書館グッズ制作と寄附者特典の改定
・貴重書 VR 展示の案内（特定基金支援者の図書館・貴重書見学ツアー(第 3 回)の代わりとして）
・第 2 回クラウドファンディングの実施
（支援総額 2,783,000 円）

第 2 回クラウドファンディングのチラシ

（取り組みの効果）

特定基金の寄附金を活用して、図書館施設の整備や、学生用図書の購入、資料のデジタル化と公開、貴重書の保存公開事業等、当初の目的に沿って様々な事業を実施することができたことや、図書館が自主財源を確保できるようになったことは、図書館運営の活性化につながり、意義深い前進であった。

また、これまで取り組んだことのなかった寄附を募る広報活動と寄附者へのお礼に注力したことにより、学内外への広報面の充実が図れたことも利点であった。これまでつながりのなかった支援者とのやり取りから、さらなる支援への広がりが生まれ、支援者との直接のやり取りの中で、その思いを受け取り、図書館に求められるサービスや期待される役割を知るきっかけにもなった。

さらに、若手職員を中心にWGを構成したことで、様々な企画・活動を通じてノウハウが共有され、職員の企画力と対応力が強化された。

（今後の課題）

これまでの実績や蓄積されたノウハウをもとに、本事業をさらに広く展開するために、図書館内にとどまらず、学内外の機関との連携、とくに地元企業や地域住民、卒業生等との協力体制を構築することが課題として挙げられる。また同時に、地域に根差した文化の発信を全世界に向けて行っていくことも求められている。これらの課題を踏まえ、リアルな場やもの（資料）とデジタル技術、人材の強みを生かして、大学図書館として今後も戦略的に本事業の展開に取り組み、図書館の活性化につなげていきたい。

（注）

１）名古屋大学特定基金附属図書館支援事業ウェブサイト

https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/kikin/index.html

２）名古屋大学附属図書館公式 Facebook

https://www.facebook.com/Nagoya.Univ.info.lib

３）「高木家文書」重要文化財指定記念特設サイト

https://www.nul.nagoya-u.ac.jp/kikin/takagi_tokusetsu/takagike_monjo.html

（参考文献）

竹谷喜美江. 名古屋大学基金：特定基金「附属図書館支援事業」の設立と展開 ： デジタルサイネージの導入を中心に. 大学図書館研究, 110, 2020-1-2020-7 (2018-11-30)

鷲津彩乃. 名古屋大学基金特定基金「名古屋大学附属図書館支援事業」による取り組みの展開. 現代の図書館, vol.57, no.4 (2019-12)

No.40

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
館外人材を取り込んだ講習会の実施
取り組みの概要
2018 年から、他部局教員と連携して新入生の必修科目クラス対象に行うアカデミックスキルに関する講習会を開始し、また、独自の資格認定（試行）を受けた大学院学生も講師担当者として起用して図書館職員以外の人材も活用した講習会を実施した。さらに 2019 年から、他部局教員との連携の下、学習や研究への間接的支援を行うセミナーに学外の受講者も積極的に受入れ、学内外に開かれたセミナーを開催した。 ＜大学院生にによる講習会＞ http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/guide/literacy/poster/2018order_ac.pdf

No.41

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
教員と連携した学術情報リテラシー教育の実践
取り組みの概要
附属図書館に設置されている情報リテラシーワーキンググループは、教員と中央館や部局図書室の図書館員が参加し、附属図書館における教育学修支援について検討と活動を行っている。この活動は「名古屋大学附属図書館情報リテラシー基準」において「教養教育、専門教育において（中略）教員と連携し学生の情報リテラシー能力向上に努める」ことを目標としており、まずは学部 1 年生必修科目「基礎セミナー」の 1 コマを使った講習会を実施してきた。 ビジョン 2020 期間中においては、2018 年度から、部局図書室が担当する専門教育への対応に重点を移すこととし、以下の 4 つの課題に取り組み、成果を上げている。 1. 部局図書室での専門教育対応講習会の新規立ち上げ 2020 年度、理学図書室において、理学部地球惑星科学科と連携し、学部 2 年必修科目の 1 コマを使った、情報リテラシーの講習会を立ち上げた。 2. 情報リテラシー基準を踏まえた既存企画の見直し 2018 年度、「高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年版」（国立大学図書館協会）の「活用体系表（例）」を基に、名古屋大学版（暫定）を作成した。また、2019 年度には、全学部の専門教育対応講習会でベースとして使用できる共通コンテンツを開発した。（1.の講習会で実際に使用） 3. 質の向上・均一化を図るための評価の仕組み作り 2019 年度、大学教員向けの授業／教材設計や教授法に関する文献を元に授業計画と伝達スキルを評価する指標と授業計画シートを考案した。（1.の講習会で実際に使用） 4. 情報リテラシー教育の理解とスキル向上のための研修等の実施 2019 年度、リテラシー教育と教員連携に関するスタッフ・ディベロップメントを企画立案した。 上記に加え、情報リテラシー教育に携わる職員の育成とスキルの継承も活動目標のひとつとなっており、理学図書室での講習会新規立上げにあたっては、企画

立案から実施・評価までの一連の過程を、理学図書室の若手職員が一緒に取り組むことで、その一端を達成している。

No.42

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
業務の集約化による人員活用の試行
取り組みの概要
2020 年より、館室を超えた業務の集約、合理化を目標として、中央図書館と文系部局図書室の ILL 依頼業務を集約試行するとともに、業務量に合わせて人員の協力体制の構築も試行した。 そのなかにおいて、多くの職員の意見を取り入れて業務手順の見直しと改良を進めた。具体的には、取寄せ文献受け渡し場所の一元化、教職員への複写物学内便送付、工程が煩雑だった部分の見直し、チェックリストなどの導入による作業工程の標準化、テレワーク導入のためのリモートワークの仕組みづくり、今後の改良課題の洗い出し等である。 また ILL 依頼業務に取り組んだ職員の間で、ILL 業務経験と業務課題を共有し、業務効率化の知見の共有に努めた。

No.43

館名
名古屋大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
図書館職員の専門性向上と新たなサービス提供に向けた体制の構築
取り組みの概要

（背景）

2020 年度に発足した東海国立大学機構において、両大学の教養教育を共通化するアカデミックセントラル構想や、学内外に利用者層を広げるデジタルユニバーシティ構想を推進すべく、図書館にも新たな役割が期待されている。

そのような中で、大学執行部から現在の図書館職員の採用・配置のあり方が問われ、デジタル時代における図書系の必要性に疑問符が打たれている。

この問題に取り組むため、東海国立大学機構を構成する名古屋大学附属図書館と岐阜大学図書館が共同で、二課の課長を含む様々な職位のメンバー（名古屋大学 9 名、岐阜大学（オブザーバー）1 名）から成る図書館検討ワーキンググループ（以下、WG）を編成し、活動を行った。

（活動内容）

０．　WG の設置（2020 年 10 月）
１．　図書系の専門性や各業務について、洗い出しと検討（同年 10 月）
２．　職員の資質向上のための方策、図書館が目指す将来像の検討と
　　グランドデザイン案の作成（同年 10～11 月）
３．　全学（機構）の図書館職員との対話による意見収集（同年 11 月）
４．　執行部への説明（同年 11 月）
５．　グランドデザインに基づく新たな体制への移行検討（同年 12 月～）
　- プロジェクトチームの編成（一部の試行）
　- 業務効率化の検討

０．　WG 設置当初の目的は、図書館職員の専門性とは何か、図書館職員が担う役割は何か、何ができるのかを整理し、今後の図書館が目指す姿を検討して、採用等の在り方を執行部へ提案することであった。しかし、活動を進めていく中で、当初の目的にとどまらず、図書館職員がより専門性を高め、必

要な知識技術を蓄えていくための環境を構築することが重要な課題として認識された。ワーキングメンバーは、名古屋大学から課長2名（うち1名は主査)、係長級3名、主任級2名、係員2名、岐阜大学から課長補佐1名で構成し、オンラインでのWG開催とした。

1.　まず、WGで図書系の専門性や採用のあり方について話し合い、図書館の提供するサービス等の洗い出しとリスト化を行った。

2.　次に、図書館職員の専門性等に関する学内外の文献を参照し、図書館が目指す将来像や課題を盛り込んだグランドデザインのたたき台を作成した。また、図書館職員の専門性を高めるために、核となる複数のプロジェクトチームを立ち上げ、全職員が何らかのチームに属して活動を継続していくことで、その活動を通じて職員の育成を行っていく仕組みを検討した。チームの活動を通じて専門性を高め、将来的には東海国立大学機構内のみならず、東海北陸地区等、他大学の図書館職員の育成にもつなげることを目標にした。

3.　WGで話し合った内容や作成した資料を共有するために、全図書館職員とのグループ対話を行った。岐阜大学・名古屋大学の全図書館職員（事務系との交流者含む）が参加できるよう、10のグループに分けて、1回1.5時間程度の対話を行い、WGの検討内容を共有して意見交換を行った。

4.　対話を通じて収集した意見をWGで集約して、グランドデザイン案を作成した。グランドデザインの中に、専門性を持った図書館職員の育成により教育研究の振興に貢献することを盛り込んで、執行部へ報告を行った。

5.　プロジェクトチーム制の2021年度からの本格導入を目指し、試行としてOSプロジェクトチームを立ち上げた。このチームは2020年12月から2021年3月末までの期間限定の雛型チームである。オープンサイエンスの動向把握や課題整理等の取り組みを行うほか、今後導入する予定の他のプロジェクトチーム（教育学修支援、広報・社会貢献、蔵書構築、等を予定）の進め方や体制を検討する。また、WGにおいては、グランドデザインを実現するための提案や業務効率化の方策を検討する。

（今後の予定と課題）

- OSプロジェクトチーム試行結果のフィードバックとWG活動の総括（2021年3月）
- 新規プロジェクトチームの編成・施行（2021年4～5月）
- 各プロジェクトチームによる課題設定と業務推進（2021年5月～）

（まとめ）

本取り組みは、DX とウィズコロナのもとで、大学や大学図書館に期待される新たなサービスに真正面から向き合うため実施されたものである。当館では、2020 年 4 月の東海国立大学機構発足とともに、図書館が運営組織に加えられ、大学執行部とのつながりが強化されることになった。これにより、図書館の問題が大学の問題として執行部に伝わりやすくなり、また執行部の意図も図書館に伝わりやすくなった。大学の目標に合った図書館の課題を明確にし、それを実現するための検討を行った経過は上述のとおりである。2020 年 10 月から始まった取り組みであり、まだ道半ばである。現状の組織編成の見直しや研修制度の充実など、新たな業務に取り組むための体制構築には課題が山積しており、次年度以降も継続していく取り組みである。

別添参考資料：東海国立大学機構図書館グランドデザイン（PDF）

世界屈指の教育・研究を支える糧となる

■機構図書館のミッション

デジタルの進展によって情報があふれる世界において、人と情報を結ぶ図書館の役割はより重要になる。

世界中のどこからでも、いつでも、教育研究に必要な資料やサービスが利用できるデジタルライブラリー機能と、創造的学習を支援するフィジカルな図書館機能を充実させ、世界で活躍する人材の育成に貢献するとともに、地域特有の文化・歴史を広く世界に向けて発信し、教育研究の振興に貢献する。

■学修・教育支援■

人と情報を結び、学びのパートナーとなる図書館

- **学修・教育に関する相談窓口の強化、顔の見える専門職員チームによるサポート**
- **教員のパートナーとなり授業に沿った調査支援・情報リテラシー教育実施**
- **電子書籍等、リモート学習教材の充実**
- withコロナのアクティブラーニングスペース再構築、Libファブラボ設置により学生の創造的能力を引き出す学習環境を提供
- アカデミックセントラルを通じて両大学の共通教育に貢献
- オンライン授業コンテンツのアーカイブ支援

■研究支援■

オープンサイエンスを推進する図書館

- **研究成果の管理・共有に関する相談窓口の強化、顔の見える専門職員チームによるサポート**
- **研究データの管理・共有、研究成果物の公開・社会に向けたアピールを推進**
- 関連部署、各分野の教員とデータフォーマット管理のガイドラインを作成し、研究ノートの一元管理を支援
- **電子ジャーナル等研究に必要な資料へのアクセス確保、機構契約によるメリット**

■社会貢献■

地域に根ざした知的・文化的施設としての図書館

- **岐阜大学のアーカイブコアの博物史料、名古屋大学の高木家文書等の貴重資料の活用**
- **貴重資料をデジタル化し、ジャパンサーチ連携により世界に向けて発信**
- 機構プラットフォーム棟のミッションに貢献
- 資料と人、人と人をつなぐ場として、地域社会の生涯学習・キャリア教育に寄与
- 特定基金事業のPRや支援者との対話を通じて、地域社会との強固な信頼関係を構築

■蔵書構築/図書館運営■

大学の学術基盤を整え、機構内外から頼りになる存在として成長し続ける図書館

- **デジタル時代のRight-Scalingな蔵書構築**
- 基本業務（選書・収集・管理、全国共同データベースへの登録・整理、提供（貸出/返却）、レファレンス(こんなことを調べたい等の疑問に資料や探し方を紹介)、ILL(海外を含む他大学との資料の貸借等)、リテラシー教育（情報の正しい探索、分析・評価・発信スキル向上）講習会の企画・実施等）の業務効率化を図るとともに、これら業務経験の複合的積み上げにより深化する専門性を活かして新たなサービスを展開

人材育成

岐阜大学・名古屋大学の職員が一体となった専門職集団として
これらの取り組みを支え、さらなる専門性向上に努めることにより
世界に冠たる東海国立大学機構の学術基盤を支え教育研究の振興に貢献

No.44

館名
三重大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 2）国立大学図書館職員の資質向上
取り組みの名称
附属図書館の職員のためのスタッフ・ディベロップメント
取り組みの概要

附属図書館研究開発室・地域人材教育開発機構の協力の下、図書館機能向上のために図書館職員及び時間外開館担当等の学生アルバイトに対するスタッフディベロップメント（SD）を毎年実施し、図書館をめぐる最新情報と課題を共有した。開催実績は以下のとおり。

＜新任職員対象＞

・「大学図書館が提供する学習支援サービス：大学教育改革の仕組みと大学図書館の機能の強化」（毎年 1 回）

＜全職員対象＞

・「大学教育改革における大学図書館の役割：情報リテラシー教育」（2016 年）
・「Learning Commons in Japan: From the Global Perspective」（2017 年、海外から講師を招聘し、全学 FD／附属図書館 SD として開催）
・学習サポートデスクのあり方について検討する研修（2017 年）
・広報活動のあり方について検討する研修（2018 年）
・「図書館の利用者による問題行動：三重大学附属図書館における現状と対策」（2019 年）
・「知的創造型学習環境としての附属図書館のポテンシャルを高める」（2019 年）

また、これらのスタッフディベロップメントで明らかになった課題を解決するため、教職員と学生からなる情報リテラシー・サポート・ワーキンググループ（2018 年度からは図書館サービスワーキンググループ）を編成し、館内ポスター、展示会、書架案内等を改善した。活動については以下のホームページで報告している。

https://www.lib.mie-u.ac.jp/r_and_d/lswg/

No.45

館名
京都大学附属図書館
重点領域
重点領域 1. 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
オープンアクセス・オープンサイエンスの推進に向けた京都大学の取り組み
取り組みの概要

京都大学は、協会ビジョン（重点領域1．目標1）に基づき、オープンアクセス推進事業による研究成果公開の推進及び人文社会科学系研究基盤の強化と、オープンアクセス推進基盤を基にしたオープンサイエンスの推進に取り組んでいる。

京都大学は、2015 年に日本の大学としては初めてのオープンアクセス方針を採択し、本学の研究者が生み出した学術論文等の研究成果に対して誰もがインターネットを介して無料でアクセスして利用できるようにすることに取り組んできた。この方針を実質化するため、京都大学図書館機構はオープンアクセス推進事業（2016-2021）を開始し、学術情報リポジトリ KURENAI による学術論文等の研究成果公開の推進と、貴重資料デジタルアーカイブによる貴重資料等の一次資料のデジタルアーカイブ化に基づく人文社会科学系研究基盤の強化を行っている。オープンアクセス推進事業は、全国の学術機関に先がけてオープンアクセス実現の優良モデルを構築し、令和 2 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰、および国立大学図書館協会賞を受賞して、その実績が高く評価された。また、学術情報リポジトリ KURENAI は 2020 年 9 月、世界リポジトリランキングにおいて世界第 3 位、国内第 1 位という高い評価を得た。（https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1387062）

オープンアクセス推進事業では、以下のようなオープンアクセスに関する新規開発や国際連携を実現しており、機関リポジトリの機能向上とデジタルアーカイブの国際展開の効果を可視化した。

（1） KURENAI の学術論文登録の拡大、貴重資料の電子化・公開の推進
（2） 研究者の論文登録の負担を軽減するリポジトリ登録システムの構築
（3） 紀要論文データの ORCID（研究者情報レジストリサービス）への登録開始
（4） 世界規格 IIIF に準拠した貴重資料デジタルアーカイブの構築
（5） 貴重資料書誌（メタデータ）の国際展開（WorldCat との連携）
（6） 研究データ公開支援サイトの構築とリーフレット「これからのリサーチデータマネジメント(RDM)」の作成、根拠研究データの KURENAI 登録の開始等

さらに、オープンアクセス推進基盤を基にして、全国に先がけてオープンサイエンスに

向けた取り組みを開始し、2020 年 3 月に、研究者が研究データを管理・保存・公開するための指針となる原則を掲げた「研究データ管理・公開ポリシー」を日本の大学としては初めて採択した。このポリシーをはじめとするオープンサイエンスの取り組みは、大学発の研究成果公開の新たな実現方法の先進的モデルを社会に提示し、その発展に貢献した。

また、近年オープンアクセス学術誌の増加や、APC（Article Processing Charge，論文投稿料）の高騰、粗悪学術誌が問題となっており、研究者が適切な形式で論文を執筆し、適切な投稿先を選択するための情報収集が重要となっている。京都大学図書館機構は、こうした成果公開のために研究者が行う情報収集への支援として、以下のような取り組みを行ってきた。

(1) 学術雑誌の評価を行うツール（データベース）の整備
(2) 研究成果発信に係るリテラシー向上支援
(3) 粗悪学術誌に関する情報提供、相談窓口（問合せフォーム）の設置、注意喚起のリーフレット作成 https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/1387404
リーフレット最新版の公表（2021 年 2 月 15 日）
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1388639
(4) APC の割引情報の提供
(5) 研究評価・業績評価ツール（データベース）の整備等

さらに、大学院生向け授業「学術研究のための情報リテラシー基礎」を開設するほか、新規採用教員研修会や研究発信に係る講習会等においても論文執筆時に遵守すべき執筆上のルールや適切な投稿先の選択方法についての説明を行い、研究者への支援に取り組んでいる。

＜これまでの主な成果＞

- 京都大学オープンアクセス方針（2015 年 4 月採択）
https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research-policy/openaccess
- オープンアクセス推進事業（2016-2021）について
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/1373844
- オープンアクセス推進事業の実績：京都大学重点戦略アクションプラン中間報告
オープンアクセス推進事業（2016-2018） http://hdl.handle.net/2433/244351
- 令和 2 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰（2020 年 4 月受賞）
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1385175
- 令和 2 年度国立大学図書館協会賞 （2020 年 6 月受賞）
https://www.janul.jp/ja/award
- 学術情報リポジトリ KURENAI による学術論文等の研究成果公開の実績：登録件数約 19 万件、平均アクセス回数約 65 万件/月（2019 年度）
- 貴重資料デジタルアーカイブによる貴重資料等の一次のデジタルアーカイブ化の

実績：登録件数約約 1.8 万件（登録画像数約 137 万件）

- 研究データ公開支援・総合案内
  https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/researchdata/1380691
- リーフレット「これからのリサーチデータマネジメント(RDM)」
  https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/uploads/RDM_leaflet_201911_A4.pdf
- 研究データ管理・公開ポリシー
  https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research-policy/kanrikoukai
- 学術雑誌評価ツールの整備：JCR（Journal Citation Report）2001 年から
  https://clarivate.jp/products/journal-citation-reports/
- 研究成果発信に係る講習会の開催実績：開催回数 4 回、参加者合計 161 人
- 粗悪学術誌に関する情報提供状況：2019 年に注意喚起パンフレットを公表
  https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/uploads/20190117_predatoryjournals_warning.pdf
- 粗悪学術誌に関する相談窓口（問合せフォーム）の状況：2019 年 1 月に設置、相談件数 10 件　https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/form/1380548
- APC の割引情報の提供状況：3 出版社、8 ジャーナルを掲載
  https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/13089
- 研究評価・業績評価ツール（データベース）の整備状況：
  Web of Science　https://clarivate.jp/products/journal-citation-reports/
  Scopus　https://jp.elsevier.com/online-tools/scopus/citescore
- 大学院生向け授業「学術研究のための情報リテラシー基礎」での支援状況：日本語開催回数 4 回、英語開催回数 4 回、受講者数 144 人
- 新規採用教員研修会開催実績：開催回数 2 回、参加者数 448 人
- 粗悪学術誌に関する注意喚起
  https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/1387404
  －リーフレット「その投稿先、大丈夫？」「ハゲタカ襲来」（2020 年 9 月作成）
  －粗悪学術誌啓発リーフレット「見極めるチカラ」（2021 年 1 月作成）

京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI」
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/

京都大学附属図書館一般貴重書「天正遣欧使節肖像画」

No.46

館名
神戸大学附属図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
震災文庫におけるサンテレビジョンとの連携（阪神・淡路大震災映像の公開）
取り組みの概要

本年度、本学において地元ローカルテレビ局である株式会社サンテレビジョンとの連携が進んでおり、その一環として、同社が撮影・制作・保存している阪神・淡路大震災当時の貴重な取材映像を、附属図書館震災文庫にて受贈することとなった。その端緒として、同社が大都市を襲った直下型地震の猛威と被害を教訓として広く防災意識の高揚を図るため制作した映像「阪神・淡路大震災」（1995 年 6 月 29 日制作　19 分 06 秒）を、1 月 14 日に、本学震災文庫デジタルアーカイブにて公開した。なお、公開にあたっては、本学人文学研究科地域連携センターの協力により、デジタルアーカイブ学会が検討を進めている「肖像権ガイドライン案（第 3 版）」を参考に映像を確認し、サンテレビジョンと協議を行った。

https://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/18684/

No.47

館名
和歌山大学クロスカル教育機構学術情報センター図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供
取り組みの名称
和歌山県内自治体・図書館職員等への支援事業
取り組みの概要

地域の大学図書館および公共図書館と連携して、地域住民向けのフォーラムや巡回展示等を実施し、地域住民への学習機会について提供・充実を図るとともに、県内の図書館関係者を対象とした研修会や講演会等を各地で開催するなど、地域の学校図書館への支援を行った。

さらに、和歌山地域図書館協議会の幹事館として、図書館間の連携による事業を積極的に推進するとともに、大規模災害時における対応とその準備として、地域の図書館関係者等を対象に地域資料の保存や活用に関する研修会を開催するなど、地域の図書館への支援を充実させた。また、令和 2 年度は協議会加盟館と連携し、全国図書館大会和歌山大会において、大学・短大・高専分科会の企画・運営を行い、広く図書館職員への研修機会を提供した。

とくに、学内だけでなく、県内８自治体で研修会・講演会等を開催あるいは立ち上げに携わるなど、地域の図書館が抱える課題に応じた支援を行っている点に特色がある。

・地域住民向けのフォーラムや巡回展示等

年度	開催日	内容
H28	10.1	2016 年和歌山地域図書館協議会フォーラム「華岡青洲とその門人たち」を開催し、巡回展示を行った。（参加者 35 名）
H29	7.9	2017 年和歌山地域図書館協議会フォーラムを開催した。（参加者 27 名）
	11.10～12 月末	南方熊楠生誕 150 周年を記念し、企画展「和歌山と熊楠」を和歌山県立図書館と和歌山大学図書館にて開催した。
H30	7.14～8.26	和歌山城天守閣再建 60 周年を記念した資料展示を和歌山地域図書館協議会加盟各館で開催した。

	11.17	2018年和歌山地域図書館協議会フォーラム「ゴジラと原子力 ～映画に描かれた原水爆と原発～」を開催した。(参加者104名)
R1	10.22	2019年和歌山地域図書館協議会フォーラム「「宮沢賢治」が「江戸川乱歩」に似ている理由」を開催した。(参加者31名) また、テーマにあわせた図書館展示を(本学を含む)各館で開催した。
R2	11.20 ～30	和歌山地域図書館協議会加盟館で全国図書館大会和歌山大会第2分科会を担当し、「ゲームを活用した情報リテラシー教育」「「特別コレクション」をどう活用するか」のテーマで開催した。

・県内の学校図書館の充実へ寄与する活動

年度	開催日	内容
H28	8.8	「子どもの読書活動リレーフォーラムinなちかつうら」において、子どもの読書に関する企画に図書館長が参画するとともに、第1回フォーラムでの講演を副課長が行った(参加者約30名)。
	11.19	「紀州っ子読書活動推進フォーラム」で学校図書館の活性化とその方策について、図書館長が講演した。
H29	6.6 2.8	平成29年度学校司書の資格・養成の在り方や資質能力の向上等に関する調査研究事業検討会に図書館長が参画し、講義・助言を行った。
	7.5	和歌山県図書館関係職員研修会「地域資料の保存と活用～災害に備える～」を開催し、図書館特任准教授が講演を行った。(参加者62名)
	9.1	和歌山大学図書館が企画・担当し、平成29年度国立大学図書館協会近畿地区事業「そのとき図書館はどう動くか？～大規模災害時における対応及び事前準備について～」を開催し、図書館特任准教授が「災害時における歴史資料の救援・保全」と題して講演を行った(参加者31名)
	10.30	「図書館基礎講座2017 in 関西」の第一部を和歌山大学図書館において開催し、図書館長が講師を務めた。(参加者32名)
	1.21	「平成29年度きのくに子供の読書活動ネットワークフォーラム」において、館長が企画運営委員を務めた。(参加者85

		名）
	1.24	平成 29 年度日高地方市町教育委員研修会において、館長が講演を行った。
	2.10	「子どもの読書活動リレーフォーラム in なちかつうら」において、図書館長が企画運営委員として参画するとともに（H29.9.13、H30.2.27）、第 5 回フォーラムでトークセッションを行った。（参加者 37 名）
	3.13	橋本市図書館勉強会において、館長が講演を行った。
H30	6.20	和歌山大学図書館フォーラム「自分たちの図書館をつくる」を開催し、学校・公共図書館及び海外の図書館の先進的な事例に関する講演や報告を行った。（参加者 43 名）
	4.17 5.19	橋本市図書館職員等研修会及び第 25 回橋本市図書館講座で図書館長が講師を務めた。
	7.27	串本町の図書館関係者向け研修会「読書活動を推進していくためには」で図書館長が講演を行った。（参加者 31 名）
	8.9	第 21 回近畿学校図書館夏季セミナー和歌山大会で図書館長が特別分科会で講演「よりよい読書環境を求めて」を行った。
	9.19	紀の川市社会教育委員会研修会で図書館長が公立図書館の現状とあり方をテーマに講演を行った。
	12.2	「きのくに子供の読書活動ネットワークフォーラム」に図書館長が企画運営委員として参画し、トークセッションを行った。（参加者 117 名）
	2.10	「子どもの読書活動リレーフォーラム in なちかつうら」に図書館長が企画運営委員として参画し、第 5 回フォーラムでトークセッションを行った。（参加者 58 名）
R1	8.28	本学にて研修会「資料を救うー水損資料への対応」を開催した。（参加者　県内の図書館関係者 17 名）
R2	12.23	東牟婁地方教育委員会連絡協議会において、学校司書を対象とした「体験してみてわかる！ビブリオバトルの神髄！」の講師を図書館職員が務めた。（参加者 6 名）

No.48

館名
広島大学図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
広島大学ライティングセンターが CRLA の ITTPC「レベル１」に認定
取り組みの概要
広島大学ライティングセンターが CRLA(The College Reading & Learning Association)における ITTPC（International Tutor Training Program Certification）（国際チューター育成プログラム認定）の審査に合格し、国際標準のチュートートレーニングプログラム「レベル１」を実施する機関として認定された。(2021.2) ITTPC は CRLA による国際的なチュートートレーニングプログラム認定であり、世界中の 1000 を超えるプログラムがレベル 1 の認定を受けている。この認定を受けるためには、該当のプログラムが必要な研修やチューターの評価及びフィードバック等を実施しており、チューターの能力やスキルの向上に寄与していることが求められる。 国内では、名桜大学（2002 年)、公立はこだて未来大学（2015 年)、神田外語大学（2020 年）に続き 4 機関目の認定となる。 CRLA は米国に本部を置く学会であり、 ITTPC の詳細については以下の URL を参照： https://www.crla.net/index.php/certifications/ittpc-international-tutor-training-program

No.49

館名
徳島大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
機関リポジトリへの登録推進
取り組みの概要

徳島大学では,「徳島大学におけるオープンアクセスに関する方針」（平成２８年１月１９日学長裁定）を策定し，研究戦略の位置付けの一つとして「徳島大学機関リポジトリ」による学術研究成果の公開について取り組んでいる。この取り組みを推進するため，わかりやすい／使いやすい登録申請システムの構築や，適切な案内・広報に力を入れている。

具体的な取り組み内容としては，以下の 4 点が挙げられる。

① 機関リポジトリと教育・研究者情報データベース（EDB）とのシステム連携

・EDB の論文情報画面からの機関リポジトリ登録申請（R1.7～）

EDB への論文情報入力時に機関リポジトリへの登録申請も併せて行えるよう，EDB の論文情報画面に機関リポジトリへの登録状況を参照・表示する欄を設け，未登録のものについては登録申請ボタンも表示するよう設定した。

・EDB の業績一覧から機関リポジトリの該当論文への自動リンク（R1.4～）

機関リポジトリの周知や本文へのリンク提供を目的として，EDB の業績一覧画面から機関リポジトリの該当論文ページへのリンクを自動生成している。

② RPA（robotic process automation）を活用した機関リポジトリ登録案内メール送信（R1.10～）

EDB に登録された論文情報から機関リポジトリ未登録のものを抽出し，EDB に入力した教員宛に案内メールを送信する作業を，RPA による自動処理で行っている。

③ 著者宛アクセス状況通知（H30.6～）

機関リポジトリシステム（Earmas）に，各論文のアクセス状況を著者宛にメール通知する機能が搭載されており，機関リポジトリへの登録の効果報告として，

定期的に（3ヶ月に一度）メール通知を行っている。

④広報

・各種説明会やセミナー等での広報活動

科学研究費補助金説明会，業績評価説明会，研究倫理セミナーなどの機会にオープンアクセス推進や機関リポジトリについて説明する時間を設け，広報活動を行っている。

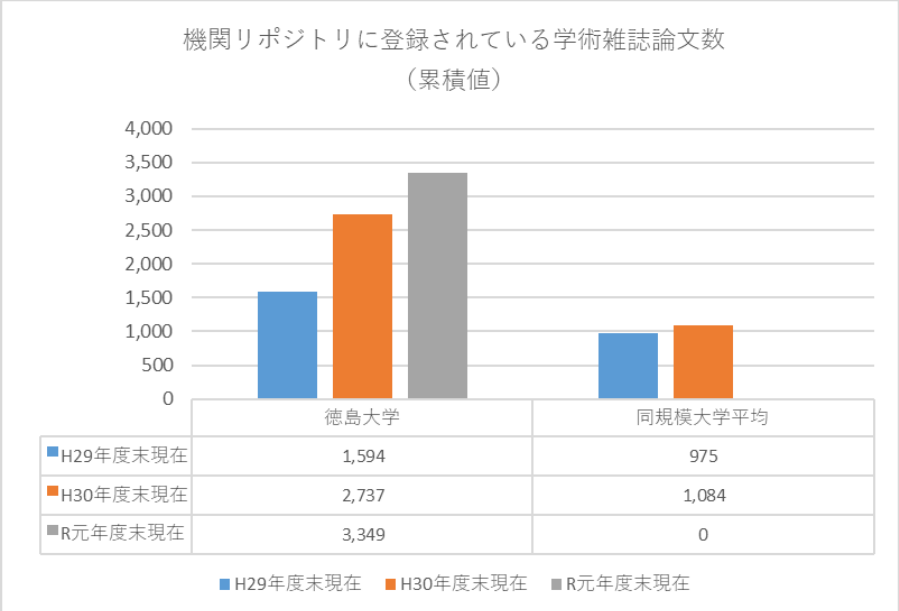
・パンフレットの配布

オープンアクセスについての説明や機関リポジトリへの登録案内，ハゲタカジャーナルへの注意喚起に関するものなど各種フライヤーを，研究推進部門とも連携して配布している。

・オープンアクセスの解説ページ作成

機関リポジトリの Web サイト内に，オープンアクセスについての解説ページを作成した。

これらの取り組みにより，平成 29 年度～令和元年度にかけ，学術雑誌論文の機関リポジトリへの登録数が増加した。その結果，同規模大学に比べ，多くの学術雑誌論文を機関リポジトリで公開することが出来ている。



※学術情報基盤実態調査（H30，R 元年度版）を元に算出
R 元年度末現在の同規模大学の数値は未発表

No.50

館名
徳島大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
各種媒体を用いた情報発信と展示の併用による図書の利用促進
取り組みの概要

徳島大学附属図書館では，Web や冊子による情報発信と館内展示を併せて行うことで，図書の利用促進に取り組んでいる。

具体的な取り組み内容としては，以下の４点が挙げられる。

①新入生にすすめる私のこの一冊

徳島大学の教職員による，新入生へのおすすめ本の紹介を目的としている。

春の入学時期に，同名の冊子を新入生向けに発行・配布すると共に，図書の展示を行っている。冊子は PDF で Web 公開もしている。

②授業サポートナビ

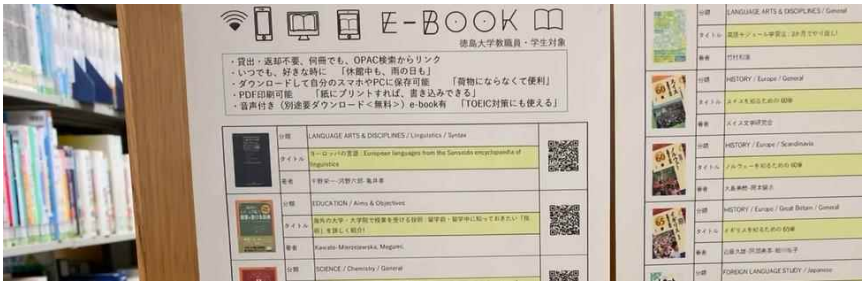
各講義のシラバス掲載図書や，学習に必要な図書・Web サイトを徳島大学の教員に紹介していただいてリストを作成し，紙媒体による配布と Web 公開を行っている。蔵本分館では常設のコーナーを設置し，図書を授業ごとに別置している。

③My Recommendations

徳島大学の教員や学生に「読んでよかった」「感動した」「参考になった」図書の紹介文を書いていただき，図書に添えて展示している。紹介文はブログやSNS，OPACでも公開している。

④電子書籍のQR展示

平成30年度から電子書籍周知のため，表紙画像と内容紹介にQRコードを付けて、関連分野の書架等に掲示を行っている。令和2年度から電子書籍のリクエスト機能を活用し，利用者ニーズにあったコンテンツの充実に取り組んでいる。



No.51

館名
徳島大学附属図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
英語多読の推進
取り組みの概要

徳島大学附属図書館本館では，読書を通じた英語学習環境の提供を目的として，英語多読の推進に取り組んでいる。

具体的な取り組み内容としては，以下の 2 点が挙げられる。

①多読コーナーの設置

英語学習者向けの洋書を語数によりレベル分けして並べた「多読コーナー」を設置している。英語学習という目的に特化しており，簡単な本から読み応えのある本まで幅広く置いているため，継続的な利用者も多く，英語の講義でも活用されている。

令和元年度には，ネイティブの英語担当教員が多読コーナーに時間を決めて待機し，英語学習に関する相談や英語多読図書の効果的な選び方に関する助言を英語で行った。

②多読ラリー

徳島大学の学生・教職員を対象として，読書記録手帳を無償で配布している（要申込）。読んだ多読図書について語数や感想を記録することで，英語多読を継続するための一助となる事を目的に，5 万語・10 万語といった区切りの語数を

達成した参加者には，賞状を発行している。この取り組みは，総合科学部の語学マイレージ・プログラム（学生に一定水準以上の語学力，コミュニケーション力及び自己主導型学習力を身に着けさせることを目的に，客観的評価に基づくマイレージポイントを付与するためのプログラム）に追加される予定である。

No.52

館名
徳島大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
学生・教職員と共に創る学習支援の場「SSS(Study Support Space)」
取り組みの概要

徳島大学附属図書館本館では，ラーニング・コモンズにおける人的支援として学習支援の場である SSS(Study Support Space)を大学公認サークル「学びサポート企画部」との協働により運営し，学習支援に取り組んでいる。

SSS では，教員や学生（主に大学院生）による学習支援アドバイザーが時間割に基づいて待機し，学生からの相談に対応している。「学びサポート企画部」が時間割作成や学習支援アドバイザーへの連絡調整等の企画運営を担い，図書館は職員がミーティングに参加して活動への助言を行う等の支援を行っている。

No.53

館名
九州大学附属図書館
重点領域
重点領域 1. 知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
九州大学に蓄積された知を世界に発信
取り組みの概要

九州大学では、創設以来の教育研究によって生み出された研究成果や資料、標本などの知の蓄積を、デジタル化し、「九大コレクション」として世界に発信している。さらに、その活用と社会還元を図るため、オープン化に力を入れている。

■　貴重資料等のデジタル化公開の推進

九州大学では、1996 年度から学内の研究者との協働により所蔵する貴重資料のデジタル化公開を継続的に実施し、Web サイトより公開している。2016 年度からは、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業」（2014-2023）へ拠点大学として参加し、和本のデジタル化を精力的に進めている。

古医書、江崎文庫（本草学・昆虫学）、桑木文庫（天文・和算）など、本学の特徴的なコレクションを公開

展示会で作成した図録の解説を、デジタル化画像と合わせて公開し、よりリッチな情報を提供

2020 年度は、コロナ禍により貴重資料の閲覧に来ることができない学内外の利用者のために、リクエストに応じ迅速にデジタル化公開を行った。また、リアルな展示会に代わり、本学の総合研究博物館や大学文書館との合同で電子展示会を開催し、資料ばかりでなく標本や大学文書など、九州大学創設期の著名な研究者に関するコレクションを多角的に見せる試みを行った。

https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/exhibition/asiaweek2020

VR 撮影で 360 度回転させてみることのできる蛸壺の標本

2018 年 10 月の新中央図書館開館に伴う人文社会科学資料の集中化にあわせ、資料の電子化を企画実施する専任職員ポストを設置することで、これらの取り組みを加速させている。

■　オープン化

貴重資料等の画像データのユーザビリティ及び国際流通性を向上させるため、画像データを公開する九大コレクションにおいて国際規格 IIIF（International Image Interoperability Framework）に対応した。これにより、他機関の画像データとの比較など特に研究上の利便性が飛躍的に向上した。

また 2018 年 10 月からは、貴重資料等の公開画像について、無償かつ申請不要で、改変・商用利用も含めた自由な利用を可能とした。このことにより、教育研究への利便性が格段に向上しただけでなく、マスメディアから個人の SNS に至るまで広く社会一般での利活用が促進された。

さらに、オープン化の一環として、貴重資料のメタデータ（目録データ）の OAI-PMH 形式での提供、及び全件ファイルの TSV 形式での提供を 2020 年 3 月開始した。

参考）

国際規格 IIIF に対応　https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/IIIF

貴重資料等の画像データの二次利用について　https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/reuse

メタデータの提供　https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/metadata

■　中村哲著述アーカイブの構築・公開

2019 年 12 月にアフガニスタンにて亡くなられた故中村哲医師（九州大学特別主幹教授）の意志を次代に伝えるため、ペシャワール会協力の下、「中村哲著述アーカイブ」を構築し、2021 年 3 月公開した。

https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/exhibition/nakamura/

本アーカイブは、九州大学の研究者による研究成果を蓄積公開する「九州大学学術情報リポジトリ QIR」上に設けたもので、これまで中村氏が書き著した文章や発した言葉を集約し、インターネット公開することにより、貴重な著述の散逸を防止するとともに世界中からの永続的なアクセスを可能とするものである。氏の活動の記録・報告類や、大小様々な媒体で発信された記事類、講演記録、映像など、今後も継続して収集しながら充実させていく予定である。

医療、工学、農業、国際協力、哲学、宗教など、あらゆる分野において、氏の活動は、教育・研究の極めて優れた素材となると考えている。教育研究のみならず、広く社会に活用されることを期待している。

No.54

館名
九州大学附属図書館
重点領域
重点領域 2. 知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
新しい中央図書館の整備・開館　～アジアのトップブランドとして～
取り組みの概要

国内最大規模（収容可能冊数：約 350 万冊、開館時蔵書数：約 240 万冊、座席数：約 1,400 席）の中央図書館を整備・開館した（2018.10～）。
2011 年に百周年を迎えた本学の「次の百年」を担う図書館として、学内の学習・教育・研究活動を支えている。

○アクティブラーニングスペースで主体的な学びを支援

アクティブラーニングスペース「きゅうとコモンズ」は、会話をしながら学習できる空間。1,000 ㎡という広大なスペースでは、学習スタイルに応じたフレキシブルな設備が知の交流をうながし、学生の主体的な学びを創出している。

〇九州大学 100 年の歴史が集約された、人文社会科学系の研究拠点

中央図書館には、旧中央図書館、文系合同図書室、記録資料館、旧六本松図書館に所蔵されていた人文社会科学系資料を集約した。実際に手に取って資料を選ぶことのできる開架書架に多くの資料を配架している。広大な知の世界を体感できる場となるとともに、貴重資料の電子化（デジタルアーカイブ）も推進し、Web 上でもアクセスできるコンテンツの充実を図っている。

〇新図書館が学習・教育・研究に貢献

巨大な吹き抜け空間には、滞在する人の「見る・見られる」関係をつくりだし、相互に知的刺激を与えている。様々な形や大きさの机があり、スタイルに応じた多彩な学習・研究環境を用意した。

１年生の必修科目「課題協学科目」では、各演習グループが図書館の資料を使いながら、「きゅうとコモンズ」で討議・演習に取り組んでいる。

その「きゅうとコモンズ」では、講習会の実施や、学内の研究組織と協力し国際的シンポジウムやセミナーを開催する事により、研究や教育の機能強化に貢献している。

※写真の二次利用はお控えください。

No.55

館名
九州大学附属図書館
重点領域
重点領域 3.新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築
目標
目標 1）新たな人材の参画
取り組みの名称
図書館の学習支援活動における図書館 TA(Cuter)との協働
取り組みの概要

九州大学附属図書館（以下、当館）は、学生へのピアサポートを行う図書館 TA(Cuter)（以下、図書館 TA）を雇用し、図書館職員と協働しつつ、学生の視点に立った幅広い学習支援を行っている。

取り組み経緯

2012 年 3 月に中央図書館で 5 名の図書館学習サポーター(Cuter)が活動を開始し、その後、伊都（現・理系）および医学の各図書館に活動を拡大して実績を評価された結果、2015 年 12 月に正課外での教育支援業務を行うティーチング・アシスタント(TA)として学内の教育制度に正式に位置づけられた。2018 年 10 月のキャンパス統合移転に伴い、図書館における教育支援業務の企画調整を所掌する部署として当館事務部に新設した学術サポート課を中心に、当館研究開発室の教員で組織する「学習・教育支援ワーキンググループ」とともに監督・指導体制を整え、図書館 TA と協働した学習支援に組織的に取り組む体制を確立した。

2019 年 10 月に開始した九州大学の新 TA 制度により、「九州大学ティーチング・アシスタントに関する要項」で定められた、アドバンスド・ティーチング・アシスタント(ATA)として、2021 年 1 月現在、中央、理系、医学の各図書館で計 15 名の図書館 TA が活動している。

取り組み内容

図書館 TA は図書館職員の助言の下、主に以下の業務に従事している。

(1) 学習相談

中央・理系の各図書館内に設置した学習相談デスクで、レポート指導、学習法・解法指導、履修・進路などの学生生活支援に関する相談に応じている。2019 年度は 285 件の相談に対応した。

(2) 学習ガイドの作成

当館が提供するウェブ上の学習ガイド Cute.Guides は、図書館内外で利用可能

な各種情報源へのナビゲーションを提供し、学生の自律的な学びを支援するサービスである。ガイド記事作成には図書館 TA(Cuter)が中心的な役割を果たしている。2020 年 12 月末現在、192 点のガイドを公開しており、このうち 144 点が図書館 TA(Cuter)の作成したガイドである。大学院生の専門知識を生かした詳細かつ分かりやすい情報を提供していることが特徴である。

(3) 講習会

図書館 TA(Cuter)が教材作成、講師を担当し、学部 1 年生を対象とした「レポートの書き方講座」「実験レポート講座」「プレゼン講座」を実施している。

(4) 学生交流イベント

学部・学府・学年の垣根を越えた学際的な研究交流イベント「Quricon」や、図書館 TA がテーマを設定し企画するシリーズイベント「Cuter Café」を実施している。

当館では、このような図書館 TA の活動に必要な資源と機会を提供するため、教育デザイン理論や授業担当教員へのヒアリングに基づく講習会設計、学習ガイドの質を保障する査読プロセスや優秀ガイド選定の仕組み、スキル向上のための研修機会の提供、ミーティングや業務記録による活動の振り返り等、活動の質を維持するための運営体制を構築してきた。

2020 年の新型コロナウイルス感染拡大下においても、図書館 TA の在宅勤務が可能な体制を整え、学習相談のウェブ受付や感染防止策を施した上での対面相談、学生向け電子ブックのガイド公開、1 年生向け講座の e ラーニング教材作成、「Cuter Café」のオンライン開催など新たな取り組みを行った。

取り組み成果

図書館 TA と協働した学習支援活動の学内認知度は年々高まり、2019 年度の「レポートの書き方講座」の受講者は前年比 2 倍の 539 名となった。また、回を重ねて確立された講座を e ラーニング教材として提供し、コロナ下の 2020 年度においても対面型講習会と同等の受講者数と高い評価を得ている。

対外的には、2018 年 12 月にアジア各国から図書館情報学分野の研究者が集う国際会議 ALIRG 2018 で、図書館職員が学生協働について発表しベストポスター賞を受賞した。また、Cute.Guides が提供する情報の質の高さも評価され、ガイド「はじめての実験ノート」は研究不正防止対策の参考教材として、科学技術振興機構(JST)の「研究公正ポータル」からリンクされた。

2019 年 7 月には、Cute.Guides のガイド記事を、国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築する「レファレンス協同データベース」に調べ方マニュアルとして登録した。調べ方マニュアルへのデーター括登録は、国立大学では初の事例である。これに伴い、2019 年の当館による年間データ登録点数が 465 点となり、

「レファレンス協同データベース」の発展に寄与したとして、国立国会図書館長より感謝の礼状が授与された。さらに 2019 年 11 月には「第 5 回図書館レファレンス大賞」において Cute.Guides による課題解決支援が図書館振興財団賞を受賞し、審査後の講評では典型的な学生協働によるピアサポートであり、地域に対する貢献も意識した事例として評価された。

まとめ

図書館 TA の活動には、大きく 3 つの意義がある。

(1) ピアサポートを通じて学生の学びの意欲を向上し、大学におけるアクティブラーナーの育成に貢献すること

(2) 図書館職員や教員からの助言、仲間同士の学び合いにより、図書館 TA 自身が成長すること

(3) 講習会の企画や講師の経験を通じて、大学院生が教育者になるためのトレーニング機会を提供すること

図書館 TA が新たな人材として参画したことにより、図書館における学習支援活動に図書館 TA の専門知識や経験が生かされ、サービスを拡充することができた。今後も学生・図書館職員・教員が一体となり、国立大学図書館協会ビジョン 2020 が目指す多様な知の創出と共有の実現に寄与していく。

図書館 TA(Cuter)

感染防止策を徹底した対面の学習相談

ウェブ上の学習ガイド Cute.Guides

レポートの書き方講座 e ラーニング教材

No.56

館名
九州工業大学附属図書館
重点領域
重点領域 2.知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供
目標
目標 1）知を創出する場の拡大・整備・提供
取り組みの名称
他大学との学生サポーター合同研修会の実施
取り組みの概要

《概要》

平成 29 年度から、本学図書館学生サポーターと近隣の公立大学（北九州市立大学）図書館サポーターによる合同研修会を毎年 2 回実施し、サポーター同士の交流の機会を設け、館を超えた学生・職員の新たなネットワーク創出に取り組んでいる。また、学生自身が講師を務めることでスキルの向上を図るとともに、理系・文系大学の互いの得意分野を活かし苦手分野を補完し、知の創出や研修の充実を図っている。

《取組内容》

・平成 29 年度

第 1 回 平成 29 年 12 月 7 日（木）於：北九州市大学図書館

1. 図書館見学
2. 自己紹介
3. ポスター発表 （図書館紹介＆活動紹介）

第 2 回 平成 29 年 12 月 15 日（金）於：九州工業大学附属図書館

1. 図書館見学
2. 共通点グランドスラム
3. ワークショップ 1：PEST 分析

4. ワークショップ 2：SWOT 分析

・平成 30 年度

第 1 回　平成 30 年 12 月 6 日（木）於：北九州市大学図書館

1. 図書館見学
2. 自己紹介
3. 本の紹介 POP 作成講座

第 2 回　平成 30 年 12 月 13 日（木）於：九州工業大学附属図書館

1. アイスブレイク：全員パス回し
2. 講座：デザインについて
3. パワーポイントの使い方と伝わるデザイン講座
4. 図書館見学

・令和元年度

第 1 回　令和元年 12 月 12 日（木）於：北九州市立大学図書館

1. よむけんクエスト（謎解きゲーム形式による図書館見学）
2. ビブリオバトル

第 2 回　令和元年 12 月 20 日（金）於：九州工業大学附属図書館

1. アイスブレイク：お絵描き伝言ゲーム
2. 講座：PowerPoint 活用講座
3. 図書館見学

・令和 2 年度

第 1 回　2020 年 12 月 17 日（木）於：Zoom

1. 接続確認
2. 自己紹介
3. アイスブレイク：モノしりとり・ポーズあてゲーム

第 2 回　2020 年 12 月 24 日（木）於：Zoom

1. グループワークの趣旨説明、Zoom の操作案内、班分け
2. グループ討議（コロナ禍の学生生活について）
3. 各班発表
4. 振り返り

No.57

館名
琉球大学附属図書館
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 3）知識や情報の発見可能性の向上
取り組みの名称
琉球・沖縄関係分野における教育・研究の情報基盤構築
取り組みの概要
琉球・沖縄関係分野における教育・研究の情報基盤構築を目指して 2020 年度に「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」(以下「デジタルアーカイブ」という)のリニューアルを実施した。リニューアルに伴い、International Image Interoperability Framework（IIIF）へ対応し、OAI-PMH によるメタデータ出力機能が実装された。以下に各種ツールの活用及びシステム連携の事例をあげる。 ・市民参加型の古文書解読プロジェクト「みんなで翻刻」にデジタルアーカイブの画像提供を開始した。そこで生成された翻刻文をデジタルアーカイブにも登録し、デジタルアーカイブの利便性を向上させている。 ・OAI-PMH 実装により、国立情報学研究所の運用する学術機関リポジトリデータベースを通じて、デジタルアーカイブのメタデータ流通を実現した。ジャパンリンクセンターの DOI 付与や国立国会図書館サーチでも検索可能になっている。現在、ジャパンサーチとの連携についても調整を行っている。 また、貴重資料関係の規程を改正し、当館の所蔵資料デジタルアーカイブで公開している資料の内、著作権の消尽している画像について自由利用を可能とした。

No.58

館名
奈良先端科学技術大学院大学
重点領域
重点領域 1.知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有
目標
目標 1）教育研究成果の発信、オープン化と保存
取り組みの名称
学術機関リポジトリ naistar による知のオープン化
取り組みの概要
奈良先端科学技術大学院大学では、本学の教育・研究成果を発信するため、学術機関リポジトリ naistar を 2009 年 2 月より正式公開している。 本学では、開学以来資料の電子化を行っており、学外公開の許諾を得ているものについては naistar に登録している。 学位論文については博士論文だけでなく修士論文も電子化しており、著者の許諾の取れているものは博士論文のインターネット公開が義務となった 2013 年以前の論文も公開している。 学術論文の遡及入力活動として、2016 年から 2018 年の 3 年をかけて、研究業績管理システムに登録されている業績のうち naistar に未登録の 10,566 件に対し登録の可否を照会し、登録承諾があり、かつ著作権に問題がない研究成果 516 件を新たに機関リポジトリ naistar に登録した。 教員による自発的な研究成果発信を促すための大学組織全体による意思表明として、2019 年 7 月 16 日に「奈良先端科学技術大学院大学オープンアクセス方針」を採択し、naistar を通して学術研究・教育成果の公開を進めるため、運用のためのガイドラインを作成した。さらに、naistar へのアクセス性向上を目指し、研究室ウェブサイト等の業績ページにおいて、各業績情報から naistar に登録されている論文を直接ダウンロードできる仕組みを構築した。 研究業績管理システムと連携し、業績入力時に naistar への登録の可否も登録できるようになっているが、オープンアクセス方針を受け、登録可否の選択を必須とする改修を行った。また、著者最終稿を研究業績管理システムからアップロードできる機能を追加した。 2020 年より博士論文に DOI(デジタルオブジェクト識別子)を付与し、国立国会図書館と本学が共に保存する資料にはマルチプルレゾリューション機能によるアクセス手段の選択が可能になっている。引き続き遡及入力を実施しており、2021 年度には完了する予定である。

国立大学図書館協会近畿地区協会
平成 30 年度
各館の特色ある活動報告

滋賀大学
滋賀医科大学
京都大学
京都教育大学
京都工芸繊維大学
大阪大学
大阪教育大学
兵庫教育大学
神戸大学
奈良教育大学
奈良女子大学
和歌山大学
奈良先端科学技術大学院大学
国際日本文化研究センター
国立民族学博物館

平成 31 年 4 月 22 日（月）

2019年４月

平成３０年度

滋賀大学附属図書館の特色ある活動報告

滋賀大学附属図書館の概要

本　　館	：	場所	彦根キャンパス（経済学部・データサイエンス学部）
		蔵書	386,558 冊
		入館者数	167,361 人
教育学部分館	：	場所	大津キャンパス（教育学部）
		蔵書	261,330 冊
		入館者数	81,127 人

企画展示

1. 所蔵貴重書の公開展示（彦根キャンパス）

所蔵資料の調査及び評価のもと、一部貴重資料を展示ケースで解説付きで公開。春学期は近代統計の父とされるケトレの著書を、秋学期は教育改革実践者と知られるフランソワ・ギゾーの自筆書簡を展示した。

2. 第 32 回教科書展の開催（大津キャンパス）

明治初期から昭和戦前期までの近現代日本の教科書のあゆみを振り返る「教科書展」（昭和 60 年～）を本年度は「『割合』を通してみる算数科教科書」をテーマとして行った。(9/25-10/18)

3. 個別企画展示の実施（彦根・大津キャンパス）

「Welcome to the Library 新入生にお勧めの本」、「論文・レポートに関する図書」等、時宜に即したテーマで実施し、図書館員のアイデアと多種多様な蔵書を活かした企画展示を行った。

《展示テーマ》
「新しいこと、始めよう」「教育実習に向けて」「図書館の中の人がおすすめする本」「日本人とノーベル賞」「タイ北部山地民モン族の刺繍―タイ協定校との交流」「先生がみなさんにおすすめする本」「人口知能(AI)に関する本」「恋愛に関する本を集めてみました」「論文作成に役立つ図書」「教育実習に向けて」「学生が選ぶ一冊」「旅に出かけたくなる一冊」「滋賀を知る」など

講習会

1. 情報リテラシー教育（彦根・大津キャンパス）

1 年生必修科目「大学入門セミナー」の一環として、「図書館情報リテラシー」を開催。図書館利用の概略、図書・文献情報検索の基本的知識、資料の入手方法について OPAC、CiNiiBooks の使い方実習を交えてレクチャーを行った。（４月中旬～５月中旬）また、新入学の大学院生・専攻科生向けには別途利用説明会を開催した。

2. デジタル教科書利用講習会（大津キャンパス）

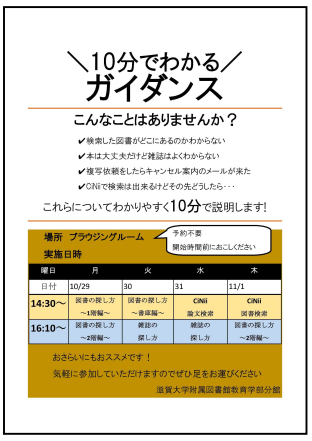
デジタル教科書の多くのコンテンツ、機能について講習会を実施し、レポート作成、教員採用試験対策の支援を行った。(5/25)

3. CiNii 講習会（大津キャンパス）

CiNii Books を使った図書の検索・入手方法、他大学所蔵図書の検索、取り寄せ方法について講習会を行った。(6/19、6/21)

4. 10 分ガイダンス開催（大津キャンパス）

図書の探し方、雑誌の探し方、CiNii 図書検索の仕方など、ポイントを絞った基本ガイダンスを集中的に開催。（10/29～11/1 各日２回開催）



5. 国立国会図書館関西館利用ガイダンス（大津キャンパス）

国立国会図書館関西館から講師を招へいし、関西館の利用方法や国立国会図書館の資料検索方法について講習会を開催した。(11/7)

イベント

1. リユース本の活用（彦根・大津キャンパス）

教職員から提供された不要図書、図書館からの除籍図書など、不要となった図書の持帰りイベントとして、本館では「附属図書館図書リユース市」を開催（10/30～11/1）、教育学部分館では「リユース本コーナー」を設置し（11 月下旬～12 月）、図書館利用者の関心をより一層高めた。

2. 古本募金の取り組み開始（彦根・大津キャンパス）

読み終えた本等を本学が指定する業者に提供し、その買取り金額が学生図書充実のための寄附となる「古本募金」の取り組みを開始。大学教職員、学生、保護者等に広く周知し、附属図書館からの除籍本を含め、寄せられた古本による 30 年度の寄附金は、教育学部附属学校園へ贈呈され、児童・生徒の図書購入に充てられた。

3. 図書館クイズラリーの開催（大津キャンパス）

新入生をはじめ、多くの学生に図書館を身近に感じてもらうため、図書館クイズラリーを実施。図書館用語、図書館全般の情報、蔵書検索の方法、図書館の利用案内などをクイズとして盛り込んだもので、誰でも気軽に参加でき、クイズを解くうちに図書館の利用の仕方がわかり好評を博した。景品には図書館オリジナルブックカバーを用意し、こちらも大好評。（4/3～4/20）

その他

1. 文献取り寄せサービスの費用支援（彦根・大津キャンパス）

卒業論文・修士／博士論文作成およびゼミでの研究発表等への支援として、学部生・大学院生を対象に、他大学図書の取り寄せや論文等の複写物の取り寄せにかかる費用を大学が負担する応援キャンペーンを実施した。

2.　デジタル化資料送信サービス（彦根・大津キャンパス）

国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を図書館の館内で利用できるサービスとして、国立国会図書館デジタル化資料送信サービスを提供し、利用者の利便性を図っている。

3.　職場体験（彦根・大津キャンパス）

彦根市内・大津市内中学生の職場体験学習を受入れ、地域教育組織が推進している中学生チャレンジウィーク事業との協力連携を図った。（7 月、11 月）

4.　リポジトリ移行（彦根・大津キャンパス）

本学学術情報リポジトリをクラウド型の機関リポジトリ環境提供サービス「JAIRO Cloud」に 10 月に移行した。またパーマネントリンク（固定 URL）も継続して使用し、利用者の利便性を考慮したうえで研究成果の発信を推進している。

平成 30 年度　滋賀医科大学附属図書館 特色ある活動

重点領域 1：知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有

- **教育研究成果の発信・オープン化支援**
  - 国際オープンアクセスウィークに連動して、機関リポジトリ「びわ庫」登録を呼びかける学内向け広報を初めて実施した。1 講座および 3 名の教員から計 16 件の新規登録依頼を受けた。
  - 研究成果発信支援の一環として昨年度に続き研究推進課・図書課共催「研究倫理教育研修会」を 2 回実施した。

第 1 回（H30.7.25）
研究者に求められる発表倫理
不正のない論文発表のために
講師：山崎茂明氏
（愛知淑徳大学名誉教授）

第 2 回（H30.11.22）
研究者のための画像処理と
施してはいけない画像処理
講師：　湖城恵氏
（株）エルピクセル

  - 研究推進課に協力し、学長裁量経費による研究助成（若手萌芽研究）成果発表ポスター展示を図書館内で実施した（H30.11.15～12.10）。

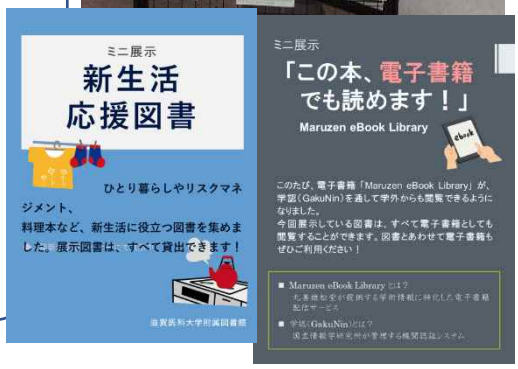
- **電子ジャーナル整備**
  - 図書館備付外国雑誌 WG（附属図書館長を委員長に教員 9 名で構成）のもと、全講座対象にポイント制希望アンケートを実施し、アンケート結果と論文単価等を考慮して契約電子ジャーナルを毎年選定している。今後の整備方向性について検討するため、全構成員を対象に「海外電水ジャーナル整備状況満足度調査」（Web アンケート）を実施した（H30.10）。

重点領域 2：知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供

- **学生選書ツアー**
  - 選書に学生の視点を取り入れ図書館に親しみを持ってもらうために昨年度に続き「学生選書ツアー」を実施した（H31.2.22）。
  - 選書をもとに参加学生と協働で POP・ポスター作成、図書展示を予定している。

＜学生による図書展示ポスター＞

- **図書展示**
  - 教職員との連携、学生協働、学内イベント・セミナー連携、他機関連携などにより多様なテーマでの図書展示を年間通じて実施している。平成 30 年度は計 14 回実施した。(*はミニ展示)



「本学教職員がすすめるこの本 2018」
「准講会コラボ企画：先生の書斎から～今伝えたいメッセージ～」
「選書ツアーに行ってきました！」
「リレー・フォー・ライフ関連図書」
学園祭「若鮎祭」講演者著作展示（上野千鶴子ほか）
「第 11 回国立女性会館（NWEC）所蔵図書展示」
「旅に出たくなる」「本でふりかえる平成時代」
「新生活応援」「科研費申請応援フェア！」
「研究倫理・発表倫理」「画像処理関連図書」
*「SPSS」

重点領域 3：新しい人材：知の創出

- **情報リテラシー教育の実施**
  - 医学部医学科・看護学科・大学院の授業と連携し、各レベルに応じた情報リテラシー教育を実施している。また附属病院各部局（看護部・薬剤部等）の要望に応じ現職医療従事者向けにも検索講習会等を実施している。

オリエンテーション
・新入生/編入生オリエンテーション（4 月・10 月）　・臨床実習（医学科 5 学年）オリエンテーション
・看護師特定行為研修生オリエンテーション

学部生（1 学年・3 学年・5 学年）対象
・情報科学（医・看護学科 1 学年・講義）　・アカデミックライティング（医学科 1 学年・講義）
・医学英語（医学科 3 学年・講義（英語論文検索））
・看護学科文献検索講習会（3 学年全員・ゼミ単位　計 17 グループ）
・神経内科臨床実習 文献検索講習会（医学科 5 学年・計 23 グループ）

修士・博士課程対象
・医学総合研究特論（医学専攻博士課程・講義）・看護学研究方法論Ⅰ・Ⅳ（看護学専攻修士 1 年・講義）

現職医療従事者対象
・看護部研修会（4/25・5/17・6/28）　・薬剤部 UpToDate 講習会・Lexicomp 説明会

その他　・UpToDate 利用講習会　・ぷち講習会（PubMed・医中誌 Web・Scopus 等）毎週火・木（予約不要）

- **日本医学図書館協会での活動**
  - NPO 法人医学図書館協会（JMLA）の諸活動を OJT の一環と位置付け積極的に参加している。平成 30 年度は診療ガイドライン WG・NLMC 日本語版 DB 作成 WG・『医学図書館』編集委員に参加。

京都大学図書館機構

国立大学図書館協会ビジョン 2020 に基づく平成 30 年度の活動状況

1. 知の共有：学術情報基盤の整備

1.1. オープンアクセス推進事業プロジェクト

第 3 期中期計画の重点実施事業「京都大学重点戦略アクションプラン（2016-2021)」の一つに採択された「オープンアクセス推進事業」について、以下の取り組みを行った。

(1) 学術情報リポジトリ「KURENAI」による研究成果の公開

① 「オープンアクセス説明会」等の京都大学オープンアクセス方針とリポジトリ登録手順等を周知する説明会の開催した（計 7 回)。

② オープンアクセス方針の対象論文を KURENAI に登録申請するための「リポジトリ登録システム」を改修してメール送信機能等を追加した(2018 年 9 月)。

③ リポジトリ論文の国際流通性向上のため、KURENAI 英文登録情報を充実させた（英文抄録の追加: 3,061 件)。

④ 本庶佑京大特別教授のノーベル賞受賞に伴い、10 月中に関連論文リンク集をウェブサイトで公開し、6,795 件のアクセスがあった（2019 年 4 月 1 日現在)。

⑤ オープン・アクセス・ウィーク 2018 の期間中(10/22-10/26)、館内にオープンアクセス特設相談カウンターを設置するなどオープンアクセスの周知に努めた。

⑥ 1916 年(大正 5 年)創刊の史学・地理学・考古学の総合学術誌である「史林」の公開を開始した。バックナンバーも 50 年分（51 巻 1 号（1968 年 1 月）以降）を公開し、今後 1 巻から 50 巻も追加する予定である（2019 年 3 月 28 日)。

⑦ KURENAI 登録件数（2019 年 3 月末現在)
累積：182,086 件（うち学位論文要旨のみ：18,267 件)。

(2) 貴重資料等のデジタルアーカイブ

① 2018 年 4 月に、京都大学附属図書館が所蔵する医学分野の貴重資料コレクション「富士川文庫」全点の電子画像を、京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開した。さらに平成 30 年度中に新たに電子化・公開した資料は、蔵経書院文庫、韓国古文献資料他合計 778 点に及んだ。

② 2018 年 7 月に、京都大学が所蔵する貴重な古典籍資料のデジタル化・公開を進めるため、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ基金」を設置した。寄せられた寄付金をもとに、天皇即位の儀式が描かれた中井家絵図 4 点を電子化し、2019 年 3 月 29 日に公開した。

③ デジタルアーカイブコンテンツの利用促進のため、他機関との連携を推進した。

- 2018 年 9 月に、京都大学貴重資料デジタルアーカイブで公開する経典資料に SAT 大蔵経 DB（大正新脩大藏経テキスト部分 85 巻の全文検索サービス）へのリンクを記載した。

- 2018 年 9 月に、慶應義塾大学メディアセンターと「富士川文庫デジタル連携プロジェクト」を実施して「富士川文庫」の画像データを統合表示する試行ウェブサイトを公開した。また、2019 年 2 月には東京大学の「富士川文庫」もプロジェクトに加わった。
- 2019 年 1 月に、谷村文庫 265 タイトルから国文学研究資料館蔵書印データベースへのリンクを記載した。

④ 2018 年 4 月、京都大学貴重資料デジタルアーカイブの公開画像数が 1 万タイトルを突破し、また 12 月には 100 万画像を突破した。2019 年 3 月 31 日現在、13,522 タイトル、1,157,922 画像を公開しており、二次利用自由の画像を提供する図書館・室は、附属図書館、吉田南総合図書館、大学院理学研究科各図書室及び理学部中央図書室、基礎物理学研究所に拡大した。

1.2. 研究データ管理支援

(1) 研究データ管理支援の検討と取り組みの開始

① 桂図書館での研究データ管理支援業務の検討のため、工学研究科オープンデータ検討ワーキンググループを立ち上げた。

② 研究データの公開を支援するためのウェブページを公開した（2019 年 2 月 22 日）

(2) 取り組みの広報

① 京都大学附属図書館研究開発室セミナー 「研究データ管理と大学図書館－北米大学の事例を中心に－」を開催した（2018 年 6 月 11 日）。

② 図書館総合展「大学における図書館と研究支援・情報部門との戦略的な協働と連携－書籍ポータルサイト運用を通した実践的な協働事例－」にて、著者名典拠を活用した「新刊情報ポータル」について、事例発表した（2018 年 11 月 1 日）。

③ 京都大学図書館機構講演会講演会「オープンサイエンス時代の大学図書館－これから求められる人材とは－」（平成 30 年度国立大学図書館協会近畿地区助成事業）を開催し、図書館や図書館員がオープンサイエンスにいかに取り組むかについて議論した（2019 年 2 月 13 日）。

1.3. 電子書籍の利用促進

(1) 試読サービスの実施

平成 29 年度に策定した「学生用図書整備計画」に従い、全学的に必要度の高い電子書籍を整備するため、Maruzen eBook Library および EBSCO Academic Subscription Collection の試読サービス、ProQuest Ebook Central の Mediated DDA サービス、Kinokuniya Digital Library (Kinoden)からのリクエスト受付を実施した。

(2) デジタルブック展示の実施

電子書籍にまだなじみがない来館者への視覚的アピールと利用促進を目的とし、デジタルブック展示を開催した（2018 年 11 月 27 日～12 月 27 日）。大学院生や図書館職員推薦の電子書籍合計 260 タイトルをデジタルサイネージで紹介するとともに、紹介文と電子書籍にアクセスできる QR コードを記載したカードを配布した。

1.4. 全学導入データベースの見直し

(1) 利用実績による見直し

平成 29 年度までの利用実績に基づき、利用件数が多いデータベースは同時アクセス数を増やす、利用件数が減少したデータベースについては契約を中止する等の見直しを実施した。

(2) 学内アンケート調査の実施

今後のデータベース整備の基礎資料とするため、学内の各部局に対し全学導入データベースに関するアンケート調査を実施した（2018 年 12 月～2019 年 3 月）。

1.5. 寄贈雑誌のオープンアクセス調査

附属図書館で受入中の寄贈雑誌について、オープンアクセス状況を実施し、調査結果に基づき寄贈雑誌受入を見直し、347 タイトルを受入中止した。また、調査結果を NII の ERDB-JP に反映させ、データの充実を図った。

2. 知の創出：図書館サービス機能の改善

2.1. 桂図書館の着工

2020 年春の開館に向け、新営工事が進行中。「エリア連携図書館」として、研究データの保存・発信機能を持ち、研究支援を促進する研究支援型図書館の運営・サービスについて検討を行っている。

2.2. 文献取り寄せサービス（私費）の現金収納業務の委託開始

2018 年 4 月から、私費による文献（複写及び貸借）取寄せの現金収納に関する業務委託（京都大学生協）を開始した。これにより図書館の開館中なら夜間や休祝日でも受取りが可能となり、また釣銭も受け取れるようになるため、サービスの利便性が向上した。また、図書館側ではカウンターでの現金取扱に伴う領収書発行業務を減らすことができ、当該サービス全体の効率化を実現した。

2.3. 名誉教授証の IC カード化

平成 30 年度から授与される名誉教授証が IC カード化されたことにともない、人事担当課及び情報環境機構の協力のもと、特段の事前手続きなく当該カードをもって名誉教授が図書館利用証として使用できるようになった。これにより個別のカード発行等の事務作業が不要となり大幅な効率化が実現した。

2.4. 研究支援

(1) 大学院共通科目「学術研究のための情報リテラシー基礎」の開講

大学図書館が行う研究支援として、平成 30 年度新設の大学院共通・横断教育科目「学術研究のための情報リテラシー基礎」の一部、「学術研究のための大学図書館利用と情報探索、情報発信」の授業を附属図書館研究開発室が担当した。

(2) オープンアクセス誌への投稿等に対する注意喚起を実施

大学院生対象の共通科目や新採用教員研修会、図書館講習会等で、若手研究者や大学院生等に対しオープンアクセス誌の評価に関する説明やハゲタカジャーナルに対する注意喚起を計 15 回行うとともに、図書館機構のウェブサイトでも注意喚起を行った。また、関連部署（研究推進部、URA）と情報共有を行った。学内研究者へ周知するため、注意喚起のリーフレットを配布した。

（3）研究成果発信に係る講演会・講習会の開催

セミナー「eBook における研究成果発信と評価 : 電子時代の英文書籍出版について考える」（2018 年 6 月 22 日）の他、外部講師を招いて論文執筆や投稿といった研究成果発信のための講習会を 8 回開催した。

2.5. 学習サポートデスクスタッフによるピア・サポート

附属図書館ラーニング・コモンズ内に設置している学習サポートデスクスタッフの企画として、より学生のニーズに近いテーマを取り上げる講習会を 36 回開催した。

2.6. 視覚障害学生への学習支援および国民の読書バリアフリーへの貢献

学内読書バリアフリー環境の整備と国立国会図書館を通した国民への貢献を図るため、学内予算措置により、視覚障害学生に提供する資料のデジタル化を進めると共に、国立国会図書館視覚障害者等用データ送信サービスへのデータ提供準備を行った。

2.7. 「古典オーロラハンターIN 京都」の開催

国文学研究資料館等と共催して、古典籍を読み解く市民参加型ワークショップを開催した（2018 年 11 月 1 日）。

2.8. 貴重資料公開展示の開催、学術シンポジウムの共催

高麗大学校、京都大学人文科学研究所、附属図書館の協定事業の成果として平成 30 年度京都大学図書館機構貴重書公開展示「韓国古典籍の世界」を開催した（2019 年 2 月 19 日～3 月 3 日）。また、日韓の研究者によるシンポジウム「韓国古典籍の世界－京大河合文庫目録刊行記念シンポジウム－」を共催した（2019 年 2 月 21 日）。

3. 新しい人材

3.1. 職員の海外派遣

2019 年 1 月から 2 月にかけて、学内の海外派遣プログラムにより、図書系職員 2 名をドイツとオランダに派遣し、研究データ管理及びデジタルアーカイブに関する先進事例の調査を行った。

3.2. データ管理教材の試行利用に参加

NII 及び JPCOAR による「研究データ管理サービスの設計と実践」の試用プロジェクトにモニター機関として参加し、約 20 名の図書館職員がオンライン教材を受講した。

平成３０年度 京都教育大学附属図書館　特色ある取り組み

１．図書館利用・読書啓蒙の働きかけ

平成 27 年より「わくわく！ＫＹＯ^{2}ライブラリー図書館活性化プロジェクト」をスタート。

図書館に行こう！→図書館を知ろう！→図書館で過ごそう！→図書館を使おう！→図書館をひろげよう！

●「図書館に行こう！」（＝親しみやすい場所にする）

➢ライスボールセミナー「それはかなう夢講座」の後援

年 5 回開催、先着 30 名におにぎり 2 個とお茶を配布

➢中庭コンサート

「器楽基礎演習」の授業成果発表（6 月 14 日）

➢就職担当部署との連携

・就活ゼミ、就職セミナーを研修・セミナー室で実施

・教採セミナー等で学修支援員を案内

●「図書館を知ろう！」（＝学生との距離を縮める）

➢学修支援員の配置（平成 27 年 10 月～継続）

理科、数学教育の大学院生をラーニングコモンズに配置。学期中の月～金の放課後

➢読書キャンペーン（10 月～2 月）

コメント（400～600 字程度）またはポップを書いて提出。優秀作品には賞。

➢リクエストの強化

☆話題書の購入「リクエストと投票で話題の本を読もう」（8 月、2 月を除く毎月）

学術研究教養目的以外のリクエストおよび図書館員が選定した新刊、話題書等を対象に利用者投票。得票数の高いものを購入。15 万円／年を予算措置。

☆選書ツアー（ブックハンティング）の実施

2 回実施　上回生、院生中心に 7 名参加　74 冊　購入

☆通常リクエスト

前年比 1.4 倍となる 119 件のリクエスト

●「図書館で過ごそう！」（＝館内の環境整備、サービス向上）

➢日曜開館の試行

試験期の日曜日を開館　7 月 22 日、7 月 29 日（台風のため休館）、8 月 5 日、2 月 3 日（平均 117 人/日）

➢入館者数の増加（一日平均 300 人を目標）

平成 30 年度　89,445 人/年　　261 日開館　　342.7/人日　前年比　107%　平成 26 年度比 143%

●「図書館を使おう！」（＝資料・施設の利活用）

➢ILL 借用図書の館外持ち出し

研究上必要な借用図書について、館外持ち出し対応開始。

➢図書展示

・ミニ展示 カズオ・イシグロ展（4/2～5/14）

・加古里子（かこさとし）さん　著作コーナー（6/5～6/30）

・保育士試験対策コーナー（6/25～7/2）

➢企画展示室等の利用による展示等の開催

学生や教職員による教科・学習研究等に関連する企画展示：13 件

●「図書館をひろげよう！」（＝他館、他部局等との連携）

➢京阪奈三教育大学との連携

合同研修（11/29 於：京都教育大学）、現物貸借無料化、双方向遠隔授業パスファインダー

➢府立図書館との連携

平成 30 年度実績：貸出　99 件、借受　44 件）

２．利用者教育

●新入生図書館ガイダンスの実施

全新入生に対し、専攻別に図書館の利用方法、論文検索方法等を説明した。（4 ～ 7 月 全 13 専攻 327 名）

●各種講習会の開催

・図書館レベル別講習会
・オーダーメイド講習会
・国立国会図書館講習会（6 月 13 日（水））

３．地域貢献

●うたとおはなしの会の開催　幼児教育科と共催（定員 130 名）

・4 月28日（土）158名参加　同日開催のワークショップ「こいのぼりを作ろう」70名、追加公演　14名
・12月15日（土）156名参加

●第２回絵本と人形展～おはなしの世界へようこそ！～

4月16日（月）～4月28日（土）「うたとおはなしの会」第30回記念　主催：幼児教育科，協力：附属図書館

●読み聞かせ会「えほんのもり」の開催

幼児教育科の学生によるよみきかせ、絵本カードの作成、今月の絵本紹介など。
於：児童書コーナー、毎月第１，３月曜日（４，12月を除く）

●第２３回教科書展の開催

「平和教育と教科書～教科書で戦争と平和を考える～」11月15日（木）～12月27日（木）
後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会
◆ **教科書展開催記念講演会**「次世代につなぐ平和教育：平和で民主的な社会の形成」11 月 24 日（土）
共催：平和教育授業研究会

●中学生の「職場体験」事業への協力

附属図書館で図書の配架、装備、カウンターでの貸出・返却等の勤労体験活動
本学附属学校を含む４校へ協力（合計11日間、11名）

４．その他

●スマートフォン用図書館アプリの提供を開始（９月～）

●教育資料館「今月の逸品」 展示協力　附属図書館１階渡り廊下

京都工芸繊維大学附属図書館　平成 30 年度特色ある活動の報告

1. KIT ぷらっとお持ち帰りフェア ―古本 0 円祭・専門書からマンガまで―

標記イベントを平成 30 年 11 月 15 日（木）～16 日（金）の 2 日間開催した。当事業は平成 19 年度から継続的に実施しており、図書館で不用となった図書、及び教職員・学生から提供を受けた図書を会場に集め、来場者に無償で提供するものである。平成 30 年度は 2,000 冊以上の図書を提供し、来場者数は 2 日間でのべ 613 名となった。

2. 松ヶ崎祭　特別講演「研究の視点　探求の旅路　バウハウス 100 年」

標記講演会を本学の学園祭期間中の平成 30 年 11 月 23 日（金・祝）に開催した。本学元教授宮島久雄先生、大阪工業大学教授今井美樹先生を講師にお迎えし、2019 年に創立 100 年を迎えるバウハウスの歴史的変遷と今日の姿を、取材写真を交えてお話いただいた。

また、講演後のインタビューでは「宮島先生と本」をテーマに、宮島先生の著書・訳書をご紹介いただいた。

2019 年 4 月

平成 30 年度大阪大学附属図書館の特色ある活動

◆教育・学習支援

1. 附属図書館 4 館全てのアクティブ・ラーニングスペースにおいて、図書館職員の他、ラーニング・サポーター（LS、身分は TA）が学習支援活動を行った。また、LS の学習支援の質をより向上させるため、教員の協力を得て、LS に対する研修（ライティング支援研修、傾聴法など）を合計 10 回実施し、4 図書館の LS のべ 53 名が受講した。

◆研究支援

1. URA と共催でワークショップ等を開催

経営企画オフィス RA 部門との共同企画・運営で、セミナーや研修を開催し、いずれも盛況であった。

○「英語論文の作成や投稿をよりスムーズに
-Web of Science 等のツールを活用して」

日　時 ： 2018 年 10 月 19 日（金）10:30～12:00 （豊中キャンパス）
14:40～16:10 （吹田キャンパス）
講　師 ： 辻　幸子氏 （クラリベイト・アナリティクス・ジャパン株式会社）
参加人数： 合計 167 名 （豊中会場 41 名、吹田会場 126 名）

○「英語論文執筆スキル強化週間」セミナー・シリーズ

セミナー1「説得力のある英語研究論文を書くコツと図表の効果的な使い方」
2019 年 1 月 23 日（水）14:00～16:00 （豊中キャンパス）
セミナー2「エディターの心を動かすカバーレター執筆と査読対応」
2019 年 1 月 24 日（木）14:40～16:10 （箕面キャンパス）
セミナー3「英語を母語としない人が間違えやすい論文英語の表現」
2019 年 1 月 25 日（金）14:00～16:00 （吹田キャンパス）
講　師： David Kipler 氏（カクタス・コミュニケーションズ 学術出版トレーナー・コンサルタント）
参加人数：延べ 311 名
すべて英語で行われた実践的なセミナーであったが、質疑応答も活発で、アンケート結果によると、大変満足度が高いことがうかがえた。

○ 大阪大学職員研修「オープンサイエンスの基礎知識：大学と研究データ」
日　時 ： 2019 年 2 月 19 日（火）13:30～16:40
講　師 ： 林和弘氏　（文部科学省　技術・学術政策研究所科学技術予測センター上席研究官）
青木学聡氏（京都大学アカデミックデータ・イノベーションユニット）
参加人数： 47 名
オープンサイエンスの概要の把握や課題認識ができたと好評であった。

2. Elsevier 社電子ジャーナル等の前払い PPV（Pay Per View）サービスの試行開始
7 月 17 日より、大阪大学の教職員を対象に、Elsevier 社電子ジャーナル等の前払い PPV(Pay Per View)サービスの試行実施を開始した。

3. 新任教員研修プログラムを実施

大阪大学における研究・教育の質向上に資することを目的に、新任教員研修プログラム「研究・教育の推進に資する図書館の利活用」を前期・後期ともに実施し、合計 45 名の受講があった。

4. 図書館 Web サイトに 「投稿先学術雑誌の評価方法」 のページを開設

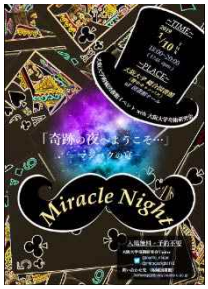
論文投稿先選定の参考になるツール類の紹介など、学術雑誌評価の情報提供と論文を投稿する際の注意喚起などを行うページを開設した。https://www.library.osaka-u.ac.jp/evaluation/
また、上記新任教員研修プログラムにおいても、学術雑誌選定について説明を行った。

◆社会貢献

1. 貴重図書画像データのクリエイティブ・コモンズ・ライセンスでの提供

デジタル化して公開している貴重図書画像データの一部について、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスでの提供を開始した。 https://www.library.osaka-u.ac.jp/collection/

2. マジックショーを開催



図書館を学生の課外活動の発表の場として提供し学生の主体的活動を支援すること、図書館を身近に感じてもらうことを目的として、図書館イベントの出演団体を学内で公募した。平成 30 年度は、初出演の「大阪大学奇術研究会」に決定した。学外からの参加もあり、楽しく不思議なひとときとなった。

日　時 ： 2019 年 1 月 10 日（木）18:00～20:00
参加人数： 23 名

◆その他

1. （仮称）箕面市立船場図書館の指定管理者に決定

2018 年 12 月 20 日開催の箕面市議会にて、新設される箕面市立図書館の指定管理者として、大阪大学が議決された。

2. 図書館職員研修「公立図書館と大学図書館の共通点と相違点」

日　時 ： 2018 年 11 月 7 日（水） 13:30～17:00
講　師 ： 渡部 幹雄 氏（和歌山大学図書館長）、藤井 亜希子 氏（和歌山大学図書館副課長）
西原 千尋 氏（豊中市立千里図書館）
参加人数 ： 55 名

2021 年 4 月から（仮称）箕面市立船場図書館の指定管理を担うにあたって、よりよい図書館運営の検討を進めるための課題認識ができた。

3. 学生のための図書と設備の充実を支援する基金(大阪大学未来基金)設置

「大阪大学未来基金」のプロジェクトの一つとして、
附属図書館「学生のための図書と設備の充実を支援する基金」を設置した。
https://www.miraikikin.osaka-u.ac.jp/project/library/

4. 地震、台風への対応

6/18 の大阪北部地震、9/4 の台風 21 号による被害があったが、利用者の安全確保と学習・教育環境の継続を目指し、職員一同が尽力した。10 月末には全館で書架の修理が終了し、全サービスが利用できるようになった。引き続き、来年度は外壁等の復旧工事を予定している。

平成 30 年度　大阪教育大学附属図書館の特色ある取り組み

大阪教育大学附属図書館
2019.4.1

１．授業支援

平成 30 年度における最重点課題とした。情報リテラシーガイダンス（本館分館館で計 65 回、756 人参加）のうち、41 回は授業時間内に行った。特に次の 3 つの授業において、授業内容検討および教材作成を担当教員との協力の下に行った。

「教職入門」（前期、1 回生 35 名対象）
「英語科評価論 II」（後期、3 回生 10 名対象）
「教育研究方法演習」（後期、大学院 1 回生 40 名対象）

授業の内容に応じて、レポート等作成支援のため図書館員の「オフィスアワー」を設けたこと、また図書館員に Moodle のアクセス権をつけ、学生の提出物を見られるようにしたことが特徴である。

２．紀要の全面査読制導入

平成 24 年度より、執筆者が査読を希望する場合のみ査読を行う体制としていた。これにつき、第 2 期中期目標期間の業務実績評価で「紀要のレフェリー制の導入が不十分」とされた結果を受け、平成 29 年度より査読体制の見直しを行ってきた。
平成 30 年度において、査読体制の見直しと関連規程類の整備を完了し、学内周知を行った。
平成 31 年度（2020.2 発行）の紀要から新制度での刊行となる。
新制度では、投稿原稿の種類を「学術論文」「実践報告」「その他」とし、「学術論文」はすべて査読を行うこととした。

３．旧教科書デジタル化事業

図書館振興財団助成金約 360 万円を獲得し、平成 28～30 年度にかけて、本学所蔵の「旧教科書」（往来物・明治初年教科書）のデジタル化を実施した。デジタル化した 316 冊を本学リポジトリで公開中。
事業の締めくくりとして、記念展示「教科書オーライ展」を行った（10/26-11/3）。現物とレプリカ（デジタル画像のプリントアウトによる）の展示、デジタル画像のプロジェクター投影、教科書画像を利用したブックカバー等の配布を行った。

４．図書館調査

教学 IR の学生アンケートに、図書館に関する設問を追加した。単発で図書館利用者アンケートを実施するより、経年変化や、修学・就職等の調査項目との関連が分析できるようになることを期待している。
教務課との調整の結果、2～4 回生および卒業時調査についてカバーできたが、新入生調査が未対応のため、継続的に検討する。

５．サポートスタッフによる学習支援

平成 30 年度も院生スタッフによるサポートデスクを設置した（開講期・週 3 人・年間計 101 回）。スタッフ在席時間時間のツイートやデスク設置場所の工夫により利用者増を図ったが、利用は低調であった。サポート人員の確保も困難である。次年度は留学生向けのサービスを検討する。

イベントとして、講習会「レポートの書き方講座」を 7 月に 2 回開催した他、ICT 支援ルーム学生スタッフの協働で、ライティングとプログラミングに関する講習会「ゼロからはじめるスキルアップセミナー」を開催。（12 月計 9 回、学生等 25 人参加）

６．イベント

- 学生団体と共催で人権週間行事「リビング・ライブラリー」を開催。（12 月開催、のべ 110 人参加）
- 情報処理センター教員を講師とし、学生支援に資する学内 FD 事業「電子黒板を使いこなす」を開催。（12 月開催、教職員等 24 人参加）

７．学外機関との連携

- 国立国会図書館「視覚障害者等用データの収集および送信サービス」に参加するため、同館と覚書を締結。（10 月）
- 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」に参加。（申請承認済み、H31 サービスイン）
- リポジトリ掲載論文に JaLC DOI の付与。（申請中、H31 付与開始予定）

８．高大連携

- 高大接続や附属学校図書室との連携の可能性を探るため、本学附属 3 中高の司書教諭・図書室職員との懇談を行った（1～3 月）。教育実習生への図書配送や、生徒向けの複写・貸借等サービス実施について検討中。
- 授業「課外活動指導法」において、府内公立高校生の探求授業を本学学生が指導するためのサポートを行った。（10 月）
- 府内公立高校生を対象に、天王寺キャンパスの授業を受講できる連携事業があり、受講生に図書館利用の案内をしている。（3 月実施の連携事業ガイダンスに参加）

９．その他

2019 年 4 月から、一部昼間コースが天王寺キャンパスに移動する。このため、従来 13 時からの開館であった天王寺分館を 10 時開館とした（授業は 2 限 10:35 開始）。派遣職員 1 名を非常勤職員に変更し、定員（係長）１・非常勤 2・派遣シフト数名の体制とした。

兵庫教育大学附属図書館 平成 30 年度活動報告（H31.4）

1　附属図書館

（1）イベント

① Blue Class　NEW！

ラーニングコモンズを屋外に展開する野外図書館企画 BLUE CLASS を開催。第 1 回は無料古本市とカフェイベント（約 200 名参加）。その活動報告を第 20 回図書館総合展ポスターセッションで行った。

② ランチタイム・コンサート

オープンテラスにて、コンサート「初夏に歌う」（声楽専門の教員と学生が出演）開催（60 名参加）。

③兵教シネマ

ライブラリーホールにて、芸術系教員監修による映画上映会（全三夜）を開催（34 名参加）。その他、授業の一環による映画会も開催。

④ ライブラリーフェスタ

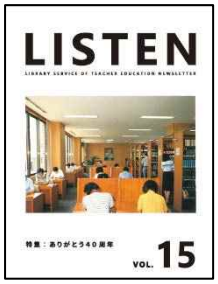
大学祭に併せた図書館恒例イベント。絵本読み聞かせ、学生ミニコンサート、映画上映会、無料古本市を開催（475 名参加）。

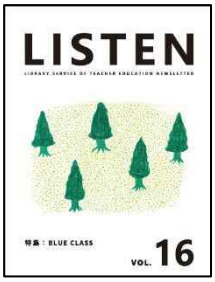
⑤ 展示活動

エントランスやラーニングコモンズの壁面を使い、期間限定の図書企画展示を開催。
テーマは、新生活・料理・追悼かこさとし・映画原作本・そうだ旅に出よう・納涼本・祭り・宇宙へようこそ・おいしい絵本・防災を発見・美しき表現の国東欧チェコに出会う

（2）広報

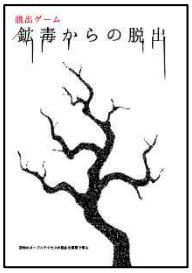
① 附属図書館広報誌 Listen（年 2 回刊行）





特集：ありがとう 40 周年　特集：BLUE CLASS

② オープンアクセス啓発資料　NEW!



オープンアクセスの近年の動向を寓意化した漫画形式の脱出ゲームを作成し教員に配付（原作は上越教育大学附属図書館）。

（3）情報リテラシー教育

① 図書館ツアー（4/9・10）

② 初年次セミナー(4/22・5/7・5/21)

③ 文献探索講習会（5/22～25）

主に新入学生を対象とした OPAC・CiNii・Mendeley 講座

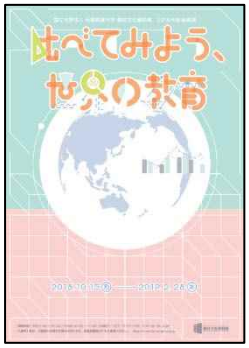
④ 留学生対象オリエンテーション（10/17）

⑤ 神戸ハーバーランドキャンパス学生向け講習会及び相談会(5/26・28～29)

2　教材文化資料館

(1) 前期展（H30.4～8）　「実験！観察！体験！」展

(2)　後期展(H30.10～H31.2)「比べてみよう！世界の教育」展



関連イベントとして、インドから講師を招聘し、講演会「インドの算数教育」を開催（47 名参加）。

平成30年度　神戸大学附属図書館活動報告

学修サポート

■初年次セミナーで図書館ツアー・ガイダンスを実施

大学のクォーター制導入に伴い、平成28年度より実施。
平成30年度は8学部に対し計48回実施した。
（参加者数：1，393名　前年度は7学部計38回で1，027名）

■「読書マラソン企画」の実施

平成30年度初めて企画、実施した。参加者は対象資料を
1冊読むごとに読書カードを提出し、スタンプを集める。
スタンプ15個で完走とした。完走者は6名。熱心な感想も
多く見られた。
実施期間：10月1日～12月21日
読書カード：170枚提出

■「神大図書館お昼休みトークイベント2019 『多言語・多文化への冒険』（3回シリーズ）

平成29年度に続き企画。総合・国際文化学研究科の教員と
協力し、3回シリーズで開催。あわせて講師推薦図書
および職員選定の関連図書を展示した。
お昼休みの短い時間ながら立ち見も出る盛況となり、
アンケートでも好評を得た。（参加人数総計：のべ71名）

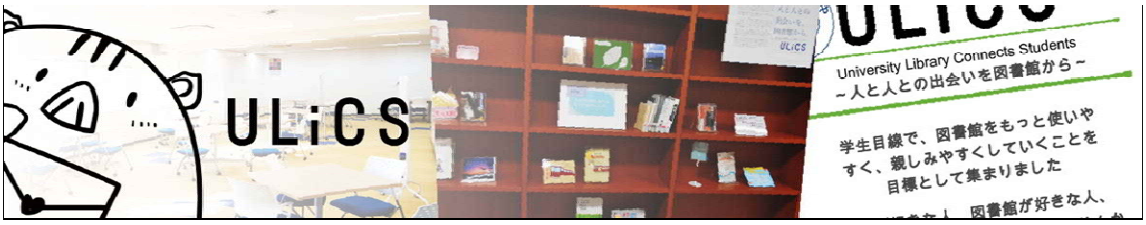
【各シリーズ内容】
①「政治的正しさに抗う：タモリの4ヶ国語麻雀から
　調査現場での擬態言語コミュニケーションまで」
②「ホームから宇宙へ：グローバル化と文化人類
　学者の漂流の軌跡」
③「モンゴル留学の勧め」
　（1月17日、21～22日開催、各回とも講師は教員）

■蔵書のテーマ展示

平成29年度に続き、各館室でのテーマ展示に加えて
学生選書ツアー選定図書の「巡回展示」を実施し好評を
得た。
（巡回期間：2018年9月～2019年3月、7館室を巡回）

学修サポート

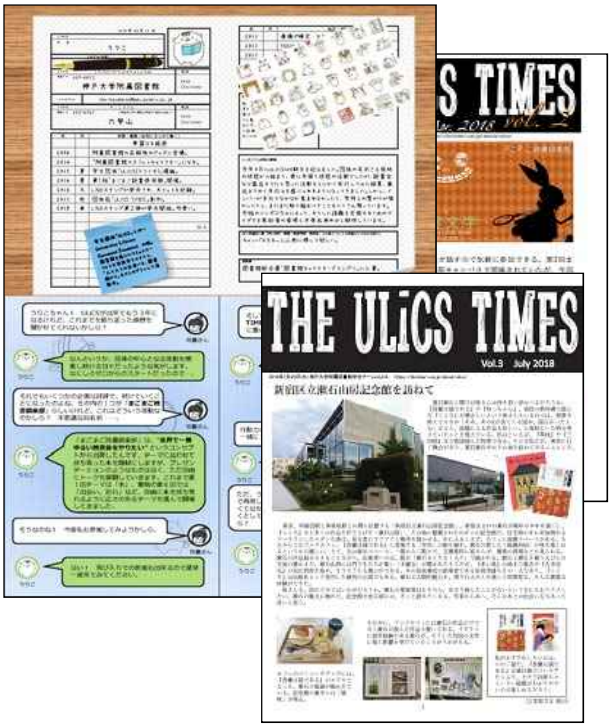
■附属図書館学生チーム「ULiCS（うりくす）」の活動



学生と教職員の「学生協働」のチームとして、平成27年度留学生・院生を含む9名で発足。「University Library Connects Students」のコンセプトから「ULiCS」と命名。結成4年目となる平成30年度は、19名で下記のような活動を行った。

― 第8回大学図書館学生協働交流シンポジウム（広島大学）への参加

9月6～7日、広島大学で開催された第8回大学図書館学生協働シンポジウム「学生と共に成長する図書館－協働が生み出す新しい魅力－」にULiCSメンバー2名と図書館職員1名が参加、活動紹介や意見交換を行った。



― 「THE ULiCS TIMES」の発行

ULiCSの団体誌として「THE ULiCS TIMES」Vol2，3，4 を発行した。学内の各図書館での配布のほか、附属図書館HPからPDF公開している。

― 「まごまご読書倶楽部」の開催

あらかじめ決められたテーマに即した本を持ち寄り、それらについてまごまご話すという「まごまご読書倶楽部」を開催している。平成30年度は第5～8回の4回開催。

第5回：テーマ「自己紹介代わりの本」（4月19日）
　　於：鶴一LC
第6回：テーマ「出会い、別れ」（6月28日）於：人文図LC
第7回：テーマ「おススメしたくない本」（10月22日）
　　於：総合・国際図
第8回：テーマ「-fulness：世界は〇〇で満ちている」
　　（1月11日）於：人文図LC

社会連携・情報発信

■ ハーバード大学ライシャワー日本研究所とデジタルアーカイブの連携に関する覚書を締結

10月1日、神戸大学附属図書館とハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所とで締結した。
この連携により、当館デジタルアーカイブ「震災文庫」で提供する資料情報が、東北大学震災アーカイブ「みちのく震録伝」を介してハーバード大学「日本災害DIGITALアーカイブ（JDA）」上で横断検索可能になる予定である。

■JPCOARスキーマ説明会（関西会場）

神戸大学が関西地区会場館となり開催。
図書館職員やシステムベンダーなど約90名が参加した。

開催日：9月6日
会　場：神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室

■ 平成30年度国立大学図書館協会シンポジウム「大学図書館デジタルアーカイブの活用に向けて」

神戸大学が会場館となり開催。
図書館職員を中心に、研究者やデジタルアーカイブ学会員など145名が参加した。

開催日：10月19日
会　場：神戸大学百年記念館（神大会館）六甲ホール

■平成30年度資料展「古典籍さまざま～近世の出版物より～」

毎年、図書館所蔵資料を利用した展示会を実施している。
平成30年度は、江戸期の出版物に焦点をあて、特に科学・技術と文学・戯作の分野におけるその様子を、本館所蔵の古典籍を中心に紹介。あわせて同時代の西洋の図書も展示した。
（10月12日～12月18日、於：社会科学系図書館）

■企画展、サテライト巡回展の実施

人文学研究科地理学教室、神戸大学海事博物館、大学文書史料室と連携し、企画展やサテライト巡回展を開催している。
平成30年度は下記を開催した。
- ・海事コレクション展「古写真からたどる深江」（7月30日～9月28日）
- ・企画展「災害の記憶を伝える：神戸の地震、風水害」（1月10日～2月4日まで延長）
- ・神戸大学史・巡回展「明治期の神戸と神戸大学－『明治150年』記念－」（2月6日～3月2日）
- ・「和船の活躍した時代」（3月8日～5月まで延長予定）

職員の海外派遣、職員研修会

■COAR Annual Meeting 2018　への参加

JPCOAR作業部会からの派遣依頼を受け、職員1名を「COAR Annual Meeting 2018」へ派遣した。

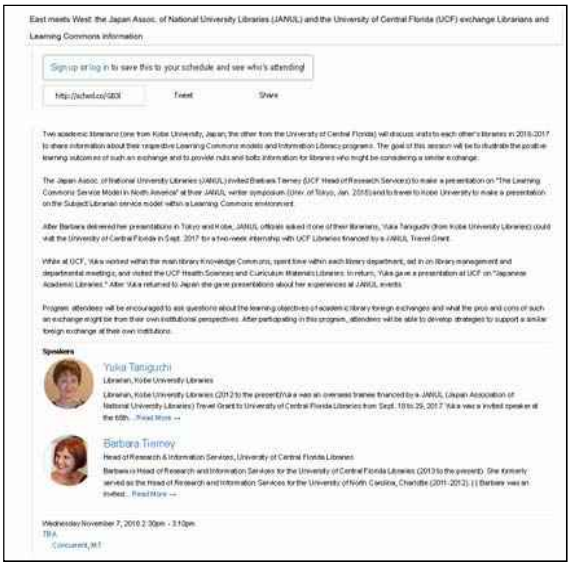
期　間：5月13日～19日
派遣先：ハンブルク（独）

■JISC（英）・Abes（仏）の視察

国立情報学研究所電子リソースデータ共有作業部会からの依頼を受け、職員1名がJISC（英国の大学図書館コンソーシアム）・Abes（仏国の大学図書館コンソーシアム）を視察した。

期　間：9月16日～20日
派遣先：ロンドン（英）、モンペリエ（仏）
テーマ：「統合的運用・発見基盤に関するOCLC製
Central Bibliographic System（CBS）を用いた
総合目録データベースの構築・運用に関する調査」

■2018 Charleston Library Conferenceでの共同発表


East meets West: the Japan Assoc. of National University Libraries (JANUL) and the University of Central Florida (UCF) exchange Librarians and Learning Commons information

Sign up or log in to save this to your schedule and see who's attending

Yuka Taniguchi
Librarian, Kobe University Libraries

Barbara Tierney
Head of Research & Information Services, University of Central Florida Libraries

平成29年度国立大学図書館協会海外派遣事業での受入先University of Central Floridaからの依頼を受け、職員1名を派遣、2018 Charleston Library Conference に参加し、University of Central Florida と共同発表を行った。

期　間：11月4日～11日※発表は11月7日
派遣先：チャールストン（米）
テーマ：「East meets West：the Japan Assoc. of National University Libraries（JANUL）and The University of Central Florida（UCF） exchange Librarians and Learning Commons inforamation」

■附属図書館職員研修（海外派遣報告会）

12月11日に附属図書館職員研修を開催し、11月までに海外派遣された職員3名がそれぞれの成果を報告した。

■国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）

平成30年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）の助成を受け、職員1名を米国に派遣した。

派遣期間：1月21日～27日
派遣機関：University of Oregon、 University of Portland
Pacific Northwest College of Art
Seattle Public Library、University of Washington

調査テーマ：「大学図書館空間とその建築プロセスにおける図書館員の役割：
米国の図書館建築プロジェクト事例から」

奈良教育大学図書館　平成30年度の特色ある取り組み

平成31年4月

１．ラーニング・コモンズの授業活用

ラーニング・コモンズやえほんのひろばの有効活用として、授業利用の推進を各教員に呼びかけ、多くの授業や授業イベントに活用された。美術教育イベント「コンセプチュアル奈良」(7/11)、音楽教育イベント「打楽器ワークショップ」(10/11)、留学生による世界の絵本の読み聞かせ会(7/11)など、様々な授業関連イベントが図書館内で開催されるようになってきた。

また、Windowsクラスルーム協議会と協同した現職教員向けの研修会(7/27,8/9,9/29)や、カンボジア国教員養成大学設立のための現職教員研修(9/11-27)、奈良県教育委員会と協同した高校生向けの次世代教員養成塾(10/6,2/9)など、学内外の交流の場としても活用の幅が広がっている。

２．授業関連図書コーナーのレベル付け

シラバス掲載図書と各学問分野の初学者が最初に読んでもらいたい図書を揃えた授業関連図書コーナーについて、図書館運営委員会委員の協力のもと、それぞれの専門分野の図書について「初級」「中級」のようにレベル付けを実施した。レベル付けされた図書には「初級」等のシールが貼られ、一部の本の帯には教員からの推薦コメントを掲載している。また、レベル付けされた学問分野についてはブックガイド「〇〇の本棚(ex.心理学の本棚、英語教育の本棚)」を作成し学生に配布した。

３．英語コーナーの充実化

小学校英語の教科化・必修化に備え、英語学習環境を整えるため、昨年度設置した英語コーナーに、TOEIC等の英語能力テストの教材やリージョンフリーDVDプレーヤーを整備した。

４．図書館ガイダンスの充実化

１年生対象の必修授業「大学での学び入門」に今年度から研究倫理教育も盛り込み、図書館ガイダンスとともに実施することとなった。

５．授業と連動した展示の開催

学部・大学院授業と連動して、学生が企画・準備した「奈良教育大学所蔵 東西の装飾本」展(7/20-24)や博物館実習成果報告展「やるしかない展―筆と着物と紙袋と鹿―」(12/7-19)、美術教育専修・文化遺産教育専修卒業・修了展覧会(2/28-3/4)を図書館ラーニング・コモンズ及び展示スペースで開催した。

６．学生との協働

学生サポーター企画として 11 月 2 日に「経験者が語る 卒論の書き方講習会」を開催した。卒論執筆経験者である大学院生が学部生に向けて、卒論作成の計画の立て方や気をつけるべきポイントなどを話した。

また、学生参加型の蔵書構築を目指して本年度は 2 回のブックハンティングを実施した。

７．古本募金の開始

本を通じた地域社会との連携、自己収入策の一環として 2018 年 10 月より古本募金を開始した。

８．ブック展示企画

学生の自主学習の幅を広げ、図書館の様々な蔵書に興味を持ってもらえるよう、下記のテーマでブック展示を行った。

・「新入生におすすめの図書」（4/4～5/15）
・「教育実習」（5/18～6/29、学生サポーター企画）
・「You are what you eat」（6/4～7/9）
・「学校と防災～命を守るために」（10/10～10/30）
・「卒論・レポートを書こう！」（11/1～11/30、学生サポーター企画）
・「ブックハンティングで選んだ本」(12/5～1/9)
・「2018 Anniversary year writers ― 2018 年が節目の作家特集 ―」（12/7～12/21）
・「先生になるまえに」（2/13～3/15）

平成 30 年度　奈良女子大学学術情報センター　特色ある活動の報告

1．図書館振興財団助成事業

「奈良女子高等師範学校教材資料群デジタルアーカイブ事業」
「正倉院模造宝物」49 点、「おもちゃ」298 点

ADEAC（アデアック）で公開（2019 年 2 月 28 日）
https://trc-adeac.trc.co.jp/

正倉院模造宝物

おもちゃ

2．国立国会図書館の利用講習会

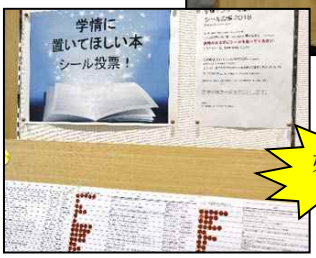
講師：国立国会図書館関西館　大塚和美氏
開催：平成 30 年 11 月 20 日
場所：学術情報センターラーニングコモンズ
参加：17 名

講習会

3．図書展示

4 月　「大学生事始」
6 月　「卒論･修論応援フェア」
7 月　「夏コレ　～Summer Collection～」
10 月　「〇〇の秋」
12 月　「学術情報センターに置いてほしい本　シール投票」
　得票の多かった本 123 冊を購入して展示

展示



好評

4．学術情報センター設備整備

●展示書架の新設、新着図書コーナーの移設

●案内板の更新・新設

●自動貸出返却装置の更新
●グループ学習室　什器更新

5．機種更新　(2019 年 2 月 1 日)

新 OPAC（蔵書検索）
更新機器：パソコン（55 台）
　　プリンタ（4 台）
　　大型プリンタ（1 台）　等

新 OPAC

和歌山大学図書館 平成 30 年度特色ある活動の報告

2019 年 4 月 22 日

１．知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有

１）教育研究成果の発信、オープン化と保存

① リポジトリシステムを更新（Earmas Ver. 3）し、機能の充実とデザインをリニューアル

② オープンアクセスウィークの全学に向けた広報（2018.10）

２）出版された資料の整備と利用

① 「学生用図書整備 5 ヵ年計画（2017-2021）」に基づく学生用図書の整備

② 図書館の下に大学史資料室を設置し、収集、整理済の本学の歴史に関する資料の目録や関係規則を公開（2018.10）

３）知識や情報の発見可能性の向上

① 貴重資料のデジタル画像の利用を促進するため、CC ライセンス（CC BY-SA）での提供を基本とする「デジタルアーカイブの利用条件表示に関する取扱い要項」を制定（2018.12）

② 貴重資料のデジタル画像の公開を進めるため、国文学研究資料館と「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画におけるデータベース構築に関する覚書」を締結（2019.2）

③ 図書館ウェブサイト更新ガイドラインの策定し、サイトをリニューアル（2019.1）

④ 図書館システムを更新（NEC E-CatsLibrary Ver.6）し、OPAC の機能強化等を実現（2018.9）

⑤ ラーニング・アドバイザー（大学院生スタッフ）が図書館ツアー動画を制作し、図書館ウェブサイト及び学内デジタルサイネージで公開（2018.5）

２．知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供

１）知を創出する場の拡大・整備・提供

① 学修支援環境の改善を目的として、図書館設備の整備計画を策定（2018.12）

② サイレントゾーンの新設（2018.10）

③ ラーニング・コモンズエリアの拡張、常設のプレゼンスペースや窓際カウンター席の設置（2019.3）

２）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供

① 和歌山大学図書館フォーラム「自分たちの図書館をつくる」を開催し、和歌山県内の図書館関係者 43 名が参加（2018.6.20）

② 和歌山地域図書館協議会の活動の一環として、加盟各館において和歌山城天守閣再建 60 周年を記念した資料展示（2018.7.14～8.26）を行うとともに、フォーラム「ゴジラと原子力～映画に描かれた原水爆と原発～」を開催（2018.11.17 和歌山信愛女子短期大学）

③ 県内自治体との連携協力・地域支援活動（和歌山県、橋本市、紀の川市、串本町、那智勝浦町）

④ 地域住民等との交流や研究成果を発信できるスペースを含む図書館カフェをオープン（2019.3）

３．新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築

１）新たな人材の参画

① 学生サポーター（学部学生、大学院生 19 名）

・新入生歓迎企画展示「忖度はじめました」（2018.4）

・オープンキャンパスでの図書館ツアー（2018.7）

・選書ツアー（2018.11）への参加と選書した図書の企画展示「ワダイの奇妙な選書ツアー【読書の旋風】」（2019.1）

② ラーニング・アドバイザー（LA 大学院生 10 名）

・ラーニング・コモンズでの学習相談（2015.10～）

・LA による選書及び展示

・LA ミニ講習会の開催

「紀美野においなーよ！」（2018.11.20）

「正しいメール 書けてますか？」（2018.12.5）

「和大生が入学してから卒業するまでの税金の話」（2018.12.12）

「初心者向け EXCEL 講座」（2018.12.19）

２）国立大学図書館職員の資質向上

① 職員が企画、講師を担当し、図書館職員研修会を開催

「図書館システムを知る」（2018.6.19）

「電子資料を知る～利用者サービス提供の観点から～」（2018.8.27）

「オープンアクセスとリポジトリを知る」（2018.9.28）

「NACSIS-CAT の今後」（2019.3.5）

② 図書館提案による平成 30 年度国立大学協会近畿地区支部研修及び和歌山大学 SD 研修「アサーティブコミュニケーション研修」が開催され、図書館から職員 9 名が参加（2018.7.29～31）

平成 30 年度　奈良先端科学技術大学院大学の特色のある活動報告

1. 修士論文・博士論文の取り扱い

平成 30 年度より本学は「情報科学研究科」「バイオサイエンス研究科」「物質創成科学研究科」の三研究科を一研究科に統合し、「先端科学技術研究科」が設置された。

これまで、学位論文の取り扱いは三研究科毎に異なる対応を行っていたが、統合に伴い、全学共通の新たな方針を策定することとなり、ワーキンググループにて検討のうえ、新研究科学生を対象とした「奈良先端科学技術大学院大学における学位論文の保管・公表について」を平成 31 年 1 月 15 日に教育研究評議会の承認を得た。

本学では、開学当初より博士論文・修士論文の電子化を進めており、公表が義務付けられている博士論文だけではなく、修士論文についても本取扱に含まれている。

また、修士論文について、これまでは紙媒体での保管を行ってきたが、今後は電子データで保管することとなった。博士論文については、インターネットによる公表が義務化された際に先行して電子データでの保管を行っている。

本学では学位論文提出システムを稼働しており、学生自身が完成した論文を投稿、メタデータの付与を行うことで効率化を果たしている。これまでは公表する論文を対象としてきたが、同システムを論文の網羅的収集に活用する予定である。

2. 図書館ホームページの見直し

図書館ホームページ全体の見直しを行い、更新の滞っていた箇所や過去のイベント情報の整理を行った。また、記載内容によって使い分けをしていたページ毎のテーマカラーを見直し、カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットなどを参考にすることによって調整を行い、視認性の向上を図った。

3. 知の森コーナー

学内から募集したテーマや図書館職員が設定したテーマに沿った資料を選び、「知の森コーナー」として展示をしている。

平成 30 年度は下表の通りのテーマで計 3 回の展示を行った。

平成 30 年度知の森コーナー展示企画一覧

実施回	実施時期	テーマ	展示タイトル数
第 22 回	2018 年 3-6 月	ひとつに	30
第 23 回	2018 年 7-10 月	夏だ！海だ！知の森だ！！	27
第 24 回	2018 年 11 月-2019 年 3 月	空気・雰囲気	28

2019.04.22

平成 30 年度 国際日本文化研究センター図書館活動報告

1. OCLC WorldCat への追加登録と OCLC WorldShareILL への参加

H29 年度に登録を始めた OCLC WorldCat へ、H29 年度後半から H30 年度にかけて増加した書誌・所蔵レコード約 1 万件を追加登録した。

また、H30 年度より OCLC WorldShareILL にも参加し、海外の日本研究機関等との ILL を開始した。

2. 海外邦字新聞データベースの公開

所内限定コンテンツであった、『日米』紙（1919-32 年、サンフランシスコ）のデータベースについて、原本所蔵機関の許諾を得、H30 年 4 月に一般に公開した。今後も、『聖州新報（SeishuShimpo）』、『日伯新聞（NippakShimbun）』、『ブラジル朝日新聞　（BrasilAsahi）』、『南米新報（NambeiShimpo）』、『バストス週報（BastosShuho）』、『亜爾然丁時報（ArgentinDjijo）』などの 20 世紀初頭の海外日本人移民史料として貴重な海外邦字新聞の電子化データを順次公開していく予定である。

3. 美術館・博物館等における図書館所蔵資料出展

■「日文研コレクション　描かれた「わらい」と「こわい」展 － 春画・妖怪画の世界 － 」

（細見美術館、10 月 16 日～12 月 9 日）

日文研所蔵の妖怪画・春画のコレクションのうち、「わらい」と「こわい」のテーマのもと、約 150 点を選んで展示。

■「吉田初三郎鳥瞰図へのいざない」

（大阪市立中央図書館、11 月 2 日～14 日）

日文研所蔵の「吉田初三郎コレクション」のうち、大阪から東アジアまでの鳥瞰図を展示。

■「おいしい広告２」

（京都工芸繊維大学美術工芸資料館、12 月 27 日～2 月 23 日）

日文研所蔵の『森永月報』（1923-1926）を展示。

4. IIIF ワークショップの開催

11 月 6 日（火）、永崎研宣氏（日文研客員准教授・人文情報学研究所主席研究員）を招き、IIIF に関する講演・コンテンツ担当者懇談会・システム担当者懇談会の三部構成のワークショップを開催した。日文研教職員だけでなく、他大学の図書館職員の参加もあり、他機関の取組状況を知る機会ともなった。

5.　図書館司書課程に関わる「図書館実習」への協力

8 月 28 日（火）～8 月 31 日（金）の 4 日間、同志社大学の図書館司書課程の「図書館実習」に協力し、実習生 2 名を受入れて、各種図書館業務についての実習を実施した。なお、当該協力は H30 年度で 7 年目となる。

6. EAJRS（日本資料専門家欧州協会総会）2018 への参加

リトアニアのヴィータウタス・マグヌス大学で 9 月 12 日から 15 日にかけて開催された「第 29 回日本資料専門家欧州協会（EAJRS）年次集会」に、日文研図書館から資料利用係長が参加した。『日文研における国際 IIL/DDS の新サービス：展望と課題』の論題で、日文研図書館が参加している OCLC WorldCat および WorldShareILL の概要・経緯・課題等について発表した。また、会場内でのブース出展、ワークショップでのプレゼンテーション等も実施し、欧州の図書館司書・日本研究者らとの交流を深めた。

7. CEAL（東アジア図書館協会）・NCC（北米日本研究資料調整協議会）の年次集会への参加

日文研図書館から電子情報係長および資料利用係長の 2 名が、3 月 19 日から 21 日にアメリカ・コロラド州デンバーで開催された CEAL （東アジア図書館協会）・NCC（北米日本研究資料調整協議会）の年次集会に参加した。期間中、CEAL の ILL・DD（文献の貸出・複写に関する図書館間協力業務）に関する委員会代表者と日文研における海外 ILL サービスの現状等についての情報交換、アウトリーチプログラム（日本研究司書のいない大学の日本研究者をサポートする活動）のためのグループミーティング等の情報交換活動をおこなった。海外の司書・日本研究者と直に情報交換を行う貴重な機会で、海外の日本研究者のサポートや日文研の研究成果・リソースのアピールについての知見を得ることができた。

平成 30 年度　国立民族学博物館図書室活動報告

１．サービス

一般利用者の図書室休室日の返却開始（平成 30 年 11 月～）

図書室が休室で博物館が開館している日に、博物館 1 階受付で図書を返却できるサービスを開始した。

２．図書室見学・案内

外来研究員オリエンテーション / 総研大生オリエンテーション / 事務系新任職員等研修 / 総研大オープンキャンパス / JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発」 / みんぱく若手研究者奨励セミナー　など。

３．資料の整備

・購読雑誌について、教員への調査に基づき 1 タイトルを中止とし、2 件のデータベースと 7 タイトルを新規購読した上で経費は 25 万円節減した。

・以下の電子資料を購入した。
・The international encyclopedia of anthropology(人類学国際大百科事典)

・冊子体については、モンゴル語・アラビア語等特殊言語の遡及入力を行った。マイクロ資料については、原資料が北米の大学の博士論文であるもの 1,005 件、図書 2,127 件、新聞雑誌 8 タイトル(376 件)の遡及入力を行った。

・出版者から提供される機械可読目録(MARC)を取り込める環境を整え、約 68,000 件の電子ブックを OPAC で検索できるようにした。

・書庫 2 層・3 層を中心に約 22 万冊の蔵書点検を行った。

４．資料の貸付

平成 30 年 8 月　国立台湾歴史博物館（台南市）で開催の特別展「南方共筆：継承される台南風土描写」へ、研究アーカイブズ資料（内田勣アーカイブ）を貸付。

５．研究アーカイブズ資料の受入・目録公開

平成 30 年 4 月　「江口一久アーカイブ」寄贈受入（フィールドノート、映像・音声資料）
平成 30 年 5 月　「内田勣（いさお）アーカイブ」寄贈受入
（民族資料、フィールドノート、写真アルバム等）
平成 30 年 9 月　「丸谷彰・朽木村針畑生活資料アーカイブ」目録公開
（民俗資料、記録映像資料等）
平成 30 年 12 月　「江口一久・アフリカ-アジアの言語アーカイブ」目録公開
平成 31 年 1 月　「栗田靖之-別府春海・日本人の贈答アーカイブ」目録公開
「沖守弘・インド民族文化資料アーカイブ」目録公開

平成 31 年 2 月　「内田勘・1930 年代台湾および日本を中心とした東アジア文化アーカイブ」目録公開
平成 31 年 3 月　「小林保祥（やすよし）-台湾南部原住民族アーカイブ」目録公開

６．職場体験活動の受入

博物館が受入れる職場体験活動の一環で、図書室での業務を体験してもらった。

日程：平成 30 年 10 月 17 日（水）、11 月 9 日（金）
人数：各回 2 名
内容：カウンター業務、マイクロリーダーの操作、納庫作業、図書・雑誌受入業務、リポジトリ登録　など。

７．地震による臨時休室および落下資料の復旧作業

平成 30 年 6 月 18 日に発生した大阪府北部を震源とする地震により、書庫内資料約 82 万冊のうち約 21 万冊が落下。

6/18～8/22　臨時休室
6/26～8/2　書庫内落下資料の復旧作業
7/17～8/3　館内者のみ、階ごとに利用再開（職員による出納方式）
8/6　館内者のみ、通常利用再開
8/23　図書室全面再開

落下資料の復旧作業には、国際日本文化研究センター図書室、総合地球環境学研究所図書室の方々にもご協力いただいた。

地震直後のようす

復旧作業のようす

地図資料室

視聴覚室

８．防災訓練

（第 1 回）
平成 30 年 9 月 25 日（火）博物館内で実施。（地震想定）
図書室に初めて避難者役（視覚障害者含む）を配置して行った。

（第 2 回）
平成 31 年 3 月 12 日（火）博物館内で実施。（火災想定）
図書室に避難者役を配置して行った。

国立大学図書館協会近畿地区協会
2019(令和元)年度
各館の特色ある活動報告

滋賀大学
滋賀医科大学
京都大学
京都教育大学
京都工芸繊維大学
大阪大学
大阪教育大学
兵庫教育大学
神戸大学
奈良教育大学
奈良女子大学
和歌山大学
奈良先端科学技術大学院大学
国際日本文化研究センター
国立民族学博物館

2020(令和2)年4月

令和元年度
滋賀大学附属図書館の特色ある活動報告

滋賀大学附属図書館の概要

（2020.3月現在）

1. 本館

場所　彦根キャンパス（経済学部・データサイエンス学部）
蔵書　391,499冊
入館者数　152,098人

2. 教育学部分館

場所　大津キャンパス（教育学部）
蔵書　263,710冊
入館者数　76,561人

1

重点領域1. 知の共有

1. 図書館業務システム更新

平成30年10月より、クラウドをベースとした全学情報基盤システムの運用が開始され、本学学術情報リポジトリを、クラウド型機関リポジトリ環境提供サービス「JAIRO Cloud」に移行した。そして引き続き、平成31年4月に図書館業務システムもクラウド対応型に更新。これに伴いセキュリティが格段に強化され、処理能力や拡張性に富んだ図書館業務システムとなった。また学内設置のサーバー管理が不要となり、より一層学習支援などの各種サービスに集中できることとなった。

2. デジタル化資料送信サービス

国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を図書館の館内で利用できるサービスとして、国立国会図書館デジタル化資料送信サービスを提供し、利用者の利便性を図っている。

重点領域2. 知の創出

1. 個別企画展示の実施

「Welcome to the Library 新入生にお勧めの本」、「論文・レポートに関する図書」等、時宜に即したテーマで実施し、図書館員のアイデアと多種多様な蔵書を活かした企画展示を行った。

《展示テーマ》
「平成を振り返る」、「分かりやすく読みやすい本：読書におけるバリアフリー」、「夏休みに読みたい本」、「旅したくなる本」、「蔵書印いろいろ」など

2. 第32回教科書展の開催（大津キャンパス）

明治初期から昭和戦前期までの近現代日本の教科書のあゆみを振り返る「教科書展」（昭和60年～）を開催。令和元年度は、「江戸時代から現代までの万葉集」をテーマに、令和の元号の出典となった万葉集が教科書でどのように扱われているかを振り返った。

ジョン・ロック『著作集』（第6版 1759）

3. 所蔵貴重書の公開展示（彦根キャンパス）

所蔵資料の調査及び評価のもと、一部貴重資料を展示ケースで解説付きで公開。春学期は教科書でもなじみのあるモンテスキュー『法の精神』のほか、ジョン・ロック『著作集』を、秋学期は18世紀イギリス・フランスの財政危機に関するゴードン、ミラボーならびにコクローの著作を展示した。

4. リユース本の活用（彦根・大津キャンパス）

教職員から提供された不要図書、図書館からの除籍図書など、不要となった図書の持帰りイベントとして、本館では「附属図書館図書リユース市」を開催（10/28～10/30）、教育学部分館では「リユース本コーナー」を設置し（11月下旬～12月）、図書館利用者の関心をより一層高めた。

重点領域3. 新しい人材

1. 文献取り寄せサービスの費用支援

学部生・大学院生を対象に、卒業論文・修士／博士論文作成およびゼミでの研究発表等への支援として、他大学の図書や論文等の複写物の取り寄せにかかる費用を、大学が負担するキャンペーンを年間を通して実施。（4月～1月）

2. 各種講習会・相談会の開催

新入生を対象にした大学入門セミナーでは図書館情報リテラシーを実施し、文献検索の基礎をレクチャーした（4月6日～5月23日）。教育学部分館ではさらに、図書館用語、図書館全般の情報、蔵書検索の方法、図書館の利用案内などをクイズとして盛り込んだ図書館クイズラリーを実施し、楽しみながら図書館情報リテラシーの向上を図った。（4月8日～26日）

上級回生向けには両館とも、ゼミ単位での講習会、個々のデータベース講習会など随時開催し、文献検索能力の向上を図った。

また教育学部分館では論文検索について、ひとりひとりの執筆テーマに基づいてきめ細かく対応をする個別相談会を実施した。（10月21日～11月14日）

3. 職場体験（彦根・大津キャンパス）

彦根市内・大津市内中学生の職場体験学習を受入れ、地域教育組織が推進している中学生チャレンジウィーク事業との協力連携を図った。（7月、11月）

職場体験学習では、蔵書の中から中学生目線によるお薦め図書を選定し、手作りのポップとともに展示を行った。

図書移動作業

中学生によるお薦めの本

令和元年度　滋賀医科大学附属図書館 特色ある活動（3 月末現在）

重点領域 1：知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有

- **「滋賀医科大学オープンアクセス方針」策定**
  - 教育研究評議会にて承認の上、「滋賀医科大学オープンアクセス方針」を策定（2/27）
    OA 方針の広報ページを図書館 Web サイトに開設し、学内に周知

- **教育研究成果の発信・オープン化支援**
  - 著作権や学術情報に関する学内者向けメールニュース【図書館 BriefNews】を配信（6 回）し、アーカイブページを作成
  - 研究推進課に協力し、図書館を会場として「学長裁量経費による研究助成（若手萌芽研究）成果発表ポスター展示及びポスターセッション」（11/22～12/10）を実施
  - 学内他部署（研究推進課, 総務企画課）に対し、研究業績評価に関して協力（科研費申請支援のための調査, 文科省業績調査等の根拠資料）

重点領域 2：知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供

- **学生選書ツアー**
  2/21 開催（協力：大垣書店）

  ⇒　8 名参加。
  選書をもとに参加学生と協働で POP 作成の上、
  図書展示を開催予定（新年度）

- **ビブリオバトル～塩田学長杯～**
  3/6 開催
  ⇒　21 名参加。
  2019 年度で任期を終える塩田浩平学長による記念プレゼンと
  6 名のバトラー（学生、教員、理事、職員）によるおすすめ本の紹介
  （新型コロナウィルス感染拡大防止対策を講じ、開催）

● **図書展示**

教職員との連携、学生協働、学内イベント・セミナー連携、他機関連携をテーマに
年間を通じて図書展示を実施中（令和元年度　計 14 回実施、うち 5 件はミニ展示）

新入生歓迎企画「本学教職員がすすめるこの本 2019」
「選書ツアーに行ってきました！」（2018 年度ツアー図書展示）
小島隆次先生監修「メタメッセージとしての心理学図書展示」
「リレー・フォー・ライフ関連図書」
学園祭「若鮎祭」講演会企画展示
「第 12 回国立女性会館（NWEC）所蔵図書展示」
「web 選書、やってみました！」
「退職記念図書展示 2019」「ねこ展」
＊「新生活応援」　＊「レポート書けた？」
＊「お身体に気をつけて」
＊「オープンアクセス時代の論文投稿とハゲタカジャーナル」
＊「知らないと危ない？著作権の落とし穴」関連図書

重点領域 3：新しい人材：知の創出

● **情報リテラシー教育の実施**

✧ **オリエンテーション**
・新入生/編入生オリエンテーション（4 月・10 月）　・臨床実習（医学科 5 学年）オリエンテーション
・看護師特定行為研修生オリエンテーション・新規採用職員オリエンテーション

✧ **学部生（1 学年・5 学年）対象**
・情報科学（医・看護学科 1 学年・講義）　・アカデミックライティング（医学科 1 学年・講義）
・アカデミックスキル（看護学科 1 学年・講義）　・看護学科 3 学年文献検索講習会（ゼミ単位・14 回）
・脳神経内科臨床実習　文献検索講習会（医学科 5 学年・計 23 グループ）

✧ **修士・博士課程対象**
・医学総合研究特論（医学専攻博士課程・講義）　・看護学研究方法論Ⅰ（看護学専攻修士 1 年・講義）
・看護学研究方法論Ⅳ（看護学専攻修士 1 年・講義）

✧ **現職医療従事者対象**
・看護部研修会（クリニカルラダーⅡを目指す人向け）（5/16・6/27・7/25）

✧ **その他**　ぷち講習会（PubMed・医中誌 Web・Scopus 等）毎週火・木（希望者対象・予約不要）
・UpToDate 利用講習会・登録会（1/24）　・EndNote Basic 講習会・個別相談会（2/18）

● **学外での活動**

・日本医学図書館協会での活動
診療ガイドライン WG、NLMC 日本語版 DB 作成 WG、『医学図書館』編集委員
・オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR) 人材育成作業部会員-新任担当者研修 9/30 運営・講師
・滋賀県図書館協会専門分野実務研修（リファレンス）10/31 講師
・JMLA 近畿地区会シンポジウム 11/22　講師

2019（令和元）年度 特色ある活動報告

京都大学図書館機構

１．総合計画

１）将来構想の策定

「京都大学図書館機構将来構想 2020～2027：世界最高水準の研究教育拠点を支える新たな図書館機能の実現」を策定した。

https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/about/1385163

http://hdl.handle.net/2433/245707

２）桂図書館の竣工

桂キャンパスの工学系 5 図書室を統合した「桂図書館」が 2019 年 9 月に竣工し、全学機能を持つエリア連携図書館として 2020 年 4 月 7 日に開館した。

https://www.t.kyoto-u.ac.jp/lib/ja

２．オープンアクセスによる研究支援機能の強化

１）科学技術分野の文部科学大臣表彰

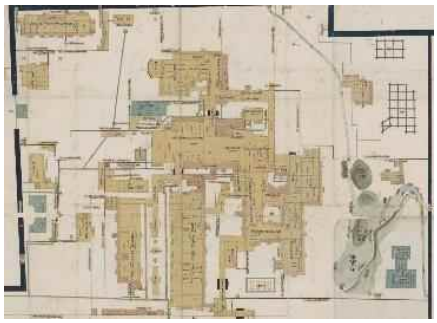
オープンアクセス・オープンサイエンスに対する取り組みが評価され、令和 2 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰（科学技術賞科学技術振興部門）を受賞した。

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_00187.html

２）貴重資料の電子化

● 学内外の経費により貴重資料の電子化を推進し、以下の資料他を公開

https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/



- 「中井家絵図･書類 禁裏之部」(全 1,067 タイトル)
- 「蔵経書院文庫」
- 「島田文庫」「中院文庫」「近衛文庫」(国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」による電子化・公開)
- 部局（文学研究科・理学研究科・総合博物館）が独自に作成した電子化画像を京都大学貴重資料デジタルアーカイブに公開し、京都大学の情報資源公開プラットフォームとしての役割を拡大

● コンテンツの国際展開

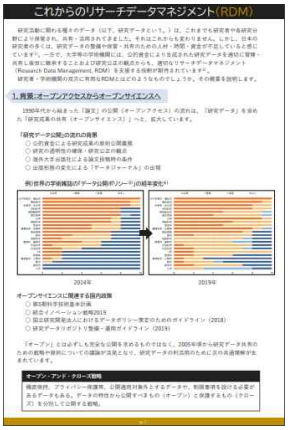
- WorldCat（OCLC）へ京都大学蔵書検索 KULINE 貴重資料メタデータを提供

3）機関リポジトリ KURENAI の利用拡大

● KURENAI が世界リポジトリランキング第 4 位に
http://repositories.webometrics.info/en/institutional

・ 国内で初めてオープン・サイテーションについての海外の動向等を本格的に紹介
・ 図書館機構講演会「オープン・サイテーションと機関リポジトリの展開」(5/20)
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1381711
・ 図書館総合展ポスターセッション出展（11/12-11/14）
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1383412

4）研究データ管理支援の推進
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/researchdata/1380691



・ 研究者情報整備委員会による、「京都大学研究データ管理・公開ポリシー」策定に協力（令和 2 年 3 月 19 日承認、公開準備中）
・ 研究データ管理に関するリーフレットの作成
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1383749
・ 論文のエビデンスデータを KURENAI に収録開始
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1383749

5）電子ジャーナルの安定提供

暗号化通信に対応した利用ログ取得のための電子ジャーナル・データベース認証システムの導入

・ オープンアクセス費(APC)・論文投稿料支払状況 2016-2018 (速報版)の公表
http://hdl.handle.net/2433/245219

6）研究成果発信に係るリテラシー向上支援

・ 大学院共通科目「学術研究のための情報リテラシー基礎」の開講
・ オープンアクセス誌への投稿等に対する注意喚起を実施
・ 研究成果発信に係る講演会・講習会の開催
- ケンブリッジ大学出版局によるセミナー
：How to Publish Your Articles/Books?(5/16)
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1381949
- IEEE 英語論文執筆セミナー
：IEEE Authorship Workshop 2019 (6/6)
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1382117
- 論文投稿で後悔しないために
：身に付けておくべきジャーナルの知識- (7/8)
https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1382511

3．学習・教育支援

1）ピア・サポートの取り組み

・ 学習サポートデスクスタッフによるピア・サポート」

2）バリアフリー支援

・ 視覚障害学生への学習支援および国民の読書バリアフリーへの貢献

2019 年度 京都教育大学附属図書館　特色ある取り組み

１．図書館利用・読書啓蒙の働きかけ

平成 27 年より「わくわく！ＫＹＯ^{2}ライブラリー図書館活性化プロジェクト」をスタート。

図書館に行こう！→図書館を知ろう！→図書館で過ごそう！→図書館を使おう！→図書館をひろげよう！

●「図書館に行こう！」（＝親しみやすい場所にする）

➢ライスボールセミナー「それはかなう夢講座」の後援

年 5 回開催、合計約 260 名参加。先着 30 名におにぎり 2 個とお茶を配布

（於: 附属図書館リフレッシュラウンジ）

➢中庭コンサート

「器楽基礎演習」の授業成果発表（6 月 6 日）

➢就職担当部署との連携

・就活ゼミ、就職セミナーを研修・セミナー室で実施

・教採セミナー等で学修支援員を案内

●「図書館を知ろう！」（＝学生との距離を縮める）

➢学修支援員の配置（平成 27 年 10 月～継続）

理科、数学教育専修の大学院生をラーニングコモンズに配置。

学期中の月～金の放課後

➢リクエストの強化

☆話題書の購入「リクエストと投票で話題の本を読もう」（9 月、3 月を除く毎月）

学術研究教養目的以外のリクエストおよび図書館員が選定した新刊、話題書等を対象に利用者投票。得票数の高いものを購入。15 万円／年を予算措置。

☆選書ツアー（ブックハンティング）の実施

11 月に 2 回実施　1 回生～院生 7 名が参加、108 冊購入。

☆通常リクエストの推進

前年水準を維持（106 件）

●「図書館で過ごそう！」（＝館内の環境整備、サービス向上）

➢日曜開館の継続実施

試験期の日曜日を開館　7 月 28 日、8 月 4 日、1 月 26 日、2 月 2 日

（日曜入館者数　前年比 8.5%増）

➢館内貸出物品の整備

小型扇風機やブランケットの館内貸出を開始

●「図書館を使おう！」（＝資料・施設の利活用）

➢図書展示

・保育士試験対策コーナー（5/20～7/2、11/21～12/6）

➢企画展示室等の利用による展示等の開催

学生や教職員による教科・学習研究等に関連する企画展示：8 件

➢英語多読資料の配置変更・授業に連携

授業担当教員に協力し、英語多読資料を The Kyoto Scale に対応した配架に変更

●「図書館をひろげよう！」（＝他館、他部局等との連携）

➢京阪奈三教育大学との連携

現物貸借無料化、双方向遠隔授業パスファインダー

➢府立図書館との連携

K-Libnet 参加　2019 年度 4 月～3 月実績：貸出 46 件、借受 52 件

２．利用者教育

●初年次教育科目における新入生図書館ガイダンスの実施

初年次教育の改革が行われ、Kyokyo スタートアップセミナー（1 回生前期）において、図書館ガイダンスが必修となった。(5 月 9 日～27 日 全 9 回実施、13 専攻 327 名)

●各種講習会の開催

・論文検索講習会、データベース検索講習会

・オーダーメイド講習会

３．地域貢献

●うたとおはなしの会の開催　幼児教育科と共催（定員 130 名）

・４月28日（土）154名参加

・12月14日（土）115名参加

●読み聞かせ会「えほんのもり」の開催

幼児教育科の学生によるよみきかせ、絵本カードの作成、今月の絵本紹介など。

於：児童書コーナー、毎月第１，３月曜日（４月を除く）

●第 1 回教育展の開催

「大学の授業～教育学編～」11月7日（木）～12月27日（金）約1400名来場

共催：京都教育大学教育資料館　協力：教育学科教育学教室　　後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会

これまで23回開催されてきた附属図書館の教科書展と、教育資料館の企画展を、今年度から共催して「教育展」として開催

●中学生の「職場体験」事業への協力

附属図書館で図書の配架、装備、カウンターでの貸出・返却等の勤労体験活動

本学附属学校を含む3校へ協力（附属桃山中学校、附属特別支援教育学校、京都市立深草中学校、合計7日間、7名）

４．その他

●教育資料館「今月の逸品」 展示協力　附属図書館 1 階渡り廊下

年 5 回　展示替

京都工芸繊維大学附属図書館　令和元年度特色ある活動の報告

1. KIT ぷらっとお持ち帰りフェア —古本 0 円祭・専門書からマンガまで—

標記イベントを令和元年 10 月 31 日(木)～11 月 1 日(金)の 2 日間開催した。当事業は平成 19 年度から継続的に実施しており、図書館で不用となった図書、及び教職員・学生から提供を受けた図書を会場に集め、来場者に無償で提供するものである。令和元年度は 1,500 冊以上の図書を提供し、来場者数は 2 日間でのべ 477 名となった。

2. ML(ミュージアム・ライブラリー)連携企画展示

平成 30 年度より、ML 連携企画と題して、美術工芸資料館と附属図書館が連携し企画展示を実施している。令和元年度は 3 回の企画展示を実施した。

「近代デザインの誕生　- 京都工芸繊維大学美術工芸資料館名品展 - 」

○開催期間

第 1 期: 2019 年 5 月 15 日(水)～6 月 15 日(土)

第 2 期: 2019 年 6 月 24 日(月)～8 月 10 日(土)

美術工芸資料館及び附属図書館の所蔵品の中から 1902 年の京都高等工芸学校開校時より教材、参考資料として収集された図案集や当時のデザイン教本及び、1899 年の京都蚕業講習所開校時より収集された蚕糸関連資料の展示を図書館 1 階で行った。

展示資料

展示会場

「図案家の登場　- 近代京都の染織図案Ⅲ-」

○開催期間

2019 年 8 月 26 日(月)～10 月 5 日(土)

図書館が所蔵する図案関連資料の展示を行った。

展示資料

展示会場

「ジャパニーズ・モダンデザインの誕生 -1940 年代から 1970 年代-」

○開催期間

2020 年 1 月 14 日(火)～2 月 22 日(土)

山鬼文庫(金沢市)の所蔵をお借りして、明治時代末から戦中期にかけての雑誌やデザイン教本、デザイン戦略に関する書籍の展示を行った。

また、期間中に関連イベントとして、講師に山鬼文庫の森仁史氏をお招きし、公開講座「書籍・雑誌にみるジャパニーズ・モダンデザイン」が令和 2 年 1 月 31 日に附属図書館内の研修室で行われた。

展示会場

公開講座

2020 年 4 月

2019（令和元）年度大阪大学附属図書館の特色ある活動

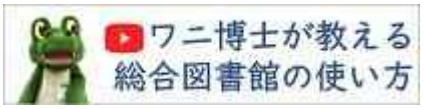
◆教育・学習支援

1. 学習支援

附属図書館 4 館全てにアクティブ・ラーニングスペースを維持し、引き続き図書館職員の他、ラーニング・サポーター（LS、身分は TA）が学習支援活動を行った。また、LS の学習支援の質をより向上させるため、教員の協力を得て、LS に対する研修（ライティング支援研修、傾聴法など 6 種類）を合計 12 回実施し、4 図書館の LS 延べ 43 名が受講した。

2. 新入生への図書館ガイダンス

総合図書館の案内動画を大阪大学のキャラクター「ワニ博士」出演で作成し、春の新入生対象図書館ガイダンスに利用した。その後、大阪大学公式 YouTube チャンネルで公開した。



2020 年度春は新型コロナウィルス感染防止対策のため新入生の集合ガイダンスを行わないが、この動画の視聴を案内している。

3. 障がいのある方への対応

2019 年 4 月より、図書館利用に障がいのある方への案内ページを図書館 Web サイトで公開した。
https://www.library.osaka-u.ac.jp/disability/
このページでも案内しているが、読むことが困難な学生のための資料電子化サービスを、キャンパスライフ健康支援センター及び学生所属部局と連携して行っており、現在 7 点の資料が利用可能で、12 点の電子化を終了し、公開準備中である。
これらの校正テキストデータを国立国会図書館へ提供し、広く視覚障がい者等の利用に供するため、2020 年 2 月にデータ提供館になるための覚書を締結した。

4. 利用者アンケートの実施

主に開館時間についてのニーズ把握のため、図書館全体で利用者アンケートを実施した。
実施期間： 2020 年 1 月 6 日～2 月 6 日（1 か月間））
回答数 ： 1,090 件 （Web963 件、紙 127 件）

様々な意見を集めることができたため、今後分析し、図書館運営方針等を検討するための材料の一つとする予定である。

◆研究支援

1. オープンアクセス

研究力強化に関する施策の提言を受け、研究推進本部会議等での議論を踏まえ、これまで研究科単位で策定されていた研究成果公開ポリシーを全学的なものに位置付けた「大阪大学オープンアクセス方針」の成案を進めた。また、経営企画オフィス URA 部門・研究推進本部と共催でセミナーを開催し、盛況であった。

○ 学術論文を取り巻く最新動向：オープンアクセスの現在
日 時 ： 2020 年 1 月 24 日（金）14:00～17:00
講 師 ： 船守美穂氏 （NII 准教授）、佐藤翔氏（同志社大学准教授）
参加人数： 97 名 （附属図書館 12 名、学内他部局 60 名、他機関 25 名）
講演資料は大阪大学リポジトリに、映像は大阪大学 CLE で公開している。

質疑応答の様子

2. リポジトリ

2019 年度からはオープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR）に参加した。また、2019 年 8 月にスペイン高等科学研究院（CSIC）が発表した世界の機関リポジトリランキング“TRANSPARENT RANKING: Institutional Repositories by GoogleScholar (July 2019)” において、大阪大学の機関リポジトリ OUKA(Osaka University Knowledge Archive)が世界 24 位（国内 2 位）にランクインした。

3. 研究データ管理

研究データ管理について情報収集を進め、2020 年 2 月から GakuNin RDM 実証実験に参加した。参加にあたり、研究オフィス会議および図書館に NII より講師を招いた。図書館では、職員研修として開催した。

○大阪大学職員研修　研究データ管理の実際:GakuNin RDM を例に

日　時 ： 2020 年 1 月 14 日（火）13:30～15:15

講　師 ： 小野亘氏、込山悠介氏、平原孝明氏

参加人数:50 名（附属図書館 20 名、学内他部局 13 名、他機関 17 名）

◆社会貢献

1. 貴重図書画像データのクリエイティブ・コモンズ・ライセンスでの提供

デジタル化して公開している貴重図書画像データの一部について、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスで引き続き提供した。また、大阪大学所蔵貴重資料の「石濱文庫」内の一部資料が、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の事業によりデジタル化された。

画像データは、非営利であれば自由にご利用いただける形＝クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利継承 4.0 国際 ライセンス（CC BY-NC-SA）として公開中である。

関連して、貴重資料に関する職員研修を開催した。

○大阪大学職員研修

大阪大学の貴重資料を知る:石濱文庫の世界と貴重資料のデジタル化

日　時 ： 2020 年 2 月 7 日(金)14:00～17:00

講　師 ： 堤一昭氏（大阪大学教授）

山本和明氏（国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター副センター長）

参加人数:33 名（附属図書館 20 名、学内他部局 6 名、他機関 7 名）

石濱文庫の展示も行った

2. クリスマスコンサートを開催

図書館を学生の課外活動の発表の場として提供し学生の主体的活動を支援すること、図書館を身近に感じてもらうことを目的として、図書館イベントの出演団体を学内で公募した。2019 年度は、エレクトーンサークルによるクリスマスコンサートを開催した。地域住民の参加もあり、楽しい時間となった。

日　時 ： 2019 年 12 月 7 日（火）18:00～20:00

参加人数： 66 名

◆その他

1. 箕面新キャンパス移転に向けて

2021 年 4 月の外国学図書館の移転に向けて、移転準備を進めた。外国学図書館は、大学図書館と箕面市立図書館が一体化した新しい図書館となるため、運営方針について、箕面市立図書館と協議を続け、基本事項の調整を行った。 新図書館の正式名称は、「箕面市立船場図書館」 に決定した。

2019 年度　大阪教育大学附属図書館の特色ある取り組み

大阪教育大学附属図書館

2019.11.1

2020.4.3

１．授業支援

授業と連携した学習支援として、図書館案内及び情報検索、データベース検索方法のガイダンスを実施している（前期 22 回、参加人数 555 人）。特に密接に関連した事例として、次のものがあげられる。

前期

「中等英語科教育法 III」（3 回生、45 人）

教育実習（研究授業）で通用する学習指導案が作成できることを目的とし、図書館職員 2 名が、TA2 名とともに授業進行に協力した。本学卒業生で、教育実習の経験があり、教員免許を持っている当館職員が担当した。指導案作成にあたって、参考とする国内外の指導案・資料検索の支援を行った。

後期

①「ICT 基礎 B」（2 回生 48 人）

②「算数科・数学科内容構成演習」（3 回生 23 人）

いずれもデジタル教科書を利用した。割り当てられた単元ごとに教科書の内容を研究・発表する内容（②では指導案まで作成）。

図書館はこの授業も含めた、デジタル教科書の購入に関する学内調整、ライセンス管理、授業および自習用の貸出ノート PC 整備を行った。次年度は小学校教科書が新学習指導要領対応となる。こちらについても同様の整備を行う。

③英語科評価論 II（3 回生 10 人）

2018 年に引き続き実施。卒論テーマを決める授業で、その過程を教員と共有した。昨年度の卒論テーマを参考にパスファインダーを作成した。今後、参考文献の書き方についても説明がほしいと教員より要望があり、2020 年度に対応を検討する。

２．サポートスタッフによる学習支援

週に 5〜7 時間程度、大学院生によるサポートスタッフ（計 4 人）をカウンター近くに配し、学習支援を行っている。前期は新入生向けの講習会を 12 回開催し、59 名の参加者があった。

３．紀要の全面査読制導入

2019（令和元）年度発行の紀要から新体制での査読実施となった。新制度では、投稿原稿の種類を「学術論文」「実践報告」「その他」とし、「学術論文」はすべて査読を行う。

- 投稿数の激減はなく、編集作業はおおむね順調に進んでいる。
- 査読者選定の負担軽減が課題。
- 査読を教員の個人評価に反映させる仕組みを導入し、2020 年度から運用する。

４．高大連携

・ 高大連携や附属学校図書室との連携の可能性を探るため、8 月の研修会（下記「５．イベント②」）にあわせて本学 3 附属中高の図書室職員との懇談会を開催した。同研修会の講師に附属学校司書教諭を招き、授業における教科担任と司書の協働について伺った。
・ 天王寺分館の利用について、2019 年 7 月に天王寺地区の附属中学・高校と申し合わせを取り交わした。
・ 附属図書館ウェブサイトに本学の高大連携事業に参加している高校生向けのページを新設し、利用案内や受講対象講義のシラバスに掲載されている参考図書の一覧表などを掲載した。

５．イベント

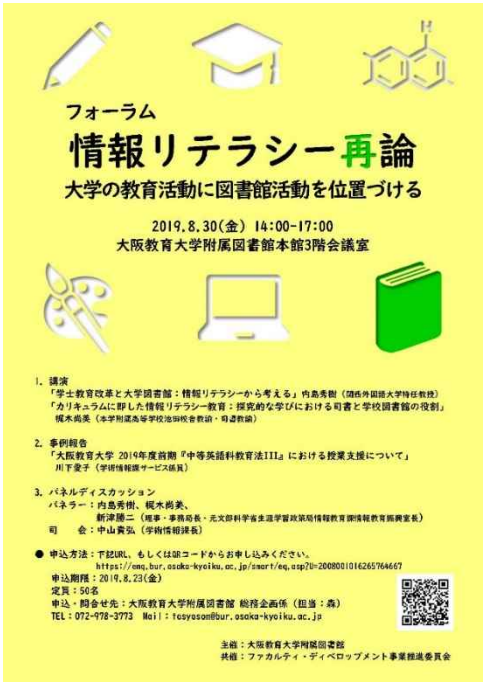
① FD 事業「ICT を利用したアクティブラーニングの推進」を開催（6 月開催　学生、教職員、学外者等 48 名参加）。講師は外部講師と情報処理センター教員。
② FD 事業「情報リテラシー再論 : 大学の教育活動に図書館活動を位置づける」を開催（8 月開催　附属学校の学校司書、教職員、学外者等 32 名参加）。講師は外部講師と附属高等学校司書教諭。
③ 学生協働のイベントとして、サポートスタッフと ICT 教育支援ルーム学生との協働企画「レポートお助けセミナー」およびプログラミング体験講座を実施。また人権週間関連行事として 3 年目になった「リビングライブラリー」を実施。

６．その他

・ 開講期の開館時間を授業開始時間に合わせ、本館 8 時 35 分、分館 10 時とした。
・ 教員採用試験対策および教育実習対応のため､休日開館を実施した｡(7～9 月計 12 日)
・ リポジトリ掲載論文に JaLC DOI の付与を開始した。2019.2 発行の本学紀要に掲載された論文以降、新刊の紀要掲載論文に DOI を付与。以後、紀要論文を中心に遡及的に付与していく予定。
・ 2020 年度末にシステムリプレイスを行う。前回同様、大学のネットワークと一括調達となった。
・ 国立国会図書館「図書館向けデジタル化資料送信サービス」開始（2019.4.2）
・ IR アンケート実施(2018 年度卒業生アンケートと 2019 年度在学生アンケートを実施。

2020 年度向けに新入生アンケートへの項目追加を依頼）

・ 新型コロナウイルス感染拡大対策として学外者の利用を停止し、学内者向けには LC およびグループ学習室の利用停止を実施（3/4 から開始。2020 年度も継続中）。



兵庫教育大学附属図書館 令和元年度活動報告

1 附属図書館

（1）BLUE CLASS（青空教室イベント）

①第 2 回「土・木・光：生活のなかにあふれる SGDs」(4/17)

SDGs の 17 の目標の中から、自然環境と消費問題に焦点を当て、トークライブや「Give-Away Shop（フリーマーケット）」、「Open Library（青空図書館）」、「Free Cafe（無料珈琲）」などを開催した。

②第 3 回「多様性/多様な性」(11/9)

性（セクシュアリティ）など多様性をテーマに語り合う哲学カフェや、LGBT をカミングアウトしているアーティストを取り上げたコンサート、無料古本市など、大学祭に合わせた市民向けイベントを開催した。

③クラウドファンディングを実施（12/9～1/31）

神戸市東遊園地を舞台に、市民を交えた青空教室イベントを実施するための資金を調達するためクラウドファンディング事業（Readyfor）を実施し、目標の 100 万円を達成した。

（2）コンサート・イベント

①オープンテラス・コンサート（6/25）

オープンテラスにて、大学院生によるバイオリンとピアノのイブニング・コンサート「夏の夜の夢」を開催。

②クリスマス・ライブ（12/13）
プロのミュージシャン L-DUO を迎え、ラーニングコモンズ PAO においてナイト・ライブを開催。無料カフェも展開。

（3）情報リテラシー教育関係

①図書館ツアー　3 回
②新任教員向け利用説明会　2 回
③授業協力（文献探索指導）4 回
④初年次セミナー　3 回
⑤文献探索講習会　9 回
⑥図書館利用相談会　3 回

（4） 図書展示

テーマを定めて、関連本を展示。
・4 月：「祝新生活」
・7 月：「必見！レポート・論文にお困りの方」
・10 月：「先生、読んでください」
・12 月：「芸術に触れる：舞台編」

写真：「先生、読んでください」
トライやる・ウィーク（県内の中学 2 年生を対象に行う職場体験活動）で附属図書館を訪れた二人の女子生徒が、将来学校現場に立つ学生や現職教員の学生に向けて、生徒の視点から先生に読んでもらいたい本をセレクトした。

２　教材文化資料館

(1)前期展（R1.4～8）　「人と木のひととき：就学前教育における ESD とおもちゃ」展

(2)後期展（R1.10～R2.2）「スクールヘルス：ここから育むみんなの健康」展

(3)後期展特別イベント「子どもの緊急事態に備える：学ぶ、そしてやってみる」(2/5)

令和元年度　神戸大学附属図書館活動報告

Ⅰ.学修サポート

■ 学生選書ツアー

平成 22 年度より毎年実施しています。
今年度は 6 月 21 日（金）に実施、14 名の参加がありました。選定された図書は総合･国際文化学図書館に参加者からの推薦コメントとともに配架、毎年非常に良く利用されています。

■ お昼休みトークイベント 2019

10 月 15 日（火）～17 日（木）に、総合・国際文化学図書館にて「ヨーロッパを学ぶ・ヨーロッパで学ぶ」をテーマに下記 3 回シリーズで開催しました。

①「多文化が共生する寛容な国際都市ベルリンの魅力」
②「人文系学者にとって留学するということ」
③「モスクワ：東西文化の交差点」

■ 読書マラソン企画

本を読んでスタンプを集め、集めたスタンプの数に応じて図書館グッズをプレゼント。スタンプ 10 個をゴールとしています。
完走者 13 名､提出された読書カードは 143 枚でした。読書カードの感想は、神戸大学附属図書館公式ツイッターで紹介しています。
実施期間：10 月 23 日（水）～12 月 27 日（金）

■ 学生チーム「ULiCS」の活動

－「THE ULiCS TIMES」の発行
ULiCS の団体誌として Vol.5～7 を発行しました。学内の各図書館での配布のほか、附属図書館 HP から公開しています。

－ 第 9 回大学図書館学生協働交流シンポジウム「ワクワクする図書館をつくろう－”やりたい”を形に－」（島根大学）への参加
ULiCS メンバー2 名と図書館職員 1 名が、9 月 5 日（木）～6 日（金）に島根大学で開催されたシンポジウムに参加しました。

－ 「全国大学ビブリオバトル 2019 地区予選」の開催
10 月 28 日（月）に開催し 5 名のバトラーと 10 名を超える観戦者の参加がありました。

－ 令和元年度学生協働団体交流会の開催
神戸松蔭女子学院大学図書館と協同で､2 月 10 日に開催しました。「ULiCS」と神戸松蔭女子学院大学の図書館サポーターがお互いの活動について情報を交換し、親睦を深める初の試みです。両校から計 20 名が参加し、大変好評でした。

II. 社会連携・情報発信

■ オープンサイエンス研修会

NII から講師をお招きして開催しました。
近畿地区協会加盟館にも声かけし、学内外の図書館職員や教員・学生を含む 36 名の参加がありました。

開催日：9 月 30 日（月）
会　場：神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室

■ 研修会「著作権制度の改正と障害者サービス」

（国大図協近畿地区協会助成事業）
近畿地区の国公私立大学図書館から 23 機関 53 名の参加がありました。
「障害者へのサービス提供について理解が深まった」「当館でも活用を検討したい」等の感想が寄せられ好評でした。

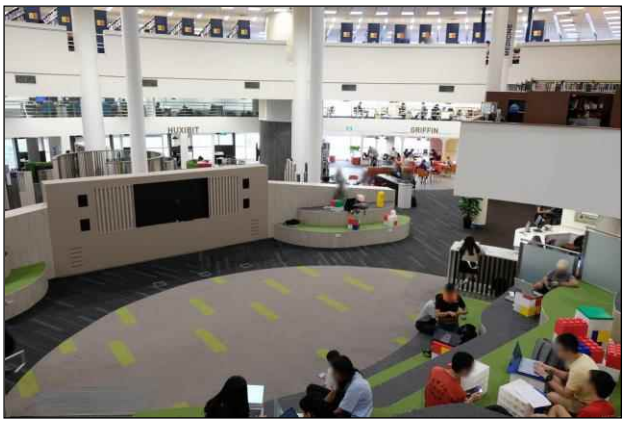
開催日：12 月 20 日（月）
会　場：神戸大学ﾌﾛﾝﾃｨｱ館ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝﾎｰﾙ
講　演：「障害者等の利用に配慮した近年の著作権制度の改正について」
「国立国会図書館の障害者サービスと視覚障害者等用データ送信サービス」

■ 令和元年度資料展「阪神・淡路大震災 25 年～あのときとこれから～」

令和元年度は震災から 25 年の節目を迎えるにあたり、「あのときとこれから：見つめ直す、いま」をテーマに当時の被害状況や震災の経験と教訓を紹介しました。

会　場：社会科学系図書館展示ホール
期　間：10 月 11 日（金）～2 月 4 日（火）

III. 職員の海外派遣



※写真は Nanyang Technological University

■ 国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）

令和元年度国立大学図書館協会海外派遣事業（短期）の助成を受け、職員 1 名をシンガポールに派遣しました。

期　間：10 月 7 日（月）～11 日（金）
訪問機関：National University of Singapore
Nanyang Technological University
Singapore Polytechnic
調査テーマ：「シンガポールの高等教育機関附設図書館における学修支援　：
レファレンス業務・情報リテラシー教育を中心に」

奈良教育大学図書館　令和元年度の特色ある取り組み

令和2年4月

１．ラーニング・コモンズの学習環境改善

　ラーニング・コモンズの有効活用として、授業利用の推進を各教員に呼びかけ、多くの授業や授業イベントに活用された。授業活用以外にも、奈良県教育委員会との高大連携事業「次世代教員養成塾」やカンボジア国教員養成研修、音楽教育講座のキッズ・サウンドラボ・アートプロジェクト、美術教育講座の幼児造形ワークショップ等、幅広い分野での活用が広がっている。

　ラーニング・コモンズの授業活用等を行った教員へのアンケートを元に、大人数の授業等に対応するための椅子の追加や演台としても使える昇降式テーブルの設置、少人数でのグループワーク用の短焦点プロジェクタ・映写対応ホワイトボードの導入など、学習環境の改善を図った。

２．デジタル化資料送信サービスの開始

　国立国会図書館図書館向けデジタル化資料送信サービスへの参加を委員会で検討し、絶版等の図書をデジタル画像で閲覧できるサービスを7月1日に開始した。

３．教育の動向に対応した学習資料の充実化

　小学校英語必修化に合わせ、英語教育講座教員の協力を得て、TOEFL等の英語能力テストの教材や英語多読本を整備し、英語コーナーの充実化を図った。

　また、プログラミング教育が導入されるにあたり、重点収集資料としてプログラミング教育関連資料を授業担当教員の協力を得て整備した。さらに、小学校・中学校で道徳教育が教科化されたのに伴い、授業担当教員からの推薦を得て、重点収集資料として道徳教育関連図書を整備した。

４．図書館紹介動画の作製

　学生サポーターとの協働により、新入生向け図書館紹介動画を作製した。新入生オリエンテーション等で活用する予定。

５．授業関連図書コーナーのレベル付け

シラバス掲載図書と各学問分野の初学者が最初に読んでもらいたい図書を揃えた授業関連図書コーナーについて、図書館運営委員会委員の協力のもと「初級」「中級」のようにレベル付けを実施した。レベル付けされた図書には「初級」等のシールが貼られ、一部の本の帯には教員からの推薦コメントを掲載している。また、ブックガイド「○○の本棚(書道教育の本棚、文化財科学の本棚)」を作成し学生に配布した。

６．ミニ展示「新元号「令和」と万葉集」の開催

新元号発表に合わせて所蔵する戦前期の万葉集を展示するミニ展示「新元号「令和」と万葉集」(4/3-5/14)を開催し、新聞やテレビの取材を受けた。

７．拡大教科書の導入

特別支援教育の授業ニーズに応えるため、目の見えにくい弱視の児童、生徒のための拡大教科書を導入した。昨年施行された読書バリアフリー法に基づく図書館の障害者サービスの充実にも繋がるとも考えられる。

８．教員養成大学図書館職員の研修

近畿地区四教育大学図書館協議会実務担当者会議を2/19 に本学で開催し、教員養成に関わる図書館サービスの進捗と課題について話し合った。

９．奈良女子大学との法人統合に向けた課題の検討

奈良女子大学との法人統合が合意されたことに伴い、法人統合に向けた課題を両大学担当者間で整理し、共同運営・サービス向上に向けて検討していくこととなった。

１０．教育資料館の再開館

平成 30 年度の耐震改修工事を経て、2019 年 5 月に教育資料館が再開館した。常設展「新薬師寺旧境内展」を開催するほか、教育・研究や課外活動の成果発表の場として 7 件の企画展示が行われた。

奈良女子大学＜特色ある取り組み＞

Ⅰ　学術情報センターIF展示コーナーにおいて、季節変わりのテーマで展示を行いました。

1）2019年11月～12月「意外と知らない」特集

LiSA(Library Student Assistant)による企画で古典作品、映画・ドラマ化された作品の原作、ベストセラー、受賞作品、名画など、有名ではあるものの意外と読んだり見たことはないと思われるものを集めました。

1）

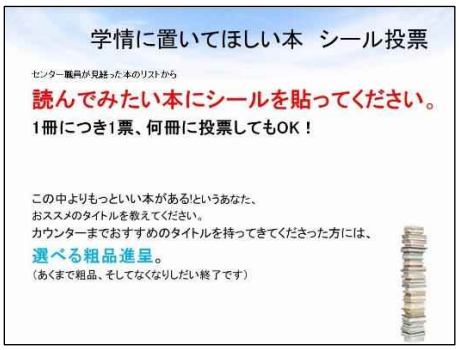
（ポスター）

（学生によるPOP）

2）12月　◆学生選書◆

2019年12月に実施。職員がリストアップした中から学生による投票を行い得票上位の約100冊を購入しました。

（展示の様子）



（ポスター）

II　学術情報センター2F 展示コーナーにおいて、各学部輪番で行っている展示を開催しました。

　2019 年 10 月からは、「食物栄養学科の教育・研究」と題して、パネル展示のほか、食器や明治・江戸期の料理本などを展示しています。

III　半個室席を設置しました。

　比較的来館者の少ない時期でもすぐ満席になります。

和歌山大学図書館 2019（令和元）年度特色ある活動の報告

令和 2 年 4 月 17 日

1．知の共有：＜蔵書＞を超えた知識や情報の共有

1）教育研究成果の発信、オープン化と保存

① オープンアクセスウィークにリポジトリ登録促進をメールで依頼（2019.10）

2）出版された資料の整備と利用

① 「学生用図書整備 5 ヵ年計画（2017-2021）」に基づく学生用図書の整備、状況報告

② 大学史資料室の活動

創立 70 周年記念式典（2019.10.26）での展示パネル作成協力、リストの公開

3）知識や情報の発見可能性の向上

① 学認によるリモートアクセス対象の拡大（2019.10）

2．知の創出：新たな知を紡ぐ＜場＞の提供

1）知を創出する場の拡大・整備・提供

① セミナールームを追加で整備（2019.10）

② 読書推進プロジェクト「一冊の本があるだけで」実施（2019.12.24、2020.1.24）

2）社会に開かれた知の創出・共有空間の提供

① 研修会「資料を救う－水損資料への対応」開催。県内の図書館関係者 17 名参加（2019.8.28）

② 和歌山地域図書館協議会フォーラム「「宮沢賢治」が「江戸川乱歩」に似ている理由」を開催。（2019.10.22）、地域住民 31 名参加。テーマに合わせた図書展示を加盟各館で実施

3．新しい人材：知の共有・創出のための＜人材＞の構築

1）新たな人材の参画

① 学生サポーター（学部学生、大学院生 18 名）

・新入生歓迎企画展示（2019.4）、オープンキャンパスでの図書館ツアー（2019.7）

・選書ツアー、企画展示（2019.11～12）

② ラーニング・アドバイザー（LA 大学院生 8 名）

・ラーニング・コモンズでの相談対応（2015.10～）

・選書、展示および企画の実施

長崎原爆・被爆者座談会（2019.6.18）、ビブリオバトル（2019.6.26、28、7.1）

4 学部合同研究発表会 LETS（2019.11.20、12.11）

新たなる海外とのつながり方（2020.1.22）、自分だけの留学を作る（2020.2.6）

・ミニ講習会の開催

メールマナー講習会（2019.7.9）、Office365 活用術（2019.10.31）

・パスファインダー作成

2）国立大学図書館職員の資質向上

① 図書館避難訓練の実施（2019.9.30、2020.3.5）

2019(令和元)年度奈良先端科学技術大学院大学附属図書館の特色ある活動の報告

1. オープンアクセス方針施行に伴う研究業績管理システムの改修

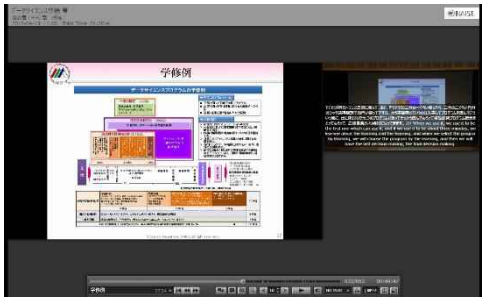
本学では 2019 年 7 月にオープンアクセス方針を制定し、本学の教職員の研究成果について、学内外からの自由な閲覧を保証することとなった。

これを受け、研究業績管理システムの改修を行い、教員が研究業績として学術論文を登録する際に本学リポジトリ naistar への登録可否の入力を必須とした。また研究業績管理システムに共著者の同意確認欄および著者最終稿・著作権譲渡契約書のアップロード機能を付与し、リポジトリ登録にかかる作業の効率化を図った。

2. WEB API を用いた研究業績データの活用

研究業績管理システムに登録された約 48,000 件の業績データを有効的に活用するために、2019 年 4 月より WEB API 機能を運用開始した。WEB API により naistar へのリンクを含めた業績データを各研究室等の HP 上に簡易に取り込めるようになり、各研究室等の HP 上での研究業績の情報発信に活用するとともに、naistar へのアクセス向上を促進している。

3. 授業アーカイブの日英自動翻訳対応



本学では、講義・講演等を収録し、データベース化して公開する授業アーカイブシステムを導入している。本システムにおいて、本学知能コミュニケーション研究室の協力のもと、AI(人工知能)技術により授業の映像に字幕を自動付与するシステムの開発を進めている。

2019 年度は音声から日本語字幕、日本語字幕から英語字幕が自動生成できるようになり、94 件の講義に日本語字幕・英語字幕を付与した。今後は承諾の取れた全講義に対象を広げ、翻訳精度の向上・英日翻訳に取り組む予定である。

4. 知の森コーナー

学内から募集したテーマや図書館職員が設定したテーマに沿った資料を選び、「知の森コーナー」として展示している。2019 年度の知の森コーナーのテーマは以下のとおり。

令和元年度知の森コーナー展示企画一覧

実施回	実施時期	テーマ
第 25 回	2019 年 4-7 月	時は流れる
第 26 回	2019 年 7-11 月	周期表
第 27 回	2019 年 12 月-2020 年 3 月	発達障害
第 28 回	2020 年 3 月-	デザインを活かす

2020.04.01

2019 年度 国際日本文化研究センター図書館活動報告

1. EAJRS（日本資料専門家欧州協会）年次集会 2019 への参加

ブルガリアのソフィア大学で 2019 年 9 月 18 日から 21 日にかけて開催された「第 30 回日本資料専門家欧州協会（EAJRS）年次集会」に、日文研図書館から、山本侑子、荒木のりこ、坪内奈保子の３名の職員が参加した。会場内でのブース出展、ワークショップでのプレゼンテーション等を実施するとともに、他機関のブース見学やワークショップにも積極的に参加し、欧州の図書館司書・日本研究者らとの交流を深めた。

2. IIIF、C.C.ライセンスへの取組

日文研が提供するオンラインコンテンツへの適用を目指し、関係教員および総合情報発信室と連携し様々な取組を実施している。

■ワークショップ等への参加：

○IIIF Curation Viewer チュートリアル

日時：2019 年 9 月 10 日（火）15:00～17:30　　場所：日文研第３共同研究室

参加者数： 30 名（うち、大阪大学図書館から 2 名、神戸大学図書館から 1 名の参加あり）

内容：「IIIF Curation Platform 入門～キュレーションの作成からシステムの展開まで～」北本朝展氏（国立情報学研究所）、「IIIF についての最新情報」永崎研宣氏（人文情報学研究所／日文研）

○ワークショップ「公開コンテンツのオープン化の現状と課題」

日時：2019 年 12 月 16 日（月）13:30～16:00　　場所：日文研セミナー室 1

参加者数： 21 名（うち、神戸大学図書館から 1 名の参加あり）

内容：「日本における諸機関のデータオープン化とライセンス付与動向」後藤真氏（国立歴史民俗博物館）、「国際日本文化研究センターにおけるライセンス付与への課題」関野樹氏（日文研）

■ドキュメントの作成

○関係教員および図書系職員を中心とした CC ライセンス適用検討 WG において検討を重ね、10 月に現況と課題をまとめた所内向け報告書を作成した。

3. 吉田初三郎式鳥瞰図データベースの公開

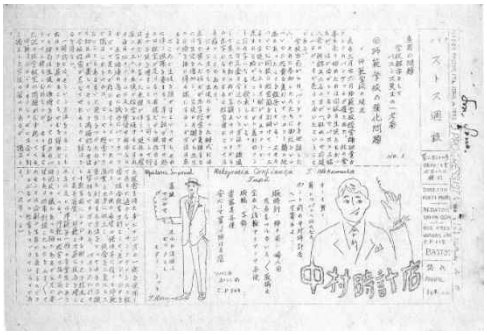
大正から昭和初期に起こった大観光ブームの中、日本内外の旅行パンフレットに鳥瞰図を取り入れたのが「大正の広重」と呼ばれた吉田初三郎。彼の鳥瞰図の最大の特徴は極端なデフォルメで、大胆な構図と鮮やかな配色による豊かな表現に彩られ、詳細な情報が盛り込まれてい

る。日文研では、吉田初三郎、および彼の影響のもと同時代の絵師が描いた鳥瞰図の網羅的な収集を行ってきた。本データベースではその全体像を把握できるようにするとともに、画像を共有するための国際的な枠組、IIIF（International Image Interoperability Framework）を採用し、一般から研究者まで広く活用されることを目的として、2020年3月に公開を果たした。

（https://iiif.nichibun.ac.jp/YSD/）

4. 海外邦字新聞の公開

北米、南米各地で、日本人の移民によりある程度の日本人コミュニティができると日本語新聞が発行され、本国、国内、地域のニュースを伝え、 文芸欄や意見記事で現地の言葉に不慣れな移民たちを結んできた。これら日本語新聞は、政治・商業・教育から娯楽・ゴシップ・広告まで含み、移民史研究の基本資料であるといえる。本年４月､所蔵者との権利関係のため利用を所内アクセスのみに制限してきた７紙について公開可能となり､以前のものも含め全９紙（下記）を公開している。（http://rakusai.nichibun.ac.jp/hoji/）



- 伯剌西爾時報 1917-52年／サンパウロ発行
- 日米 1919-32年／サンフランシスコ発行
- 亜爾然丁時報 1924-43年／ブエノスアイレス発行 （新規公開）
- 聖州新報 1923-41年／サンパウロ発行 （新規公開）
- 日伯新聞 1924-39年／サンパウロ発行 （新規公開）
- ブラジル朝日新聞 1940-41年／サンパウロ発行 （新規公開）
- 南米新報 1930-41年／サンパウロ発行 （新規公開）
- 日本新聞 1932-37年／サンパウロ発行 （新規公開）
- バストス週報 1951-78年／サンパウロ州バストス発行（新規公開）

5. 美術館・博物館等への図書館所蔵資料出展

■「女・おんな・オンナ～浮世絵にみる女のくらし」（松濤美術館 2019年4月6日～5月26日）
『正徳雛形』ほか48点

■「THE BODY 身体の宇宙」（国際版画美術館 2019年4月20日～6月23日）
『Cajetanus Petriolus Romanus, Tabulæ anatomicæ』ほか5点

■「驚異と怪異 ―想像界の生きものたち」（国立民族学博物館 2019年8月29日～11月26日）
『紅毛雑話』ほか3点

■ICOM（国際博物館会議）2019年京都大会（2019年9月1日～7日）
日文研によるブース出展が実施され、図書館所蔵の「酒呑童子絵巻」「風流艶色まねゑもん」を展示した。今回、絵巻についてはレプリカの作成も行い、レプリカ絵巻を実際に手に取ってみてもらうなどにより好評を得た。

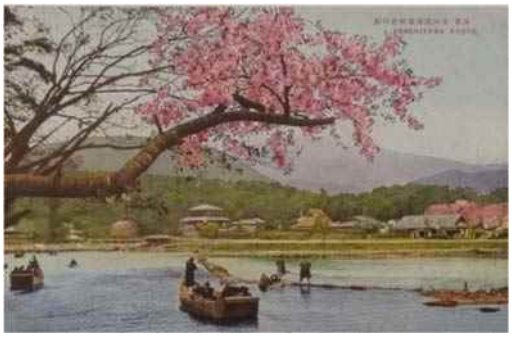
■「交流の軌跡 ： 初期洋風画から輸出漆器まで」（中之島香雪美術館 2019年10月12日～12月8日）
『Gottfrieds historische kronyck / Joh. Lodew』ほか4点

■「草の根のアール・ヌーヴォー：明治期の文芸雑誌と図案教育」（京都工芸繊維大学美術工芸資料館（日文研共催）2019年10月28日～11月22日）

『明星画譜』ほか 5 点

■「ハワイ：日本人移民の 150 年と憧れの島のなりたち」（国立歴史民俗博物館 2019 年 10 月 29 日～12 月 26 日）　『MISLS album 1946』1 点

6.　館内常設展示の実施



日文研図書館資料館 1 階の展示室にて資料展示を実施した。2019 度も前年度に引き続き、普段目に触れることのない古地図や絵葉書等の資料をテーマに沿って紹介している。

（第 1 回）古地図と絵はがきでみる　3　富士山

期間：2019 年 6 月 7 日（火）～9 月 30 日（月）

内容：「富士山とは」「富士五湖」「初三郎と富士山」「外国人と富士山」をテーマに資料を集めた。

（第 2 回）日文研と桜

期間：2020 年 2 月 25 日（火）～

内容：古来より人々に愛されてきた「桜」をテーマに資料や研究を集めた。

7.　同志社大学図書館司書課程「図書館実習」への協力

2019 年 8 月 27 日（火）～30 日（金）にかけて、同志社大学図書館司書課程の「図書館実習」に協力し、実習生 2 名を受入れ、各図書館業務の実習を実施した。なお、当該協力は 2019 年度で 8 年目となる。

8.　OCLC WorldCat へのデータ追加登録

OCLC WorldCat（2017 年度登録開始）へ、2018 年度後半から 2019 年度にかけて増加した書誌・所蔵レコード約 8 千件について追加登録を行った。

令和元年度　国立民族学博物館図書室の活動について

１．サービス

R1.12.17「国立国会図書館デジタル化資料送信サービス」および「国立国会図書館歴史的音源配信サービス」を開始した。

２．図書室見学・案内

外来研究員オリエンテーション / 総研大生オリエンテーション / 事務系新任職員等研修 / みんぱくディスカバリーツアー(*) / JICA 委託事業「博物館とコミュニティ開発」 / 総研大オープンキャンパス /みんぱく若手研究者奨励セミナー　など。

(*) 大阪大学との連携プログラムの一環で開催。大阪大学の学生を対象にした、民博の魅力を知ってもらうための企画。当日 2 回、図書室見学案内を行った。

３．資料の整備

・購読雑誌について、教員への新規購読希望調査を行い新規に 4 タイトルの購入を決定した。

・マイクロ資料の遡及入力について、図書 2,607 件、新聞雑誌 2 タイトル(141 件)の遡及入力を行った。

・購読データベース Wiley Digital Archives -RAI Archives の Wiley 講師による利用者講習会を実施した(R1.10.2)。

・平成 30 年度から令和 2 年度の 3 か年で循環照合を行う。令和元年度は、書庫 1 層・5 層を中心に約 23 万冊の蔵書点検を行った。

４．職場体験活動の受入

令和元年 11 月 7 日（木） 吹田市立古江台中学校　2 名

令和元年 11 月 13 日（水）豊中市立第二中学校　2 名

カウンター業務、マイクロリーダーの操作閲覧、納庫作業、図書・雑誌受入、リポジトリ登録作業などを体験。

５．資料の貸付

令和元年 7 月　神奈川県立歴史博物館　2019 年度特別展「北からの開国」（貴重書 1 点）

令和元年 10 月　大阪大学総合学術博物館　第 13 回特別展「大阪が生んだ稀代の経営者 佐治敬三”百面相”」（図書資料 5 点）

令和 2 年 4 月　兵庫県立歴史博物館　特別展「驚異と怪異－モンスターたちは告げる」（貴重書含む図書資料 29 点）

令和 2 年 4 月　江戸東京博物館、山口県立美術館、あべのハルカス美術館（巡回展）「奇才－江戸絵画の冒険者たち」へ、貴重書を貸付予定。

６．研究アーカイブズ資料の受入・目録公開

令和元年４月　「西北ネパール探検隊 1958 年カードアーカイブ」目録公開（民族学資料）

令和２年３月　「木内信敬アーカイブ」目録公開（民族学資料）

「石毛直道アーカイブ」目録公開（民族学資料）

以上

2020(令和 2)年度
各館の特色ある活動報告

滋賀大学
滋賀医科大学
京都大学
京都教育大学
京都工芸繊維大学
大阪大学
大阪教育大学
兵庫教育大学
神戸大学
奈良教育大学
奈良女子大学
和歌山大学
奈良先端科学技術大学院大学
国際日本文化研究センター
国立民族学博物館

2021(令和 3)年 4 月 19 日

令和2年度
滋賀大学附属図書館の特色ある活動報告

滋賀大学附属図書館の概要

（2021.3月現在）

1. 本館

場所　彦根キャンパス（経済学部・データサイエンス学部）
蔵書　394,973冊
入館者数　39,135人

2. 教育学部分館

場所　大津キャンパス（教育学部）
蔵書　264,237冊
入館者数　24,551人

1

重点領域1. 知の共有

1. 学認フェデレーション

学認フェデレーション「学認」の利用により、本学が契約している電子ジャーナル・データベースについて、「しがだいID・パスワード」の認証を経ることで学内と同様の環境での利用が可能となった。

2. 電子ジャーナル整備

コロナ禍でのオンライン授業や在宅勤務による電子ジャーナル・データベースの利用増加が予想されたため、同時アクセス数の増加等の対応を行うことで、利便性の向上を図った。

3. デジタル化資料送信サービス

国立国会図書館のデジタル化資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を図書館の館内で利用できるサービスとして、国立国会図書館デジタル化資料送信サービスを提供し、利用者の利便性を図っている。

重点領域2. 知の創出

1. 個別企画展示の実施

「論文・レポート作成に関する図書」、「感染症について知ろう！！」等、時宜に即したテーマで実施し、図書館員のアイデアと多種多様な蔵書を活かした企画展示を行った。

《展示テーマ》

「古本募金による収入で購入しました！」、「臨時休館中に届いた新着図書」、「謎。」、「日経サイエンスのおすすめ本特集」、「SDGs」、「ノーベル文学賞？」、「教員がおススメする本」、「春の本」など

2. 第34回教科書展の開催（大津キャンパス）

「一温故知新，可以為師矣（故きを温（たづ）ね新しきを知る，以て師と為るべし）一」をテーマに「教科書展　論語」を開催。「論語」に登場する「温故知新」を始めとした現代にも通じる考え方・道徳規範等を振り返る貴重な機会となった。

3. 所蔵貴重書の公開展示（彦根キャンパス）

バスティア『バスティア全集』（全7巻）1854-1864）

所蔵資料の調査及び評価のもと，一部貴重資料を展示ケースで解説付きで公開。令和2年度は，楽観的自由放任主義経済学の元祖とされるバスティア『バスティア全集』（全7巻）や，詩人ルシェによって翻訳された，経済学ではおなじみのアダム・スミス『国富論』の仏語版初版が展示された。

4. リユース本の活用（彦根・大津キャンパス）

例年実施している，教職員から提供された不要図書や，図書館からの除籍図書の持ち帰りイベント「図書リユース市」について，令和2年度はコロナ禍の状況を考慮し実施を見送った。ただし，両館にて随時「持ち帰りコーナー」を設置していたことで，教職員から提供された不要図書や図書館の除籍図書のリユースを推進し，学生の図書館や図書への興味を高める契機や勉学交流の場として，有意義な活動となった。

5. 文献取り寄せサービスの費用支援・郵送サービスの実施

学部生・大学院生を対象に，卒業論文・修士／博士論文作成およびゼミでの研究発表等への支援として，他大学の図書や論文等の複写物の取り寄せにかかる費用を，大学が負担するキャンペーンを年間を通して実施。（4月～1月）

また，コロナ禍で来館が難しい学生を対象に，各種資料を郵送で自宅に届けるサービス（郵送サービス）を実施した。（令和2年5月18日～令和3年3月31日現在も継続中）

重点領域3．知の媒介

1. 学生との交流の場

コロナ禍により，例年実施している新入生を対象にした大学入門セミナーは開催できなかったが，学生が利用する学習管理システム（SULMS）にパワーポイントやPDFの資料（図書館情報リテラシー教育・文献検索の基礎等）を作成・掲載することで対応した。

教育学部分館ではさらに，図書館用語，図書館全般の情報，蔵書検索の方法，図書館の利用案内などをクイズとして盛り込んだ図書館クイズラリーを実施し，楽しみながら図書館情報リテラシーの向上を図った。（10月27日～11月9日）

学生参加による図書選定として，本館では学生ボランティアの図書選定学生委員会を通じ，分館では分館図書委員会を通じ，両館で230冊程度を選定した。

2. 職員研修への参加

・令和2年度図書館等職員著作権実務講習会（文化庁）
・漢籍担当職員講習会（初級）（京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）
・LIMEDIO Seminar 2020（株式会社リコー）
・学術コミュニケーション技術セミナー（JPCOAR Monday）（オープンアクセスリポジトリ推進協会（JPCOAR））
・漢籍担当職員講習会（中級）（京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）
・令和2年度障害者サービス担当職員向け講座（国立国会図書館）
・2020年度大学図書館シンポジウム（国公私立大学図書館協力委員会（JULIS）・国立大学図書館協会東京地区・日本図書館協会大学図書館部会の共催）
・2020(R2)年度大阪大学職員研修（大阪大学附属図書館）
・令和2年度国立大学図書館協会近畿地区助成事業講演会（国立大学図書館協会近畿地区協会）
・ウェブ講演会「「新しい日常」における図書館」（国立国会図書館）
・デジタルコレクション活用フォーラム（国立国会図書館）　等

令和 2 年度　滋賀医科大学附属図書館 特色ある活動

《重点領域 1》

● **電子リソースの整備**
- ・コロナ禍における教育・研究支援として、動画教材や電子書籍等の電子リソースを整備
- ・期間限定で無償提供されたコンテンツ等の情報をまとめたポータルページを作成

● **文理融合型教育プログラム STEAM 教育への支援**
- ・教養関係図書の充実のため、教養科目担当教員に選書を依頼し、学生アンケートを実施

● **著作権に関するサポートの提供**
- ・「授業目的公衆送信補償金制度」に関して学内におけるとりまとめを担当
- ・著作物利用に関する情報提供を行い、個別相談に対応

《重点領域 2》

● **新入生ビブリオバトル（10/19 開催．26 名参加）**
- ・10 月から対面授業が始まった新入生のため、生命科学講座教授 3 名が企画
- ・新入生 3 名と教職員 2 名がおすすめ本を紹介
  （新型コロナウィルス感染拡大防止対策を講じ、開催）

● **図書展示**
- ・教職員との連携、学生協働、学内イベント・セミナー連携、他機関連携をテーマに
- ・年間を通じて図書展示を実施（令和 2 年度　計 10 回実施、うち 4 件はミニ展示）

● **環境整備・スペース転用**
- ・集密書庫のカビ汚染された資料をクリーニング（一部廃棄）
- ・開架雑誌を集密に移し書架を撤去し、講義室として提供（2020 年 10 月～2021 年 3 月）
  （4 月以降、図書館の学習スペースとして改修予定）

《重点領域 3》

● **情報リテラシー教育の実施**
- ・遠隔のみ（e-Learning システムによるオンデマンド配信または Zoom によるリアルタイム配信）、対面のみ、遠隔と対面の併用　3 つの形式による講義や研修会を実施

✧ **学部生対象（7 件・28 回）**
- ・情報科学（医・看護学科 1 学年）・看護研究方法論（看護学科 2/3 学年）
- ・アカデミックライティング（医学科 1 学年）・アカデミックスキル（看護学科 1 学年）
- ・看護学科 3 学年文献検索講習会・脳神経内科臨床実習文献検索講習会（医学科 5 学年）

✧ **大学院生修士・博士課程対象（3 件・4 回）**
- ・医学総合研究特論（医学専攻博士課程）・看護学研究方法論Ⅰ（看護学専攻修士 1 年）
- ・看護学研究方法論Ⅳ（看護学専攻修士 1 年）

✧ **職員対象（2 件・6 回）**
- ・看護部研修会・研究倫理教育研修会

2020（令和 2）年度特色ある活動報告

2021 年 4 月
京都大学図書館機構

1. オープンアクセスの推進と研究活動支援

(1) KURENAI が世界リポジトリランキング第 3 位に（2020 年 9 月）
(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1387062)

(2) 粗悪学術誌に関する注意喚起のためのリーフレットをリニューアル（2020 年 9 月）。加えて、学内の実際の体験談を追補し、よりメッセージ性を高めたリーフレットを作成した（2021 年 1 月）。
(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1386959)
(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1388639)

（2020 年 9 月）

（2021 年 1 月）

(3) 図書館機構のオープンアクセス・オープンサイエンスに対する取り組みが評価され、図書館機構オープンアクセス推進プロジェクトチームが令和 2 年度国立大学図書館協会賞を受賞した（2020 年 6 月）。
(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1386563)

(4) 「京都大学の部局等における研究データ管理・公開に関する実施方針策定のためのガイドライン」・「実施方針ひな形」を策定した（2021 年 3 月）。

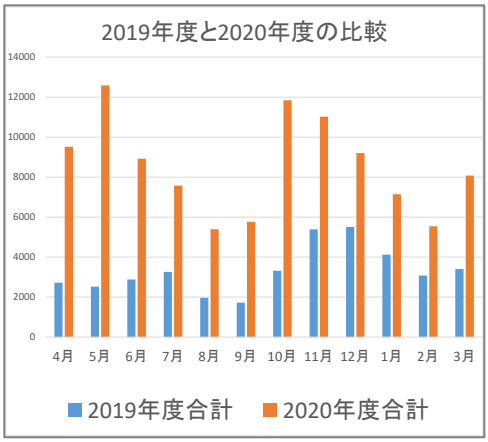
(5) 本学の教員著作（日本語学術書籍等）を KURENAI から公開する事業を開始した。教員の希望を募り、該当する出版社に許諾確認を行った。51 名 366 件の公開希望のうち、61 件公開可、76 件不可の出版社回答があった。次年度に公開作業と継続調査を行う予定である。

(6) 2018 年から参加していた MDPI 社の機関オープンアクセスプログラム（論文投稿料（APC）10%割引）を、2020 年 10 月 31 日をもって終了した。

2. 学修・教育支援の推進

(1) 新型コロナウィルス感染症により遠隔講義・自宅学習が急増した状況を受けて、学修環境の整備のため以下の電子ブック緊急整備を実施した。

区分	内容等
基礎的教養のための書籍	岩波書店『現代人の教養』サブスクリプションパッケージ（500 冊）
授業科目に即応した教科書等	2020 年度前・後期/2021 年度前期の授業に対応する教員推薦図書（408 冊）
学習の基盤となる基本的資料群	コロナ対応学内予算措置により主要な叢書・シリーズ・セットを整備（4,329 冊）



【国内プラットフォームの電子ブックアクセス数】

(2) 新型コロナウィルス感染症への対応として、オンラインによる人的支援を行った。

① 大学院生スタッフによる、Zoomを使ったオンライン学習相談を開始した（附属図書館 2020年6月）。

② オンライン講習会を実施した。（一部のみ掲載）

・図書館機構オンライン講習会

「論文投稿で後悔しないために-身に付けておくべきジャーナルの知識-」

(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1386519

(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1388383)

「留学生学習サポート強化週間」（人文社会系の研究方法、学術的な日本語の使い方など） (https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1387437)

「卒論ブラッシュアップ講座」

(https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1387412)

・「15分でわかるZoomなレポート準備講習会　レポートを書くために(初級)(中級)」（吉田南総合図書館） (https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1386007)

・各種DB講習会（吉田南総合図書館、経済学部図書室、薬学部図書室）

3. 豊富な学術資源の活用と社会貢献

(1) 大正時代から永久寄託されていた「菊亭文庫」が附属図書館に寄附され、歌道・音楽・故実等の典籍、文書、美術品等約 1800 点の受け入れを行った（2021 年 1 月）。

(2) 国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」、科学研究費補助金、京都大学貴重資料デジタルアーカイブ基金等の様々な外部資金を獲得し、附属図書館所蔵の大惣本、蔵経書院文庫、谷村文庫猪苗代家本、菊池三渓自筆稿本、菊亭文庫等の貴重資料の電子化・公開を進め、社会に貢献した。

(3) 国立国会図書館と連携して、京都大学蔵書検索 KULINE の貴重資料のメタデータを国立国会図書館サーチから検索できるようにした。検索結果から「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」にリンクできるため、直接電子化資料が閲覧可能となり、学内外の研究者や一般利用者からの本学貴重資料への発見性・利便性が高まった。

(4) 本学の貴重書デジタルアーカイブで公開している「肥後国海中の怪(アマビエの図)」が、SNS や報道機関に取り上げられ、さまざまな商品デザインに使用されるなど注目を集めた。画像利用の自由化が社会貢献につながる実例となった。

4. 全学図書館機能の基盤整備（新型コロナ感染症への対応）

(1) 学生向けに、新型コロナ感染症対策に伴う各図書館・室のサービス状況と、自宅学習のための電子リソース活用に関する案内サイトを作成した。さらに、蔵書検索システム（KULINE）にもバナーを設置し、資料の所蔵先確認と同時に開館状況等が確認できるようにした（2020 年 8 月）。

(2) 学内の図書室の閉室等が続く中、学生が附属図書館に集中することを避けるため、図書館以外の学習の場として、京大百周年時計台記念館内のホールに臨時自習室を開設した（2020 年 7～8 月）。

(3) 本学の卒業生から空気清浄機 100 台の寄贈を受け、学習環境の安全性向上のため、附属図書館と各学部図書館・室に、配置した（2021 年 1 月）。

(4) 自学自習環境の安全性確保のため、附属図書館の自習用の閲覧机にアクリル板の間仕切りを増設した（2021 年 1 月）。

(5) 在宅勤務の際にも図書館業務システムを使えるようにするため、自宅からの接続方法やセキュリティ要件を明示した。複数の図書館・室が実際に使用し、得られたノウハウや注意点や、自宅環境で業務を行う際の課題を職員間で共有した（2020 年 11 月～2021 年 3 月）。

(6) 図書館職員がコロナ禍での大学図書館サービスについて情報共有を行い、その結果を「新型コロナウイルス感染症防止対策から見えたこれからの図書館サービス報告書」（図書館機構業務改善推進会議新型コロナウイルス感染症対応状況調査チーム）として取りまとめ公開した（2021 年 1 月）。（http://hdl.handle.net/2433/261000）

令和２年度 京都教育大学附属図書館　特色ある取り組み

１．図書館利用・読書啓発の働きかけ

平成 27 年より「わくわく！ＫＹＯ[2]ライブラリー図書館活性化プロジェクト」をスタート。

図書館に行こう！→図書館を知ろう！→図書館で過ごそう！→図書館を使おう！→図書館をひろげよう！

●「図書館に行こう！」（＝親しみやすい場所にする）

➢就職担当部署との連携

・就活ゼミ、就職セミナーを研修・セミナー室で実施

・教採セミナー等で学修支援員を案内

●「図書館を知ろう！」（＝学生との距離を縮める）

➢学修支援員の配置（平成 27 年 10 月～継続）

理科、数学教育専修の大学院生をラーニングコモンズに配置。

対面授業再開後の学期中の月～金の午後に実施。対面授業休止中は図書館資料のレビューや相談事例などを掲示。

➢リクエストの強化

☆話題書の購入「リクエストと投票で話題の本を読もう」

学術研究・教養目的以外の学生からのリクエストおよび図書館員が選定した新刊、話題書等を対象に利用者が投票。得票数の高いものを購入。15 万円／年を予算措置。6 月以降、9 月を除く毎月実施。

☆選書ツアー（ブックハンティング）の実施

昨年までは京都市内の書店で実施していたが、今年度は 11 月にオンラインで実施　2 回生～院生 14 名が参加、162 冊購入。

☆通常リクエストの推進

前年水準を維持（113 件）

●「図書館で過ごそう！」（＝館内の環境整備、サービス向上）

➢日曜開館の継続実施

試験期の日曜日を開館　前期 2 回、後期は 2 回実施。

➢館内貸出物品の整備

消毒などの対策を行い、小型扇風機やブランケットの館内貸出を維持

●「図書館を使おう！」（＝資料・施設の利活用）

➢図書展示

・保育士試験対策コーナー（6/5～6/27、11/19～12/12）

・ブックレポート応援コーナー（10/28～11/28）

授業担当教員に協力し、ブックレポート課題向け図書およびそのレポートの展示

➢企画展示室等の利用による展示等の開催

学生や教職員による教科・学習研究等に関連する企画展示：4 件

➢英語多読資料の配置変更・授業に連携

授業担当教員に協力し、英語多読資料を The Kyoto Scale に対応した配架を継続、追加資料も対応。

●「図書館をひろげよう！」（＝他館、他部局等との連携）

➢京阪奈三教育大学との連携

現物貸借無料化、双方向遠隔授業パスファインダー

➢府立図書館との連携

K-Libnet 参加　2020 年度実績：貸出 39 件、借受 77 件

２．新型コロナ感染防止対策

緊急事態宣言による大学休止を受けて 4 月 21 日から 6 月 1 日まで臨時閉館した。オンライン授業開始に伴い、5 月 14 日から図書郵送貸出サービスを実施した。以降、対面授業休止期間は開館状況に関わらず、郵送貸出を再実施。(181 件申込、569 冊貸出）　また、対面授業休止中も短縮開館を維持し、オンライン授業等の受講場所としても利用された。

３．利用者教育

●初年次教育科目における新入生図書館ガイダンスの実施

Kyokyo スタートアップセミナー（1 回生前期）において、対面授業形式で図書館ガイダンスを実施。（6 月 29 日～7 月 30 日　全 7 回実施、13 専攻 323 名）

●各種講習会の開催

・論文検索講習会、データベース検索講習会

・オーダーメイド講習会

４．地域貢献

●読み聞かせ会「えほんのもり」

児童書コーナーでの幼児教育科の学生による絵本カードの作成、今月の絵本紹介など。定期開催していた学生による読み聞かせ会は中止された。

５．その他

●教育資料館「今月の逸品」　展示協力　附属図書館 1 階渡り廊下

6 月以降 2 ヶ月毎展示替　「農業､食料生産にかかわる教材掛図」などを展示

●教育資料館主催　第２回教育展の共催

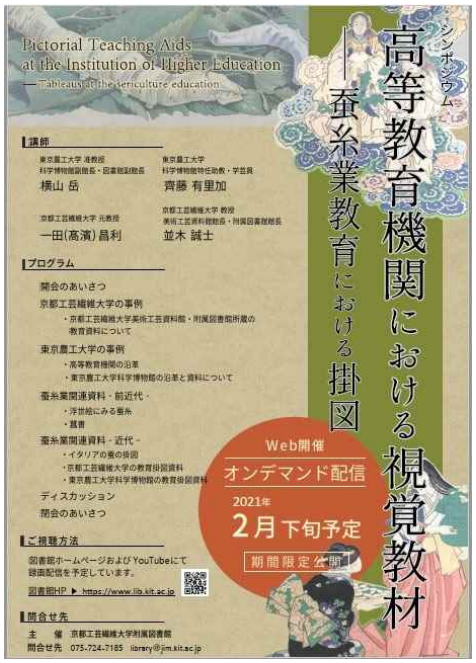
『「おかね」の歴史とデザイン～京都教育大学所蔵古紙幣の世界～』を附属図書館企画展示室で展示

11月19日（木）～12月25日（金）

京都工芸繊維大学附属図書館　令和２年度特色ある活動の報告

1. シンポジウム「高等教育機関における視覚教材 −蚕糸業教育における掛図−」

標記シンポジウムを令和３年２月５日(土)にオンラインで開催した。



講師:

東京農工大学准教授・科学博物館副館長　横山岳

東京農工大学科学博物館特任助教・学芸員　齊藤有里加

本学元教授　一田昌利

本学教授・美術工芸資料館館長・附属図書館館長　並木誠士

講演内容:

各大学の視覚教材事例

蚕糸業関連資料(前近代、近代)

講演後のディスカッションでは、活発な意見交換が行われた。

本シンポジウムは、本学附属図書館の YouTube チャンネルで令和３年３月４日(木)から令和３年５月７日(金)まで公開する。

2. ML(ミュージアム・ライブラリー)連携企画展示

平成 30 年度より、ML 連携企画と題して、美術工芸資料館と附属図書館が連携し企画展示を実施している。令和2年度は企画展示「日本の文様 −伝統から近代まで−」を実施した。

○開催期間

令和３年１月１２日(火)～２月２７日(土)

図書館が所蔵する文様関連資料の展示を行った。

展示資料

展覧会チラシ

2021 年 4 月

2020（令和２）年度大阪大学附属図書館の特色ある活動

◆教育･学習支援

〇コロナ禍において、主に以下の対応を行った。

- 図書館閉館中、図書の宅配貸出サービスを行った。
  ①大学院生・学部 4 年生（学位論文・卒業論文執筆に 必要な資料）：合計 938 件（3,058 冊）
  ②教職員（授業に必要な資料）：合計 93 件（328 冊）
  費用は、①については大学が負担、②については図書館が負担した。

- 生命科学図書館は、医学系のセンター館として、閉館中も医療従事者に対する文献提供を継続した。

- 新型コロナウイルスの感染が拡大している中、海外・国内のデータベース提供機関や出版社が、無償でのデータベース・電子ジャーナル・電子ブックの公開を進めた。それを附属図書館の Web サイトに整理して掲載した。

- 学生用電子ブックの整備を進め、利用が約 3 倍に増加した。

- 緊急事態宣言が終了した後は、感染対策を行いながら、図書館サービスを再開した。大学院生（TA）による LS（ラーニング・サポータ）の学習相談は、オンラインでの試行も順次開始し、4 館合計で 406 件の学習相談や質問に対応し、うち 74 件はオンライン相談であった。

◆研究支援

〇「大阪大学オープンアクセス方針」説明会を開催

2020 年 4 月に策定された「大阪大学オープンアクセス方針」を教員に周知するため、オンライン説明会を 10 回（57 名参加）開催し、その後さらに各部局の教授会等での説明会を 18 部局（うち 10 部局はオンライン）で開催し、約 750 名の参加があった。

〇エルゼビアセミナーを開催

「学術論文投稿推進セミナー」として、大阪大学経営企画オフィス URA 部門と共催で開催した。

日　時　：　2021 年 2 月 24 日（水）13:30～15:40
会　場　：　オンライン（Zoom ウェビナー）
参加人数：　43 名
（前半）「英語論文執筆セミナー～Scopus を使って効率的に～」庄子栄美氏
（後半）「SciVal を使って研究者/チームの研究力を分析する」高橋昭治氏
講師はいずれも　エルゼビア・ジャパン カスタマー・コンサルタント

◆社会貢献

○外国学図書館のキャンパス移転、新たな図書館へ

令和 3（2021）年 4 月に、大阪大学の箕面キャンパスが移転した。

附属図書館 外国学図書館は、1 月遅れて、箕面市立図書館と一体化した「箕面市立船場図書館」として、5 月 1 日に開館予定である。

吹き抜け部　パース図

5 月 1 日(土)　午前中　開館セレモニー
午後 1 時に開館

箕面市立萱野南図書館（蔵書約 11 万冊）および外国学図書館（蔵書約 60 万冊）の蔵書を併せ持った図書館となり、管理運営は大阪大学が無償で指定管理者として行う。この形は全国でも初めてのことである。

2020 年度は、開館に向けて、運用方針について箕面市立図書館との協議・調整を続け、各種規程等の整備、引っ越しや新図書館のサイン計画等の準備を行った。

◆その他

○ネーミングライツ導入

大阪大学とタワー パートナーズ セミコンダクター株式会社（以下、TPSCo）は、2021 年 1 月 25 日に、理工学図書館西館 1 階のラーニング・コモンズ及びラウンジへのネーミングライツ導入に関する協定を締結した。大阪大学が 2018 年 8 月に教育研究環境の向上や施設等の有効活用を目的にネーミングライツ制度を導入して以来、学内では 3 件目、附属図書館では初である。

2021 年 3 月 11 日（木）16 時 30 分より、西館 1 階 TPSCo Commons・TPSCo Lounge にて「理工学図書館ネーミングライツオープニングセレモニー」を開催した。

TPSCo Commons

TPSCo Lounge

セレモニーでのテープカット

○生命科学図書館へのアーカイブズ移転

箕面キャンパスにあった大阪大学アーカイブズが、キャンパス移転を機に吹田キャンパスの生命科学図書館内（4 階）に移転し、2021 年 1 月から事務を開始した。生命科学図書館の 4 階にあった図書館の事務室は 1 階に移動し、これまで 1 階と 4 階に分かれていた図書館事務室を 1 階に統合し、事務の効率化をはかっている。

令和 3 年 4 月 19 日

大阪教育大学附属図書館

2020 年度　大阪教育大学附属図書館の特色ある取り組み
（2020 年 4 月～2021 年 3 月）

１．新型コロナウイルス感染症対策の工夫

1) 一定条件を満たす学生に、大学の送料負担にて、貸出希望図書を郵送するサービスを行った。(5 月 11 日～6 月 12 日)

2) 予約により、図書等の貸出のみ、対面で行う館内サービスを開始した。(6 月 15 日～6 月 30 日)

3) 開館時間と入館者数を制限し、事前予約制の開館を実施した。(7 月 1 日～8 月 7 日)

4) 開館時間と入館者数の制限を続け、予約不要の開館を実施した。(8 月 11 日～)

5) 夏季休暇中の 1 人あたりの貸出可能冊数について、通常の 10 冊に加え、春季長期貸出として増数した 10 冊にさらに 10 冊を増数し、合計 30 冊とした。(7 月 31 日～10 月 15 日)

6) 開館にあたって、閲覧室等の日常的な消毒作業および、密接を避けるための座席利用制限を継続している。

7) 換気のため、空調効果の妨げにならないよう、終日 5～10cm ほど館内の窓やドアを開放している。

8) グループ学習室やラーニングコモンズを個人自習室として開放している。

9) 電子資料への学外からのアクセス方法をまとめた Web ページを作成し、コロナ対策として臨時に利用範囲の拡大措置があったデータベース等の情報についても閲覧できるようにした。

２．電子資料の利用促進

・ 6 月 2 日～8 月末日まで電子ブック試読サービスを導入し、利用・リクエストのあったものを購読した。

・ 価格上昇が続く電子リソース経費について、2021～2023 年度（3 年間）の固定化。Elsevier 社の ScienceDirect について、国立教育系大学図書館協議会サブコンソーシアム契約により価格上昇を抑制。雑誌 Nature の購読中止により、2020 年度並みの配分額を向う 3 年間維持することを役員協議会にて承認済み。

３．デジタル教科書への対応

・ 紙の教科書を網羅的に収集しつつ、文部科学省「GIGA スクール構想」の実現に向けた教員養成系大学の取組みとして、デジタル教科書利用環境の整備・維持及び、本学構成員の理解促進に向けた普及活動を行った。2021 年度は 2020 年度の約 2.4 倍の予算配分を受け、活用を推進する予定。

・　2020 年度実績

10～12 月：デジタル教科書基本操作について、学生サポーターによる支援実施

11，12 月：小学校算数デジタル教科書説明会の開催（2 回）

４．　企業との連携

・　教科書出版社の東京書籍とネーミングライツ契約を締結し、9 月から連携を開始（３年契約)。ラーニング・コモンズ「まなびのひろば」を「東京書籍 Edu Studio」と命名し、デジタル教科書体験コーナーを設置・提供。

・　エプソン販売との包括連携協定により、電子黒板機能の最新プロジェクターを設置。

・　Google と今後の連携を見据えた協力関係を構築。chromebook 20 台を購入。

５．授業支援

1）　改正著作権法第 35 条の施行（4 月 28 日）を受けた授業支援の一環として、教員による所蔵資料の送信可能（デジタル）化作業をサポートした。

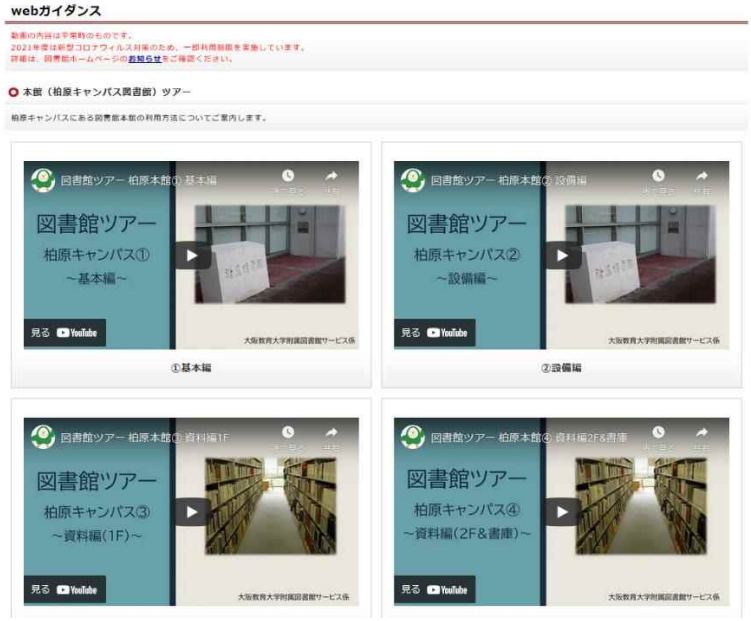
2）　天王寺分館にてオンライン教材にて、初等教育教員養成課程（夜間）1 年次への図書館ガイダンスを実施した。

６．サポートスタッフによる学習支援

・　10 月から、週に 3 時間程度、大学院生によるサポートスタッフ（計 3 人）をカウンター近くに配し、学習支援を行った。

７．図書館 web ガイダンスの公開

・　利用者が、いつでも、どこからでも視聴できるオンラインのツアー動画を公開した



８．全面査読制紀要の継続刊行

・　2019（令和元）年度から実施している査読付き紀要について、二回目の第 69 巻を 2 月に発行した。

９．教育資源のオープン化

「我が国における教育の充実と文化の発展に貢献し、地域と世界の人々の福祉に寄与する。」という大学の使命を果たすため、教育大学として保有する教育資源を広く国内外に発信する「オープンエデュケーションプラットフォーム」の環境を整備中。誰もが自由にアクセスできる教育資源を長期的に保存・公開する予定で準備している。

１０．イベント

・　7 月 1 日～17 日館内展示「学校安全特集」を実施
・　3 月 10 日人材育成企画「人事交流者の成果報告会」を実施。阪大、神戸大、大教大間の人事交流の成果を振り返ることで一年を総括し、各大学での学びの機会にもした。
・　3 月 19 日学内研修「デジタル時代の教科書著作権について」を実施

10. その他

・　2020 年度 2 月にシステムリプレイスを実施。

兵庫教育大学附属図書館 令和２年度活動報告

１ 新型コロナウイルス感染症対策

消毒液設置や座席間引き等の一般的なコロナ対策に加え、以下の対策を実施した。

・在宅学習支援情報ウェブページ(note.com)開設

・書籍消毒器の設置

・郵送貸出サービスの実施

２ オンラインサービスの展開

オンラインにより実施が可能な学習支援事業及び文化事業を実施した。

①文献探索講習会の Youtube 動画及び実践トレーニング教材を作成・公開し、クラスセミナーや大学院の授業で活用された。

②加東・神戸両キャンパスの学生を対象として、ZOOM による兵教オンライン文献探索相談会を開催した。

③教員と連携し、本を起点に自由な対話を楽しむ兵教オンライン読書会を企画・開催した。

①

②

③

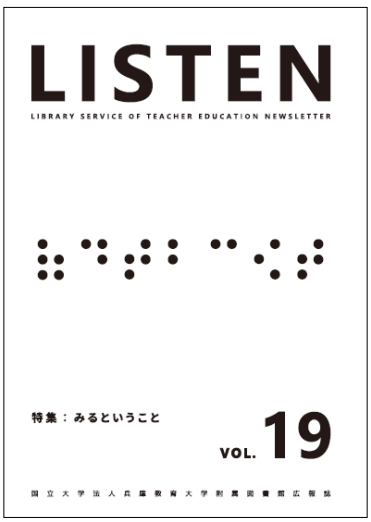
３ BLUE CLASS KOBE の広報活動再開

クラウドファンディングにより活動資金を調達し、準備を進めている BLUE CLASS KOBE について、2021 年 4 月 18 日・24 日の開催に向け、広報活動を行った。

4　視覚障害者へのサービス

本学に入学した視覚障害学生の情報利用環境を整備するため、学内規定を整備し、出版社へのデジタルデータ提供依頼や点字ボランティア団体への協力依頼などの活動を実施した。

また、国立国会図書館の視覚障害者等用データ送信サービスの送信承認館の申請を行った。



視覚障害学生を特集で取り上げた図書館広報誌 Listen Vol.19

5　教材文化資料館オンライン展示室の開設

インスタグラムをプラットフォームとして、教材文化資料館の過去 12 年、23 回分の企画展における展示物や展示風景等の画像アーカイブを公開した。

令和２年度　神戸大学附属図書館活動報告

Ⅰ.学修サポート

■　電子ブックリクエストキャンペーン

平成 22 年度より毎年実施している学生選書ツアーに代わり 10 月～11 月の 2 ヶ月間、学生がオンラインで電子ブックを試読し、希望図書をリクエストできるイベントを実施しました。53 名の参加があり、114 件の申込のなかから 68 点を購入しました。選定された図書は本学構成員が学内外からオンラインで読むことができます。

■　オンライン読書室

オンライン会議システムを使用して、学生・教職員が本を読む時間を共有する交流イベントを開催しました。
第 1 回：8 月 31 日（月）～9 月 4 日（金）
9 月 7 日（月）～9 月 11 日（金）
のべ参加者数は、21 名でした。
第 2 回：12 月 2 日（水）、9 日（水）、16 日（水）
のべ参加者数は、4 名でした。

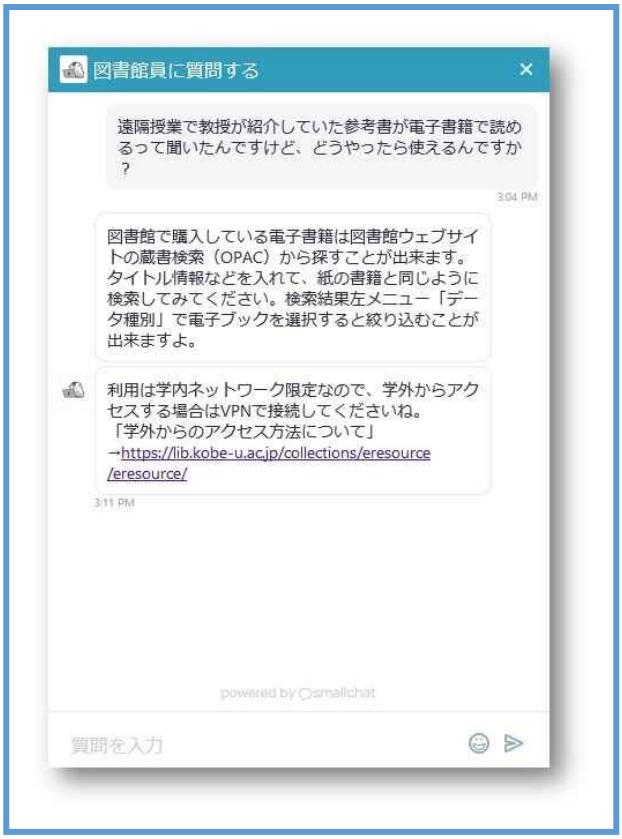
■　学生チーム「ULiCS」の活動

－「THE ULiCS TIMES」の発行
昨年度に続き、ULiCS の団体誌として Vol.7 （4 月）、8（10 月）を 10 月に発行しました。学内の各図書館での配布のほか、附属図書館 HP から PDF を公開しています。

－ ULiCS 文庫の展示
ULiCS の活動に関わる図書を文庫として展示するコーナーにおいて、一人につき一段分を担当して、自由なテーマで図書を選び展示しました。

【各テーマ】
・兵庫を舞台とした物語にスポットを当てた『兵庫を知る』
・「観る」ことではなく、「読む」ことに焦点をあてた『演劇を読む』
・ロシア、ウクライナ、バルカン半島など『新しい世界』を見つける
・手紙が鍵になっている図書『手紙を想う』

■ 来館できない利用者・遠隔授業への対応



－郵送による資料貸出

本学在籍中の学部生・院生で来館が難しい方に対し、郵送での資料貸出を行いました。

合計件数 314 件、合計冊数 1,250 冊

－チャットによるレファレンス受付

非対面型サービスとしてオンラインチャットで利用案内や文献の調べ方などの相談を受け付けました。期間：5/25～3/31　計 146 件

－「在宅学修・研究に利用できるコンテンツ」の周知

新入生向けおよび学生/研究者向けに在宅で学修・研究に利用できるコンテンツをまとめ、案内を行いました。また、教員向けには、遠隔授業の著作権等に関する情報をまとめました。

－遠隔授業サポート

初の遠隔授業全面実施に際して、学内に「遠隔授業サポートチーム」が設置されました。教員向けサポートのひとつとして、授業の「予行演習」を行うサービスが実施され、図書館職員 9 名が参加しました。期間：4/24～5/1　計 12 回

II. 社会連携・情報発信

■デジタルアーカイブでサンテレビジョンの震災映像を公開

阪神・淡路大震災の発生から 26 年を迎えるにあたり、震災文庫デジタルアーカイブにて、地元ローカルテレビ局である株式会社サンテレビジョン撮影・制作の阪神・淡路大震災関連映像「阪神・淡路大震災」（1995 年 6 月 29 日制作　19 分 06 秒）を 1 月 14 日に公開しました。

公開にあたっては、本学人文学研究科地域連携センターの協力により、デジタルアーカイブ学会が検討を進めている「肖像権ガイドライン案（第 3 版）」を参考に映像を確認し、サンテレビジョンと協議を行いました。

■ デジタル資料展
「古典籍さまざま～近世の出版物より～」

附属図書館では毎年、図書館所蔵資料を利用した展示会を実施しています。しかしながら本年度は通常どおりの実施ができないため、2018(平成 30)年度に開催した資料展の内容を、WEB 公開しました。科学・技術と文学・戯作の分野における江戸時代の刊本を中心に紹介しています。

奈良教育大学図書館　令和2年度の特色ある取り組み

令和3年4月

１．図書郵送貸出サービスの実施

新型コロナウイルス感染症の影響により大学の方針として学生の入構が原則として禁止されたため、図書館も臨時休館とした。学生の自宅学習の支援のため、図書の郵送貸出および所蔵雑誌等の複写物郵送提供サービスを実施した。1人5冊を上限としてメールで申し込みを受け付け、1人につき1回図書館が送料を負担して貸出を行った。当初は前期授業が終了する7月28日までの予定だったが、大学の入構制限が継続していたことから、夏季休業中までサービス提供期間を延長し、最終的に図書貸出は88件344冊、文献複写は5件108枚の利用があった。

２．教員依頼による図書館ガイダンスの実施

新型コロナウイルス感染症の影響で、1年生対象の必修授業「大学での学び入門」内で実施していた図書館ガイダンスが中止となった。後期に対面授業が一部再開されたことに伴い、教員の依頼を受けて授業内での図書館ガイダンスを5回実施した。

３．非対面授業の受講場所の提供

10月から対面授業と非対面授業が並行して実施されることになったため、対面授業のために登校した学生が合間の時間帯に非対面授業を受講できる場所として、図書館の閲覧席等を座席数を減らした上で提供している。特にラーニング・コモンズおよびグループ学習室といった、複数人で対話しながらの利用が想定される施設については、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から令和2年3月以降閉鎖していたが、後期授業開始以降は発声を伴う非対面授業が受講できる場として活用されている。

さらに、少人数の対面授業等の開催場所（34回）としても図書館は活用されている。この中には対面・非対面のハイブリッド型授業や、講師がオンラインで海外から参加した授業もあり、図書館員がスムーズな実施のために機器操作などのサポートを行った。

４．オンラインブックハンティング・電子ブック試読サービスの実施

例年実施していたブックハンティング（選書ツアー）を、書店ウェブサイトを使用したオンライン形式で実施した。書店に用意してもらったアカウントを、参加学生に配布して図書を選定してもらった。店舗訪問型よりも時間・場所の制約が少ないといった利点がある一方で、学生からは内容を確認したうえで選びたかったという声もあった。

また学生の自宅学習支援のために、電子ブックの試し読みサービスも実施し、期間中利用の多かった図書やシラバス掲載図書を中心に電子ブックを整備した。

５．授業関連図書コーナーの整備

シラバス掲載図書と各学問分野の初学者が最初に読んでもらいたい図書を揃えた授業関連図書コーナーについて、図書館運営委員会委員の協力のもと「初級」「中級」といったレベル付けを実施した。レベル付けされた図書には「初級」「中級」等のシールが貼られ、一部の本の帯には教員からの推薦コメントを掲載した。また、ブックガイド「特別支援教育の本棚」「国語教育の本棚」を作成し学生に配布した。

６．展示会の実施

図書館 1 階ライブらりギャラリーにて、図書館主催の展示会「正倉院模造復元品展」を実施した（10/26-11/7）。

また、「世界の絵本をのぞいてみよう」（10/5-10/16、国際交流留学センター）、「で・あいのある世界展」（1/20-2/10、「で・あいのある世界展」実行委員会・特別支援教育センター）、大学院「伝統文化発信法 II」成果展（2/15-2/19）、「#tankaの世界へ　喜多瑛優短歌展」（3/24-4/23、本学大学院生）といった学内の様々な展示企画にも活用された。

奈良女子大学近況(特色ある取組)

令和２年度に旧総合情報処理センターの区域及び２階閲覧室と書庫（開架）の一部を改修し、令和３年４月１日（木）リニューアルオープンした。

書庫資料の退避は最小限にし、自動書庫を活用して納め、できるだけ利用に支障が出ないよう工夫した。

・２階閲覧室に書架増設

・半個室席（ワークブース）を設置

・開架書庫内に閲覧席を設置

・可能な限り壁を取り払ってオープンなスペースにし、内装は地元材を中心に使用

・学習ブース（個室）を設置し、語学学習や遠隔授業、ウェブ面接に対応

・講義棟にあった情報処理教育室（2 室）を移設
　空き時間はオープン利用とし、対面授業の合間のオンライン授業受講や自習に対応

＊COVID-19 感染拡大防止を考慮した利用者サービス対応（2021.4.1 現在）

・開館は通常通り
・閲覧席にアクリルパーテーションを設置
・閲覧席には番号を付け、行動を追跡しやすくしている
・グループ学習は人数を制限して再開
・センター所蔵資料の複写・郵送を送料大学負担で実施（複写料金は実費、後払い）
・センター所蔵資料の郵送貸出を実施、令和 2 年 10 月からは送料を大学負担とした（返送料は自己負担）
・他機関から取り寄せた文献複写の転送サービス（送料大学負担）
・学生用プリンター（ポイント制）のポイント追加（100pt/月→200pt/月）を令和 3 年度も継続
　※1 枚 1pt（両面印刷でも 1pt）

（その他）　法人統合に向けて

　令和 4 年 4 月の奈良教育大学との法人統合に向けて準備を進めているが、現在のところ、奈良女子大学学術情報センター（学術情報課）は図書館部門と情報処理部門を分割する予定である。事務組織も分け、平成 25 年度の図書館・情報処理センター統合前と同様の体制にすることを検討しており、「附属図書館」が復活することになる。

（参考）H25（2013）.4　附属図書館と総合情報処理センターの事務組織を統合
　　H26（2014）.4　学術情報センター発足

和歌山大学図書館 2020（令和 2）年度特色ある活動の報告

令和３年４月１２日

１．新型コロナ・ウイルス禍における学習支援活動

１）LMS（Moodle）を活用したオンラインによる学習支援

・新入生ガイダンス用の図書館案内を LMS に公開（4 月）

・在宅でも利用可能な教育・研究用電子資料の紹介（4 月）

・新入生対象の図書館紹介動画を新規作成、LMS に公開（5 月）

・学生向け講習会を初めてオンラインで開催（2 講習会）（6 月）

・ラーニング・アドバイザー（大学院生）による学習相談をオンライン（Zoom・メール）で開始（7 月）

・自宅で入手可能な学術情報の探索方法を含む「レポート作成に必要な情報の探し方」を新たに作成、過去の講習会資料とともに LMS に公開（9 講習会）

２）学生向け郵送貸出サービスを図書館経費により実施

・5 月 8 日～22 日、6 月 3 日～16 日、7 月 6 日～8 月 3 日
（申込 218 件、貸出冊数 560 冊）

３）1 年次生（初めて大学に来た学生を含む）向けイベントにおける図書館案内

・11 月 21 日、22 日（458 名参加）

２．第 106 回全国図書館大会和歌山大会において、県内大学等図書館（和歌山地域図書館協議会）と協力し、大学・短大・高専分科会①・②を企画・運営

・公開期間：11 月 20 日～30 日

・動画再生回数：1,526 回

・テーマ・講演・報告

分科会①：ゲームを活用した情報リテラシー教育

分科会②：「特別コレクション」をどう活用するか

３．県内の学校図書館司書への支援活動

・那智勝浦町、古座川町、新宮市の学校図書館司書を対象にビブリオバトルについて研修会開催（12/23 オンライン開催）

2020(令和 2)年度奈良先端科学技術大学院大学附属図書館の特色ある活動の報告

1. 新型コロナウイルス感染防止対策について

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、政府の緊急事態宣言および本学の「NAIST 活動制限指針」により、4 月 17 日 17 時から当初 5 月 7 日まで、その後延長し 5 月 18 日 9 時まで附属図書館を閉館した。

学外者の利用は近隣地区の緊急事態宣言も考慮し、4 月 9 日から 10 月 1 日、および 1 月 14 日から 2 月 28 日まで制限した。

開館を再開した後も、カウンターにパーテーション設置、ドアの開放、1 日 2 回の卓上アルコール清掃、椅子の削減、シアターラウンジの完全予約を継続し、感染の拡大防止に努めている。

2. 博士論文に DOI 付与

本学リポジトリ naistar に登録されている博士論文に DOI (Digital Object Identifier)を付与した。

国立国会図書館で DOI を付与済みの 189 件、および令和 2 年度修了 14 件(3 月を除く)、2001-2015 年の遡及入力 908 件を登録した。令和 3 年度においても遡及を進める予定である。

3. 電子ジャーナル・電子ブック等の学外アクセス環境の整備

大学で契約する電子資料(電子ジャーナル・電子ブック・データベース等)に学外からアクセスできるようにするため、Shibboleth 認証対応を再確認し、追加設定した。認証のインターフェデレーションである eduGain に参加し、GakuNin を超えた認証利用が可能となった。

また Shibboleth 認証に対応のない出版社の学外アクセス方法を調査し、登録方法等のマニュアルを整備した。

4. 知の森コーナー

学内から募集したテーマや図書館職員が設定したテーマに沿った資料を選び、「知の森コーナー」として展示している。令和 2 年度の知の森コーナーのテーマは以下のとおり。

令和 2 年度知の森コーナー展示企画一覧

実施回	実施時期	テーマ
第 28 回	2020 年 3 月-8 月	デザインを活かす
第 29 回	2020 年 8 月-12 月	環境を考える
第 30 回	2020 年 12 月-2021 年 3 月	メメント・モリ
第 31 回	2021 年 3 月-	映画で語学

5. 附属図書館ニュースの発行

図書展示や講習会、図書館のサービス紹介等のお知らせをまとめた附属図書館ニュース「知の森へようこそ」の送信を開始した。「知の森コーナー」の更新のタイミングにあわせて、年 3 回の送信を予定している。

2021 年 4 月

2020 年度 国際日本文化研究センター図書館活動報告

1. 『日文研図書館ニュースレター』の発行

新たな広報活動として、また、利用者とのコミュニケーションを図る手段として、日文研の所蔵資料や、オンラインで使えるデータベース等を紹介するニュースレターを本年 5 月から発行している。主として日文研所属者へメールで配信しているが、同内容を図書館のホームページにも掲載している。

2. 図書館総合展・図書館見学会_ONLINE への参加

11 月 1 日～30 日にわたって開催された「図書館総合展_ONLINE」の特別企画のひとつである「図書館見学会_ONLINE」に参加し、職員が企画・出演・製作した図書館紹介動画および館内 MAP、館内写真などを公開、ヴァーチャル見学会を実施した。

また、図書館案内動画は、YouTube の日文研チャンネルでも公開しており、国内外の図書館関係者、研究者へ日文研を広く知ってもらうよい機会としている。

https://2020.libraryfair.jp/online_tour/2020/37
（本稿作成時 2021.4.6 においては視聴可能）

3. 浪曲 SP レコードデジタルアーカイブ公開

本年 6 月、明治 30 年代から昭和 30 年代までに出版された、約 10,000 枚（約 5,500 タイトル）の浪曲（浪花節）SP レコードのデジタルアーカイブを新規公開した。公開音源には、日本で初めて録音された浪曲レコード･浪花亭愛造「後藤伏太郎の伝」と「東京より東海道駅名尽し」など、歴史的に貴重なものを多数含む。著作権保護期間満了分の音源に加え、全レコードの盤面画像、番付・ポスター等の関係資料画像をインターネット公開している。（https://kutsukake.nichibun.ac.jp/rsp/）

4. 日文研一般公開での図書館所蔵資料の展示

歌川芳虎画「麻疹後の養生」

11 月 13 日から日文研ウェブサイトにて開催された「日文研一般公開」にて、所蔵資料のオンライン展示を行った。今年の一般公開テーマである「経験と記録～世界はいかに疫病と対峙してきたか」にあわせて、図書館で所蔵する日本医療文化史コレクション「宗田文庫」と西洋古典医学史コレクション「野間文庫」から、『麻疹後の養生』など医療関係の貴重資料をオンラインで公開した。

5. テレビ・ラジオ番組の脚本資料の受贈

一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムより、同コンソーシアムが収集してきた放送脚本資料のうち、NHK ラジオドラマの脚本を中心とする約 800 冊が寄贈された。放送番組については、映像や録音が残っていないものが多く、脚本は日本の放送文化を研究する上できわめて貴重な資料となる。

今後数年にわたり、脚本 5,500 冊超の寄贈を受けることとなっており、順次整理し利用に供していく予定である。

6. 美術館・博物館等への図書館所蔵資料出展

■「京都からやってきた妖怪たち～国際日本文化研究センターコレクション」（湯本豪一記念日本妖怪博物館（三次もののけミュージアム）、10 月 15 日～12 月 22 日）『妖怪四季風俗絵巻』ほか 150 点

■「CHINA GRAPHY－日本のまなざしに映った中国」（大阪大学総合学術博物館、10 月 31 日～2021 年 1 月 30 日）所蔵鳥瞰図・絵葉書等の複製パネル 71 点

■「明石博高と島津源蔵～京の近代科学教育の先駆者たち～」（※コロナ対策のため入館展示は中止し、日文研ウェブサイトでのオンライン企画展として開催。2021 年 3 月 30 日～9 月 30 日）神田外語大学、島津製作所創業記念資料館との共催。宗田文庫コレクションを中心に、明石博高の旧蔵品など約 100 点

7. ILL の受付料金の一部減額の実施

新型コロナウイルス感染症の拡大防止対応の長期化に伴い、外部者来館利用の休止期間中、当館所蔵資料の閲覧および研究のための共有を補う代替手段のひとつとして ILL 受付の際の請求金額の一部減額を実施している。本年 10 月より、当面の間、当館が受け付ける相互貸借・文献複写の請求金額に、当館からの発送にかかる郵送料を加えないことにより事実上の減額としている。

8. OCLC WorldCat へのデータ追加登録

OCLC WorldCat（2017 年度登録開始）へ、昨年度後半から今年度にかけて増加した書誌・所蔵レコード約 9500 件について、追加登録を行った。

以上

令和 2 年度国立民族学博物館図書室の活動について

1．新型コロナウィルス感染対策

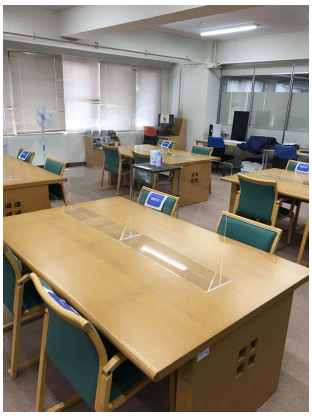
標記について、以下の対策を実施した。

(1) 除菌ボックスを用いた、資料への紫外線照射

(2) 閲覧室へのアクリルパーテーション、除菌ティッシュ、手指消毒用アルコールの設置

(1) 除菌ボックス

(2) 閲覧席のパーテーション



2．資料の整備

・マイクロ資料の遡及入力について、図書 2,562 件、新聞雑誌 4 タイトル(125 件)の遡及入力を行った。

・リポジトリ次期システムの JAIRO Cloud(WEKO3)移行作業について、移行に備え著者名データの修正等データの整備を行った。（移行は次年度に延期）

3．博物館事業への図書資料の提供

博物館展示事業のために、様々な言語の聖書等合計 29 点の図書資料を提供した。また、博物館広報誌「月刊みんぱく」へ掲載のために図書資料の画像 2 点を提供した。

4．研究アーカイブズ資料の受入・目録公開

令和 2 年 2 月「菊沢季生アーカイブ」資料 1 点追加受入（民族学資料）

以上